

平成 21 年度

大阪市内埋蔵文化財包蔵地  
発掘調査報告書

2011.3

大阪市教育委員会

(財)大阪市博物館協会大阪文化財研究所

## 例 言

1. 本報告書は平成 21 年度の国庫補助事業による大阪市内埋蔵文化財発掘調査の概要を集めたもので、平成 22 年度事業により作成した。
2. これらの調査は大阪市教育委員会が(財)大阪市博物館協会大阪文化財研究所に委託して実施したものである。
3. 本報告書の執筆は(財)大阪市博物館協会大阪文化財研究所 南秀雄の指揮のもとに各々の発掘担当者が担当した。その氏名は各報告書に記してある。
4. 本報告書の編集は大阪市教育委員会文化財保護担当において行った。

## 目次

### I 北区

天神橋遺跡発掘調査 (TJ09-3) 報告書	3
豊崎遺跡発掘調査 (TS09-2) 報告書	11

### II 中央区

大坂城跡発掘調査 (OS09-3) 報告書	17
大坂城跡発掘調査 (OS09-8) 報告書	23

### III 西区

土佐堀 1 丁目所在遺跡発掘調査 (TL09-1) 報告書	29
-------------------------------	----

### IV 天王寺区

大道 1 丁目所在遺跡発掘調査 (DA09-2) 報告書	37
堂ヶ芝廃寺発掘調査 (DS09-2) 報告書	45
難波京朱雀大路跡発掘調査 (NS09-3) 報告書	53

### V 淀川区

宮原遺跡発掘調査 (MH09-3) 報告書	61
西中島遺跡発掘調査 (WN09-2) 報告書	67
西中島遺跡 B 地点発掘調査 (WN09-3) 報告書	73

### VI 旭区

森小路遺跡発掘調査 (MS09-2) 報告書	81
森小路遺跡発掘調査 (MS09-4) 報告書	85

### VII 阿倍野区

阿倍寺跡発掘調査 (AB09-2) 報告書	99
-----------------------	----

### VIII 住吉区

苅田 4 丁目所在遺跡発掘調査 (KL09-3) 報告書	109
山之内遺跡発掘調査 (YM09-3) 報告書	117

### IX 東住吉区

田辺 4 丁目所在遺跡発掘調査 (TQ09-2) 報告書	123
田辺 4 丁目所在遺跡発掘調査 (TQ09-4) 報告書	127

# I 北 区



天神橋遺跡発掘調査(TJ09-3)報告書

- ・ 調査個所 大阪市北区西天満3丁目9-1・9-3・9-6
- ・ 調査面積 42㎡
- ・ 調査期間 平成21年6月4日～6月8日
- ・ 調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・ 調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、松本啓子

〈調査に至る経緯と経過〉

今回の調査地は、国道1号線と阪神高速道路守口線が交差する場所から南西約100mの地点である(図1)。大川から流れを北へと引き込む運河に面している場所であり、弥生時代から近世にかけての埋蔵文化財包蔵地である天神橋遺跡の西部に位置する。

近年、付近で行った発掘調査では、古墳時代～近世の遺構・遺物が発見されている。また、文献資料や絵図などとの比較から、本調査地は近世の大坂城下町を構成する大坂三郷のうちの「天満組」に属し、大阪天満宮を中心に栄えた商家や町屋、武家屋敷などが建ち並んでいたとみられる場所である。

工事に先立って行った大阪市教育委員会による試掘調査で、少なくとも地表下約3mの間に、豊臣期～徳川期前期とみられる遺物包含層と、その下に盛土層が見つかった。そこで、関係諸機関と協議を行い、地層の状況とともに、遺構や遺物の年代と分布を明らかにし、さらには、この地域の歴史の変遷を復元するための基礎資料を得ることを目的として本調査を行うことになった。

調査は図2のように東西7m、南北6mの調査区を設定し、地下約2mまでの現代～近代の地層を重機によって除去したのち、平成21年6月4日から調査を開始した。地表下約3mまで間を、各地層毎に人力で掘り下げて遺構・遺物を確認し、図面・写真などの記録を取った。6月8日に機材類の撤

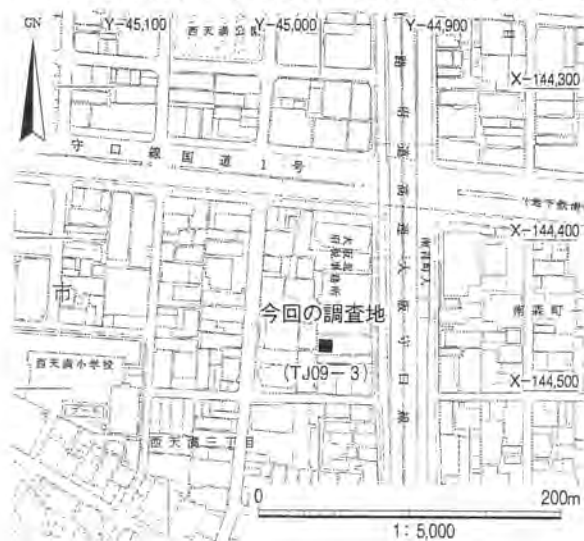


図1 調査地位置図



図2 調査区位置図

収を含め、現地におけるすべての作業を完了した。

なお、本報告で使用した方位は世界測地系による座標北で、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文図中ではTP+○mと記している。

〈調査の結果〉

1. 層序(図3・4)

本調査地における層序は以下のとおりである。

第1層はにぶい黄色の礫質砂の盛土(整地)層である。最大層厚は20cmである。

第2層は盛土層で、第2a～第2c層の3層に区分した。第2a層が暗黄灰色シルト質粘土層、第2b層が灰褐色シルト質砂層、第2c層が灰褐色砂質シルト層である。最大層厚は第2a層が15cm、第2b層が100cm、第2c層が40cmである。調査区北側に第2c層を積んだのち、第2b層を南側に積み、全体を第2a層を覆っており、第2a層は固くしまっている。

第3層は調査区全体で見られた砂やシルトを主体とした盛土層で、第3a～第3g層の7層に区分した。最上部の第3a層が最大層厚80cmともっとも厚く、礫を含む黄褐色シルト質砂層である。なお、第3a層中で地表下3mの深さに達したため、以下の地層は部分的に深く掘って観察した。第3b層は最大層厚25cmの褐色砂質シルト層で礫を含む。第3c層は最大層厚25cmの明黄褐色シルト質砂層で粘土や礫・炭を含む。第3d層は最大層厚15cmのにぶい黄褐色の粘土質細粒砂層で炭や礫を含む。第3e層は最大層厚15cmの黄灰色細粒砂質粘土層で礫や酸化鉄を含む。第3f層は最大層厚30cmのにぶい黄褐色の粘土質細粒砂層である。第3g層は最大層厚10cmの灰褐色細粒砂層で炭を含む。

第4層は灰黄褐色極細粒砂質シルトの盛土層で、層厚は10cm以上ある。湧水のため、以下の地層は確認していない。

2. 遺構と遺物(図5～7)

第3層の盛土層の遺物のうち、肥前陶器碗3・4、肥前磁器染付鉢6と、中国製の漳州窯系青花鉢5と青磁碗1を図6に示した。これらは17世紀後半までのもので、第3層による整地の時期を示す。

第3層の上半部は、上位にある第2層による整地によって大きく失われたようで、第3層上面では

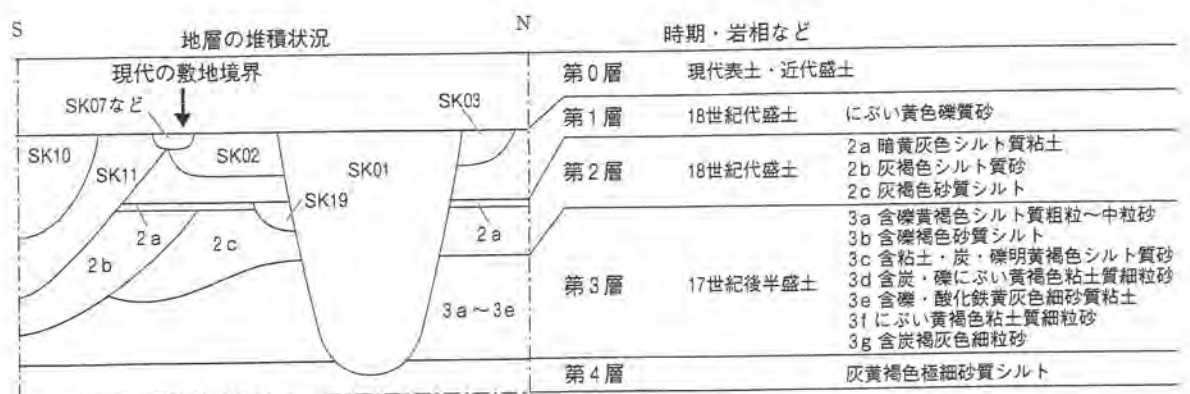
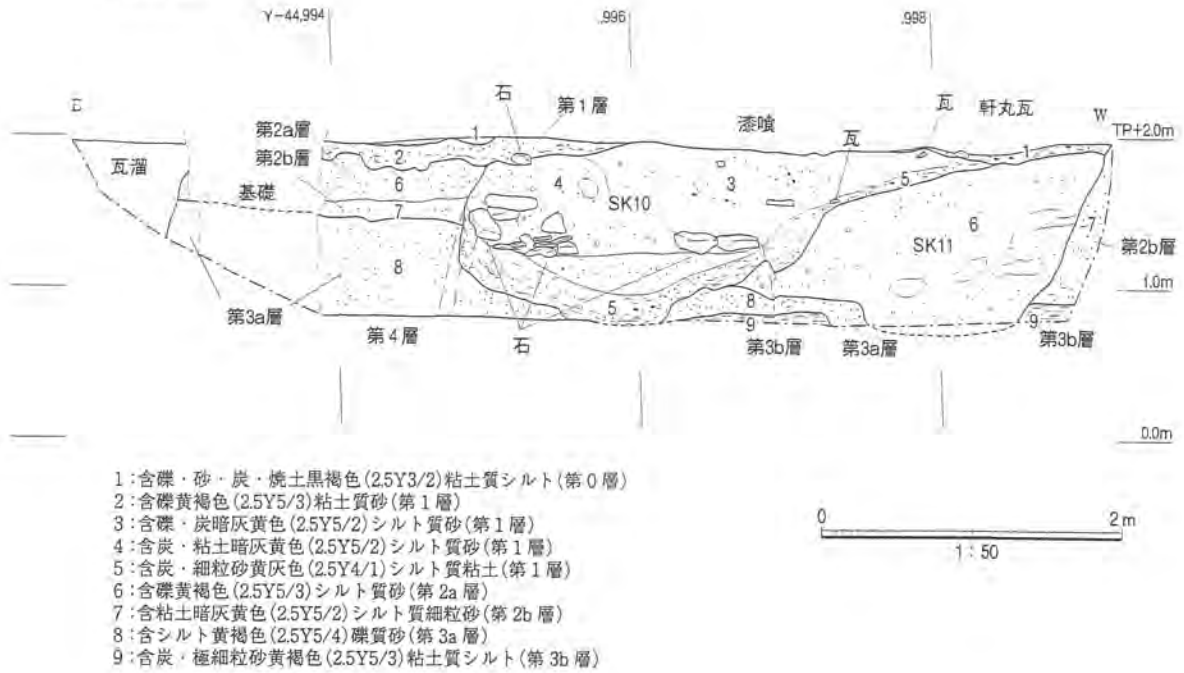


図3 地層と遺構の関係

南壁断面図



西壁断面図

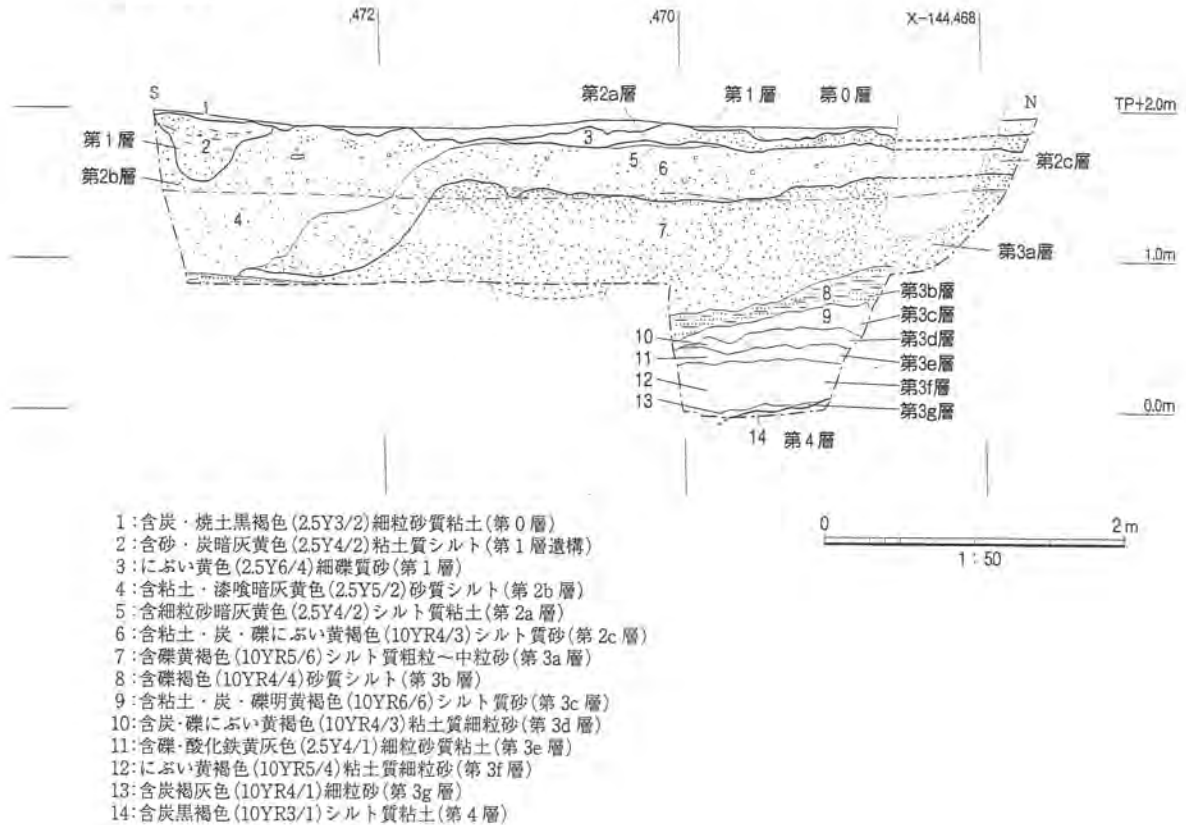


図4 地層断面図

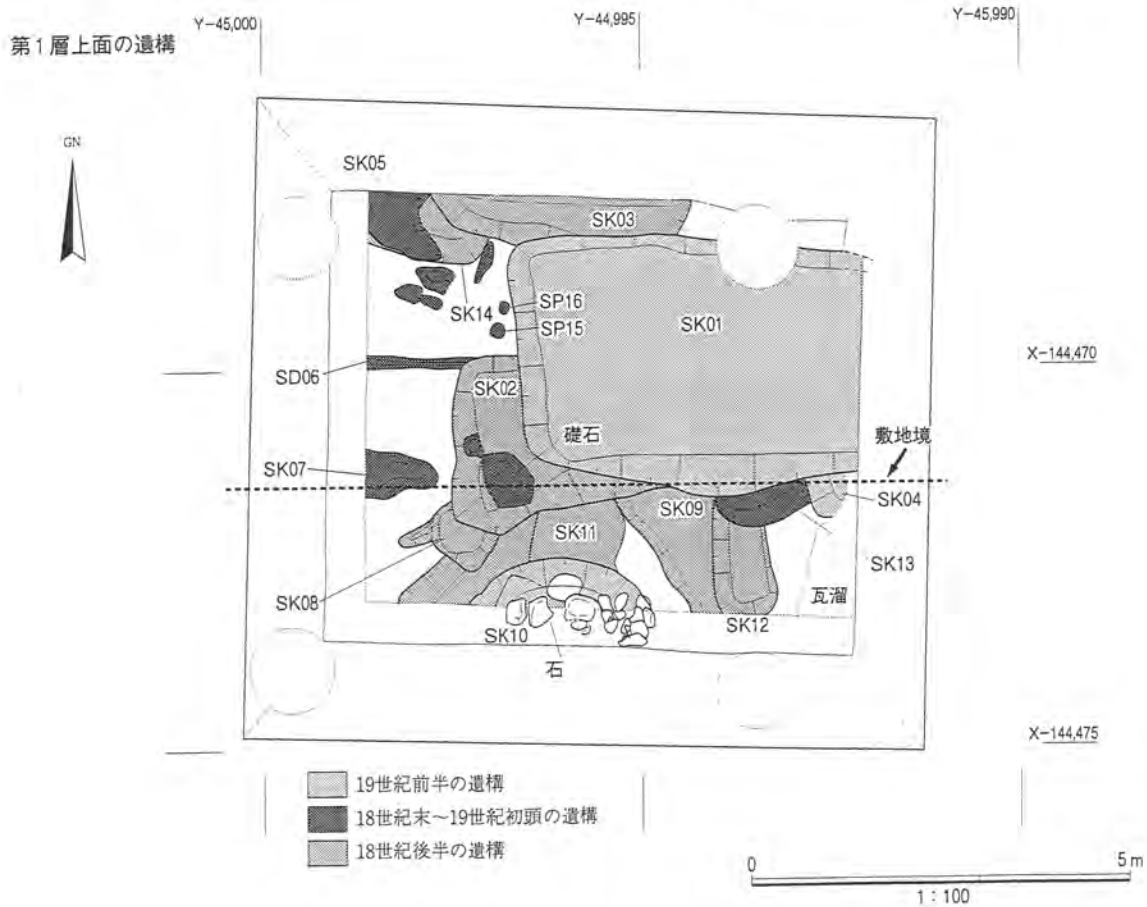
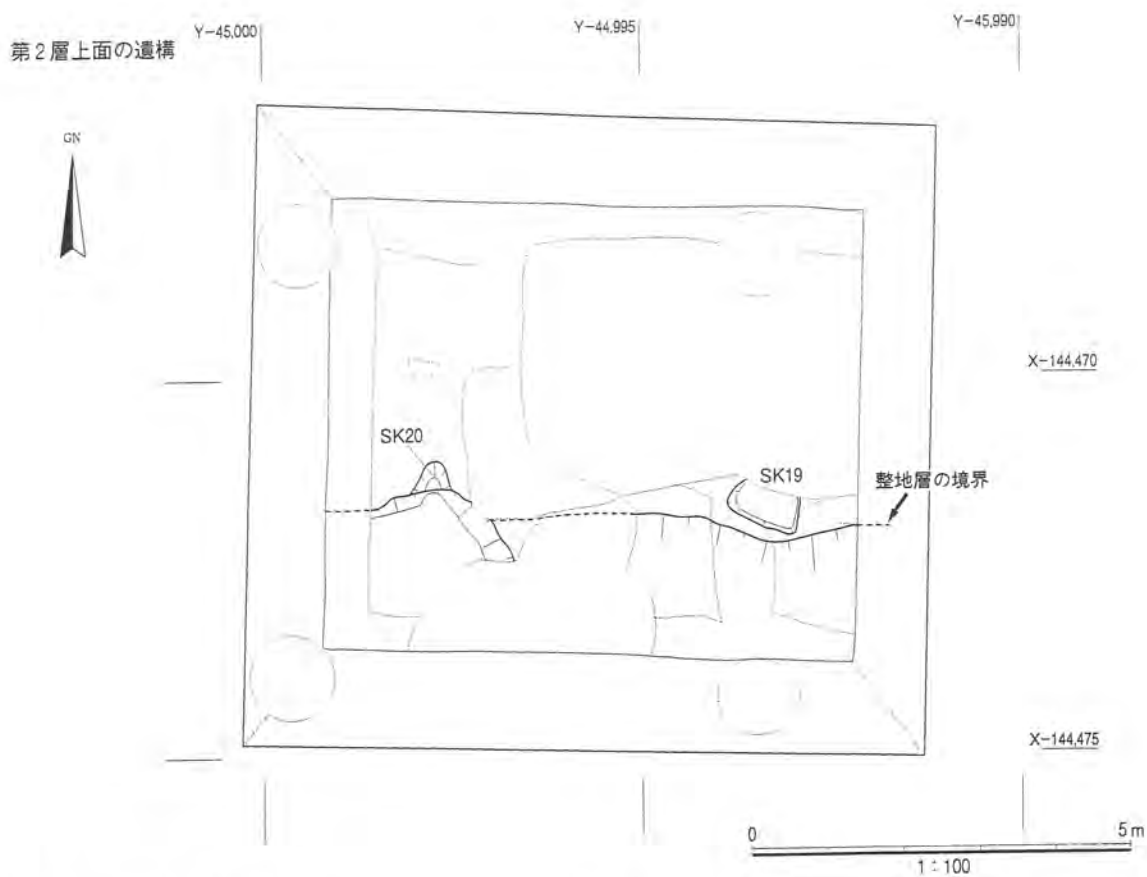


図5 遺構平面図

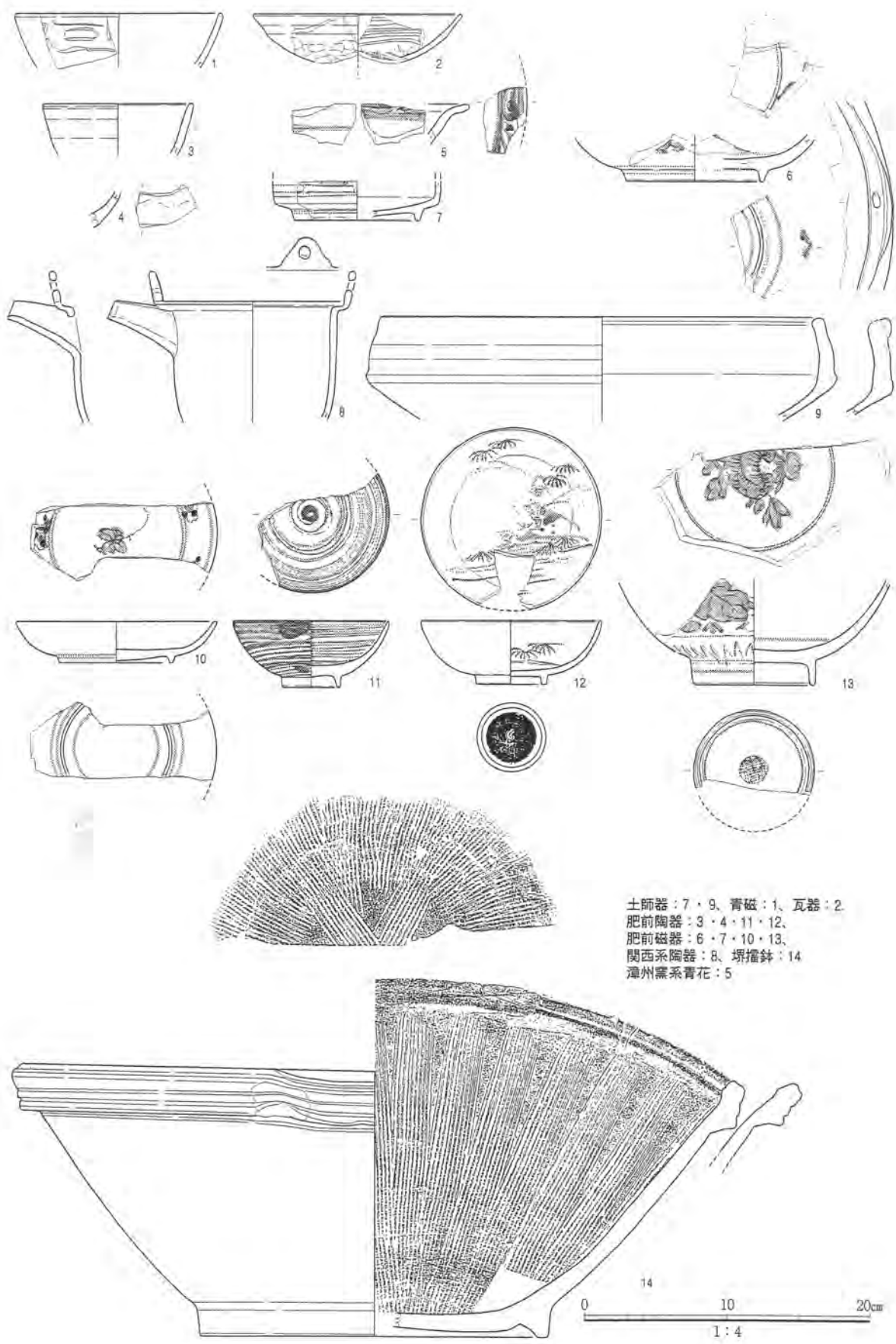


図6 出土遺物実測図

第3層(1・3~6)、第2層(7)、SX11(2・8・9)、SK12(10~12・14)、SK14(13)





図7 現代の地図と明暦元(1655)年の絵図における本調査地の位置

遺構は検出されなかった。

第2層の遺物は少ないが、第2b層から出土した肥前磁器火入7を図示した。18世紀代のものとみられ、第2層の整地の時期を示す。

第2a層が固くしまった地層で、上面も比較的平坦であることから、第2a層上面近くに生活面があったものと考えられたが、遺構はわずかに土壌と小穴が検出されたにすぎない。SK19は東西1.0m、南北0.7m以上、深さ0.1mの浅い土壌で、土師器皿の破片が出土した。SK20は東西0.5m、南北0.5m以上、深さ0.3mの小穴である。どちらの埋土も灰色砂質シルトである。

第2b層と第2c層の盛土による整地の境界ラインは東西方向で(図5上段)、この西延長線上に現代の敷地境がある。また、このラインは後述の本調査地第1面の敷地境ともほぼ同じ位置にある。

第1層からは破片のため図化し得なかったが、18世紀代の遺物が出土した。

第1層上面では溝や土壌、瓦溜め、小穴、礎石などの遺構が見つかった(図5下段)。これらの遺構は調査区全面に分布していて、いずれも徳川期後半に属する遺構である。遺構の埋土や切り合い関係、出土遺物から、18世紀半ば・18世紀末～19世紀初頭・19世紀前半と大きく3つの時期に分けることができる。

18世紀半ばの遺構は炭や焼土・礫を多く含む暗赤褐色粘土質砂を主体とする埋土で、瓦溜SK02・03や土壌SK08・09・11・12・14などがある。

また、18世紀末～19世紀初頭の時期の遺構には溝SD06、土壌SK05・07・13、小穴SP15・16がある。これらの埋土は暗灰黄色礫質砂で、炭や焼土を含む。これらの遺構のうち、礎石を挟んで配置された2つの土壌SK07・13は東西一列に並んでいる。これらをつなぐ東西方向の軸線は、先に述べた第2層の敷地境のほぼ真上の位置にあって平行しているので、この敷地境は18世紀代から現代まで踏襲されてきたものと考えられる(図2)。

なお、19世紀前半の瓦溜SK01・04や土壌SK10もこの敷地境界線に平行して掘られていた。

第1面の遺構出土の遺物のうち、SK11出土の瓦器碗2、土師器焙烙9、京焼爛鍋8と、SK12出土の肥前磁器皿10と、肥前陶器碗11と赤絵を上絵付けした京焼風の肥前陶器碗12、堺播鉢14、SK14出土の肥前磁器染付鉢13を図6に図示した。これらは18世紀前半～半ばまでのものである。

ところで、江戸時代を通じて絵図では、本調査地東面の運河や大阪天満宮の敷地の形はほとんど変化なく描かれており、現在の地図でも運河と天満宮の位置関係はこれらの絵図とよく似ている(図7上段)。そこで1655年の『明暦元年大坂三郷町絵図』に本調査地の位置を試みに落としてみると、松平氏と本多氏が南北に屋敷を構えていた区画の中に入る(図7下段)。このことから、今回検出された敷地境はこの両家の屋敷境に相当するのかもしれない。

#### 〈まとめ〉

今回の調査では、徳川初期から後半の土地利用の変遷を確認することができた。また、整地の境界とみられる区画施設や盛土の違いが認められたことから、本調査地周辺に江戸時代の地割を復元するための手がかりを得ることができた。

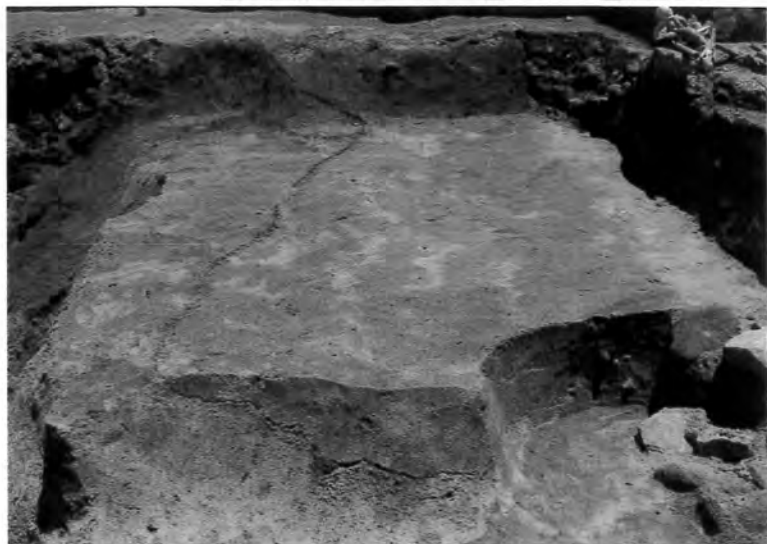
調査地全景  
(第2層上面、東から)



第2層以下の地層  
(東から)



第2層の整地境界  
(西から)





## 豊崎遺跡発掘調査(TS09-2)報告書

- ・調査箇所 大阪市北区豊崎6丁目13-3
- ・調査面積 9 m<sup>2</sup>
- ・調査期間 平成21年7月6日～7月8日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、高橋工

### 〈調査に至る経緯と経過〉

豊崎遺跡は淀川の三角州上に立地し、1983年、豊崎神社境内で地下1mの地層から古墳時代前期(3世紀後半～4世紀頃)の土器が出土したことによって発見された(NR83-1次調査)。その後の調査では、本調査地の東約30mのTS06-1次調査で古墳時代の土器の他にも中世の瓦や青磁などが出土しており[大阪市文化財協会2007]、西国街道など交通網の発達によって栄えた集落が近隣に存在することも想定されてきた(図1)。

今回の調査地では、大阪市教育委員会による試掘調査で地下約0.8～1.0mに遺物包含層が発見され、本調査が行われることとなった。また、1983年の調査地にも近いことから古墳時代の遺構・遺物が発見されることも期待された。調査区は敷地北半部に設定し(図2)、近代以降の地層(第1・2層)を重機によって除去した後、近世以前の地層である第3・4層と第5層の一部を人力で掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。本報告書で用いた水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、図中ではTPと省略した。本書で用いた指北記号は図1は座標北、その他は磁北を示す。



図1 調査地位置図

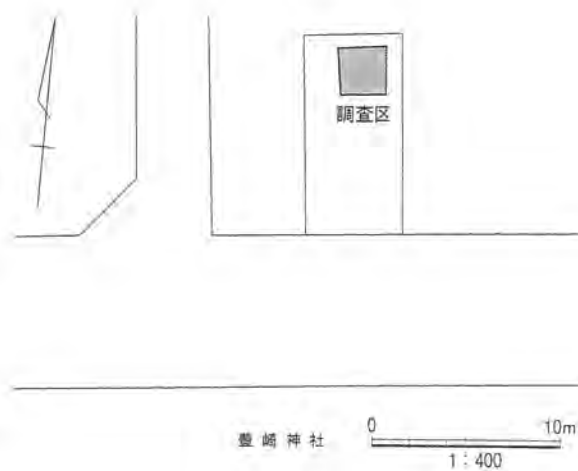


図2 調査区位置図

〈調査の結果〉

1. 層序(図3)

第1層：おもに暗灰色中粒～粗粒砂からなる現代の盛土層である。層厚は最大で45cmである。上面の標高は約TP+1.2mである。

第2層：黒褐色細粒～中粒砂からなる盛土層で、層厚は最大で25cmである。板ガラスなどを含み、近代以降の地層である。

第3層：黒褐色小礫混りシルト～細粒砂からなる盛土層で、層厚は35～55cmである。本層からは、肥前磁器蓋1・染付碗2、瀬戸美濃焼香炉3・碗4、関西系陶器鍋5などが出土した(図4)。コバルト色の呉須で絵付けをした肥前磁器1からみて19世紀の地層である。本層の上面で近代の便所跡とみられるSX01・02が検出された。

第4層：暗褐色粘土質シルト～細粒砂からなる整地層である。層厚は18～42cmで、北側に向って上面の標高が低くなり、層厚も薄くなっていた。近世の瓦や陶器細片が出土したが、詳しく年代が判定される遺物は出土しなかった。本層の上面で溝SD03が検出された。

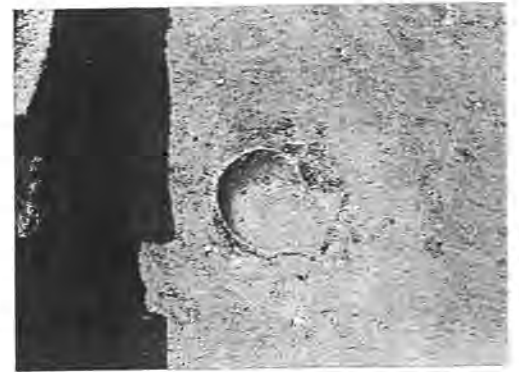


写真1 SX01 窕検出状況

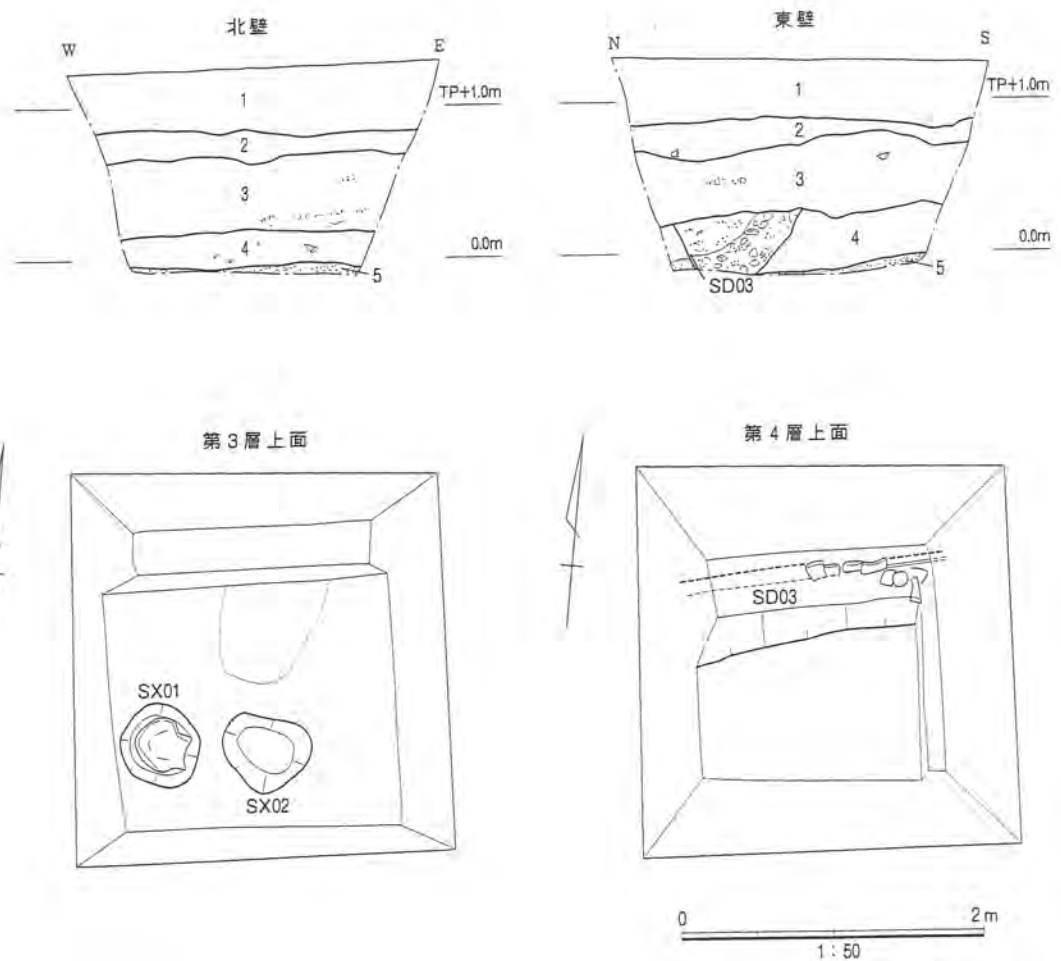


図3 地層断面図・検出遺構平面図

第5層：暗オリーブ褐色細粒～粗粒砂からなる河成層で、上面の標高は最高TP-0.05mで、層厚は5cm以上である。遺物は出土せず、時期は不明であるが、TS06-1次調査ではTP-0.3mで古墳時代前期の遺物を含む河成層が検出されており、これと同層準の可能性はある。

## 2. 遺構と遺物(図3・4)

遺構は第3・4層の上面で検出された(図3)。

SX01 第3層上面で検出された平

面円形の落込みである(写真1)。直径は約0.5m、深さは0.1mほどで、上部は破壊されている。第2層(黒褐色細粒砂)で埋められていた。備前焼甕の底部が据えられていた。

SX02 SX01の東に並んで検出された平面円形の落込みで、深さは0.1mほどである。埋土はSX01と同様であるが遺物は出土しなかった。SX01・02は近代の便所であろう。

SD03 第4層上面の調査区北壁沿いに検出された東西に延びる溝である。幅は約0.5m、深さは約0.5mで、暗褐色粘土質シルトや細粒砂で埋められていた。溝の北側の斜面の東部には井戸瓦や薄い木の板が内側から当てられていた。斜面の崩壊を防ぐためのものであろう。

遺構埋土からは京・信楽系陶器皿6、肥前磁器青磁染付蓋7、瀬戸美濃焼火入8が出土した。18世紀後半の遺構である。

## 3. 本調査地の土地利用について

上面で東西方向の溝SD03が検出された第4層は近世の盛土層で、上面の高さは試掘調査地で地表下0.8m、本調査地北端では同1.1m(TP+0.2m)と北に向かって低くなっている。両地点間の距離は5～7mの間で、この短距離の間で北へ下がり、低い部分でSD03が検出されている。SD03の方向は豊崎神社敷地の北辺と北側道路に平行しており、道路に面した本調査地内に建物があったとすると、調査箇所はその裏手部分に当たることになる。近世の大坂城下町では、背中合わせの町屋の裏手に下水施設が設けられることが多く、今回発見した溝も同様な機能を有していた可能性がある。

## 〈まとめ〉

今回の調査では、近世の盛土層(第3・4層)と古墳時代前期と判断される河成層(第5層)を検出し、近世後期の溝を発見した。溝は小規模ながら大坂城下町の「背割り下水」のような機能をもっていた可能性もある。調査地周辺においてこの時期の居住地のようすは不明な部分が多いが、今後の調査の進展によって、町並像の復元の中でこの溝も再評価されるべきであろう。

期待された古墳時代前期の遺構・遺物は発見されなかったが、同時代とみられる河成層は存在して

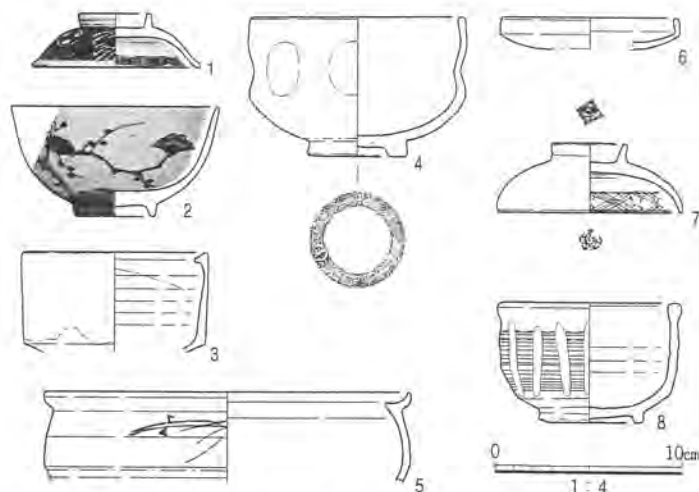


図4 出土遺物実測図  
第3層(1～5)、SD03(6～8)

おり、その期待は今後にも継続されている。

引用・参考文献

大阪市文化財協会2007、『豊崎遺跡発掘調査(TS06-1)報告書』

東壁地層断面  
(西から)



第4層上面  
検出遺構  
(南から)



SD03(東から)



## II 中 央 区

大坂城跡発掘調査(OS09-3)報告書

- ・調査箇所 大阪市中央区森ノ宮中央1丁目403-2・403-12の各一部
- ・調査面積 25㎡
- ・調査期間 平成21年4月27日～5月1日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、高橋工

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は豊臣氏大坂城惣構の東辺部に当り、縄文～弥生時代の貝塚が発見された森ノ宮遺跡の東に位置する。地形的には上町台地の東縁が沖積平野に埋没する箇所に立地し、猫間川の氾濫原に当る。地下鉄森ノ宮駅駅舎部の調査では、河内湾から河内潟・河内湖を経て陸化してきた過程が明らかになっている[大阪市文化財協会2002a]。周辺で行われた発掘調査は、南側ではMR85-3、OS93-7・94-20次調査、北側ではMR94-6次調査などがある(図1)。MR85-3次調査では飛鳥時代の道路側溝とされる溝が、OS93-7次調査では奈良時代末期の井戸が、94-20次調査では弥生～飛鳥時代の溝や豊臣前・後期の遺構群が、MR94-6次調査では多くの遺物が出土した奈良時代の流路などが発見されている[大阪市文化財協会2002b]。このように、周辺には原始から古代や近世にかけての豊富な遺構・遺物が包蔵されている。

調査地においては、大阪市教育委員会による試掘調査で地表下0.4～2.0mにかけて中世～近世とみ

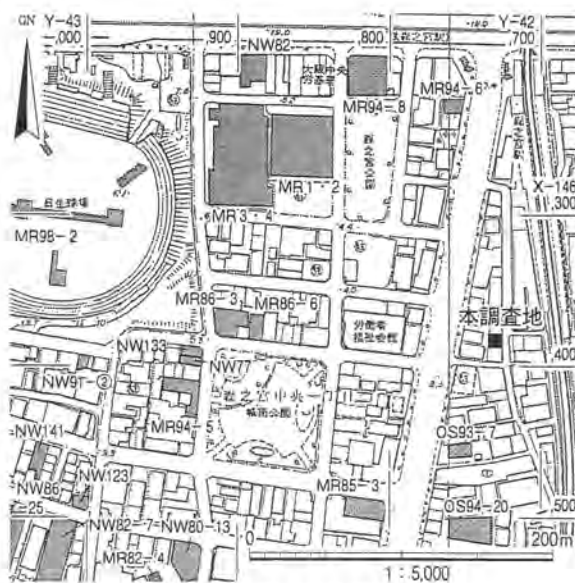


図1 調査地位置図

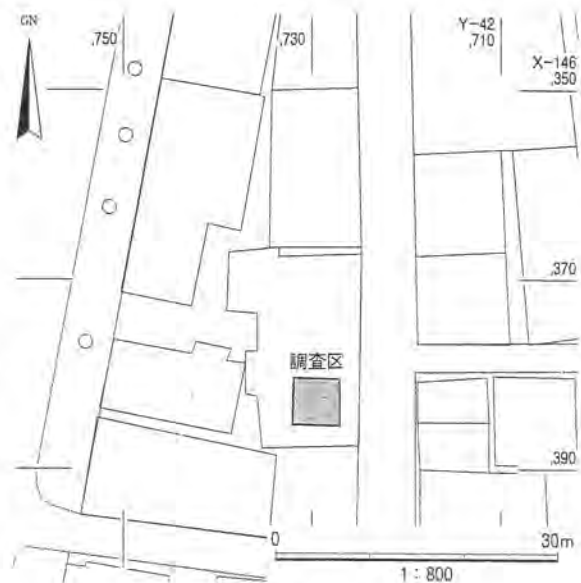


図2 調査区位置図



られる遺物包含層が確認され、それらを対象に本調査が行われることとなった。調査区は敷地南東部に設定し、現代の地層(第1層)を重機によって除去した後、近世以前の地層である第2・3層と第4層の一部を人力で掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。本報告書で用いた水準値はT.P.値で、図中ではTPと省略した。本書で用いた指北記号は座標北を示す。

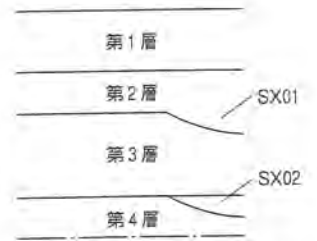


図3 地層と遺構の関係図

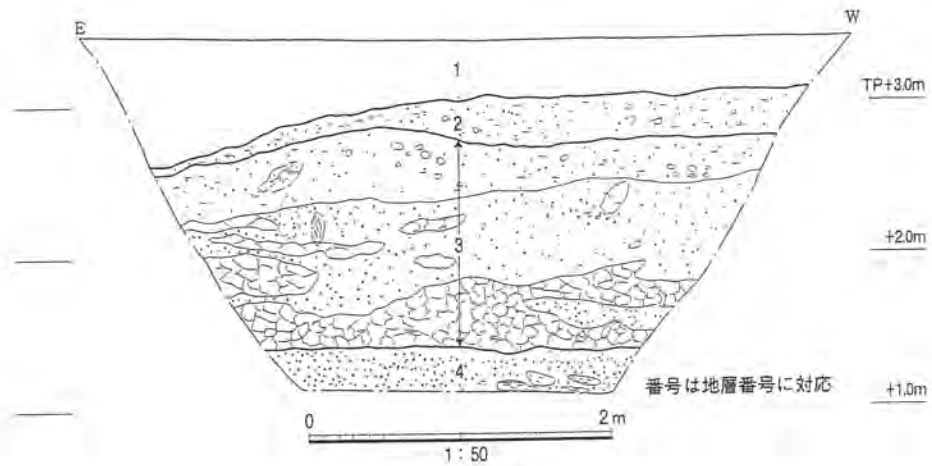
〈調査の結果〉

1. 層序(図3・4)

第1層：主に暗灰色細粒砂からなる現代の盛土層である。層厚は最大で84cmである。

第2層：黄褐色細粒～中粒砂からなる整地層で、層厚は約30cmである。本層上面を清掃中に銅銭の「寛永通宝」1(写真1)が出土した。徳川期の地層である。

第3層：暗灰黄色大礫混り粘土質シルトや黒色粗粒砂混り粘土質シルトからなる整地層で、層厚は



南壁地層断面図

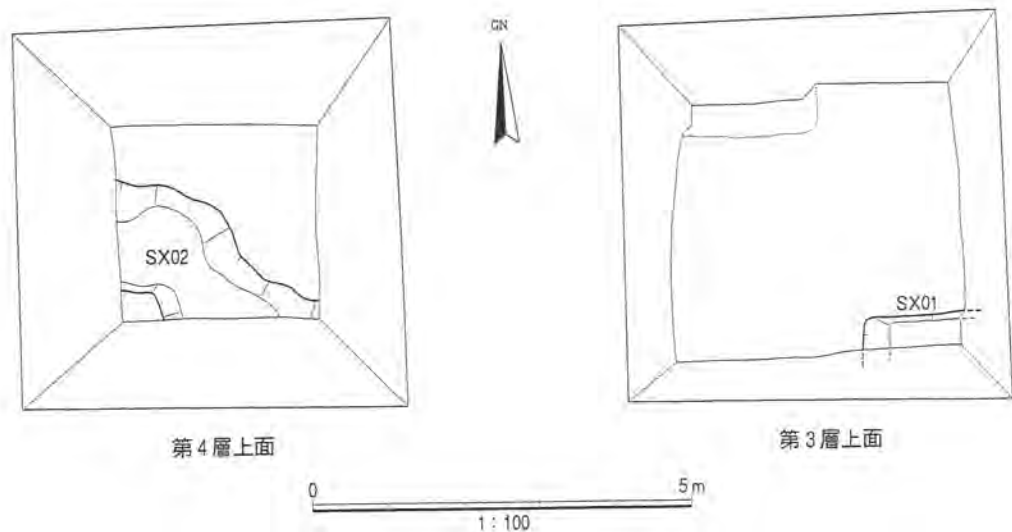


図4 南壁地層断面図・検出遺構平面図



約140cmである。上面の標高は西側でTP+2.8m、東側で同2.6mと東に向けて下がり、その分層厚も薄くなっていた。本層からは、瀬戸美濃焼天目碗4・肥前陶器碗5のほか弥生土器2・土師器3や銅滓などが出土した。4・5の年代観から本層は豊臣後期の地層である。2・3は客土が起源する堆積層に本来含まれていた遺物である。



写真1 寛永通宝

第4層：灰色中粒～粗粒砂からなる河川堆積層で、層厚は30cm以上である。人為とは思えない粘土の偽礫が観察されることから、本層を堆積させた水流は下位層を侵食しながら流れたとみられる。年代が判定される遺物は出土しなかった。

### 2. 包含層出土の遺物(写真1、図5)

第2層上面から出土した「寛永通宝」1は湯のまわりが悪かったものか孔があいている。2～5は第3層から出土した。弥生土器2は外面を櫛描の波状文で加飾し、内面をハケで調整する。弥生時代中期の壺体部片であろう。3は土師器の杯か皿で、内面に放射状暗文、外面にヘラミガキを施す。飛鳥～奈良時代のものである。瀬戸美濃焼天目碗4は内面と外面底部上までに鉄釉をかける。肥前陶器碗5は灰釉をかける。ともに豊臣後期に属する。

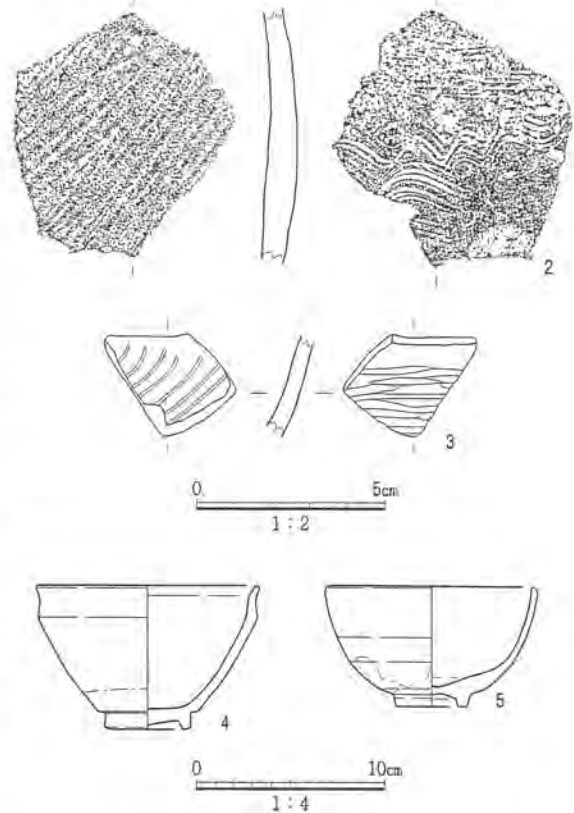


図5 第3層出土遺物実測図

### 3. 遺構と遺物(図3・4)

遺構は第3・4層の上面で検出された(図3)。

SX02 第4層上面で検出された不整形な落込みで、深さは0.1mほどで、暗灰色細粒砂で埋っていた。遺物は出土しなかった。

SK01 第3層上面で一部を検出した土塊状の遺構である。東西0.65m以上、南北0.24m以上、深さ0.15mで、第2層で埋められていた。遺物は出土しなかった。

### 〈周辺調査との地層対比と旧地形について〉

本調査地と周辺の既往の調査で地層を対比し、この地域の旧地形の中で本調査地を位置づけてみたい。まず、本調査地の第3層(豊臣後期の整地層)は、その年代と標高からみてMR94-6次調査の第2層と対比することが可能である。本調査地の第3層の上面は東に下がる傾斜がみられたが、このことはMR94-6・OS94-20次調査地とも共通している。この傾斜は、報告書で述べられているように猫間川西岸の斜面の一部に相当する可能性があり[大阪市文化財協会2002a]、盛土は猫間川西岸の土手ではなかろうか。そして、OS94-20次調査地では盛土上面で遺構が検出されていることから考

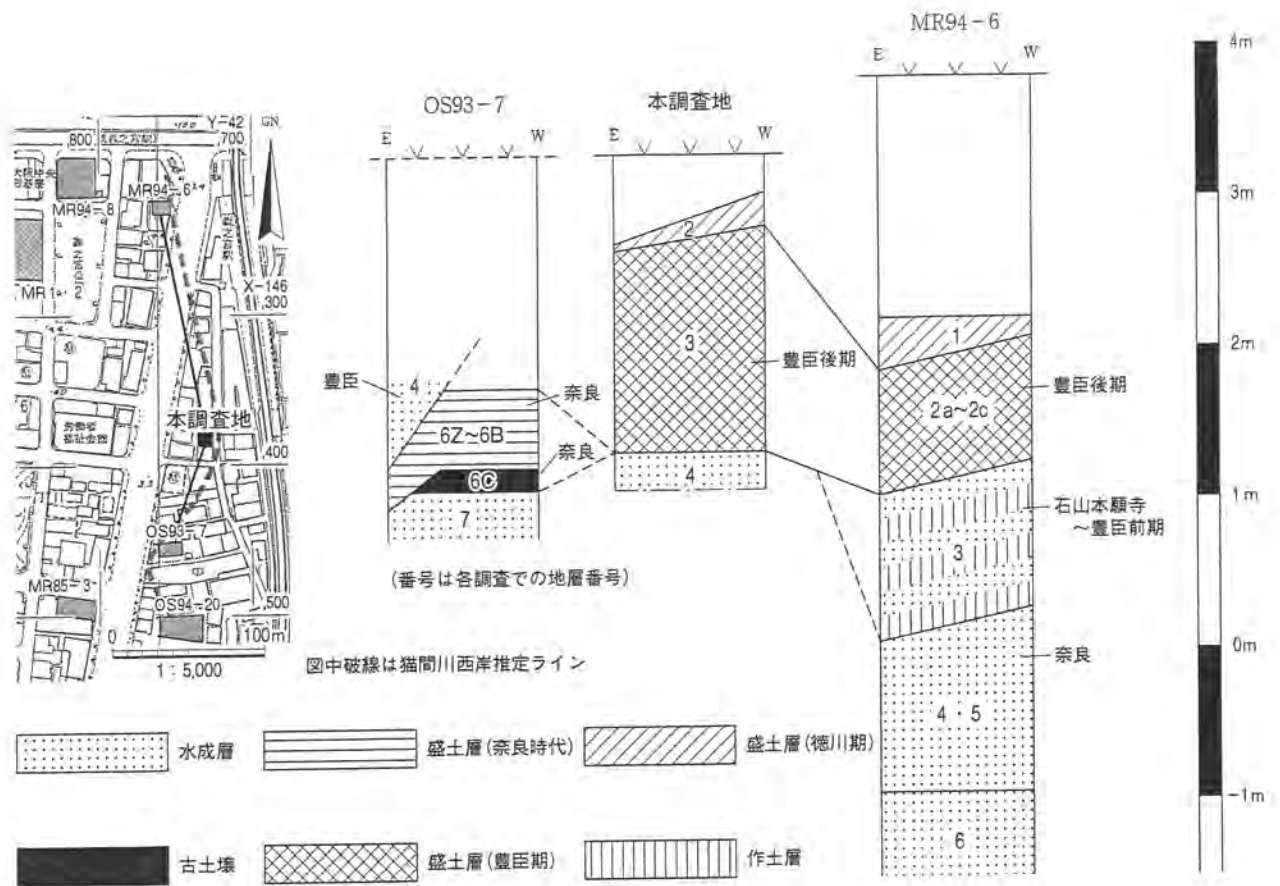


図6 周辺調査との地層対比

えて、単に土手というばかりでなくその上面を生活空間として利用したとみられる。土手はOS93-7次調査では検出されておらず、直線状をなさずに本調査地の南で西へ入込む可能性がある。これは猫間川の蛇行のままに築堤が行われた結果で、現在の調査地の東を南北に延びる道路もそれを反映しているのかもしれない。

一方、MR94-6次調査では第2層の下位に、豊臣前期とされる水成層と作土層の互層の堆積がみられ、盛土以前には川岸の耕作地「流作場」のような環境にあったとみられる。

本調査地の第4層は年代の判定ができなかったが、OS97-3次調査の第7層、MR94-6次調査の第4・5層に相当するとみられ、奈良時代を下ることはない。これらは猫間川の河川堆積層とみてよい。地層上面の標高差は、本調査地とMR94-6次調査との間で約1mに達する。調査件数が少ないので推論に留めるが、この段階でも猫間川が蛇行していたことを示しているのかも知れない。その場合、上面の標高が高い本調査地付近は川の攻撃面に当るのであろう。

#### 〈調査の結果〉

今回の調査では、徳川・豊臣期の整地層(第2・3層)と時期不明の河川堆積層(第4層)を検出した。周辺の調査成果との対比から、豊臣期の整地層については猫間川の西岸の土手である可能性が考えられた。第4層の年代は奈良時代以前で、猫間川の河川堆積層とみられた。上面の標高や堆積物の粒径

から判断して、猫間川は当地域を西にふくらんで蛇行しながら北流していた可能性が考えられた。

#### 引用・参考文献

大阪市文化財協会2002a、「第Ⅱ章 大阪城公園地域(A地区)の調査」：『大坂城跡』Ⅵ、pp.15-74

大阪市文化財協会2002b、「第Ⅳ章 惣構東南部地域(H地区)の調査」：『大坂城跡』Ⅵ、pp.189-204

調査地全景  
(北から)



東壁地層断面  
(西から)



南壁地層断面  
(北から)





の記録作成を行った。なお、本報告書で用いた水準値は東京湾平均海面値(T.P.値)で、本文および図中ではTPと省略した。本書で用いた指北記号は図1・2が座標北、その他は磁北である。

### 〈調査の結果〉

#### 1. 層序(図3)

第0層：杭打ち工事に伴って攪乱された現代の層である。層厚は最大で210cmを測る。

第1層：黄橙色(10YR7/6)細粒砂の地山層である。第0層形成時に上面を破壊されているが、最高所の標高はTP+7.7mであった。これは東方のOS92-60次調査地の地山標高にほぼ等しいが、OS92-60次調査では豊臣・徳川期の地層が残っていたことから、本調査地第1層の本来の標高はさらに高く、遺物包含層も破壊されたものと考えられる。

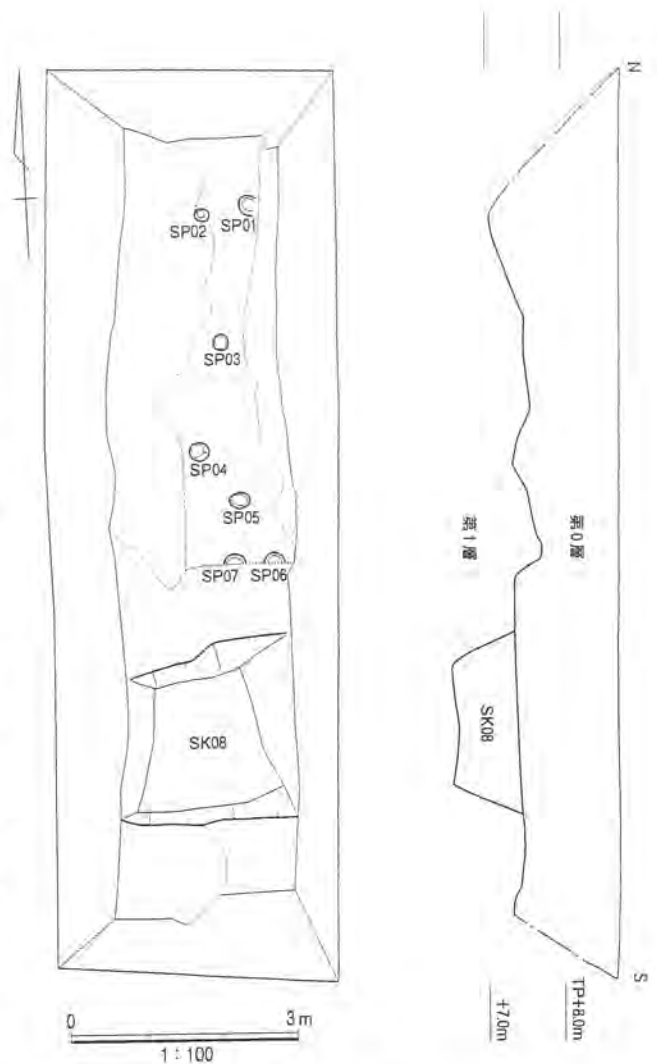


図3 検出遺構平面・地層断面図

#### 2. 遺構と遺物(図3～4)

第1層上面で柱穴群(SP01～07)と土壙(SK08)を検出した。

柱穴群(SP01～07) いずれも円形で、直径約0.2m～0.3mである。その内、SP04・02・06には径約0.1mの柱痕跡がみとめられたので建物の柱穴である。埋土は、柱穴が黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂質シルトで、柱痕跡は灰オリーブ色(5Y4/2)細粒砂質シルトである。建物規模などは攪乱が多くて判明しなかったが、柱穴が接近して存在することから、複数の建物が重複関係をもって存在したものとみられる。遺物が出土していないため、正確な時期は不明である。

SK08 南北2.2m、東西2.3m以上の方形を呈する土壙である。検出した深さは約1.0mで、壁面の角度は急で、直線的である。内部には瓦や焼け壁が埋積していた。この遺構は、その深さからみて井戸ではなく地下蔵的であったと考えられ、それをゴミ穴として転用したものであろう。

埋土からは肥前磁器碗1・2、堺播鉢3、土製羽口4、軒丸瓦5、軒棧瓦6が出土した。1は高台内に圈線を描き、外面には草花文を描く。時期は18世紀前半頃である。2は青磁染付で、高台内に渦福を描く。時期は18世紀後半頃であろう。3は18世紀代の播鉢である。4は外径が7.5cmで、内径は2.6cmを測る。5は左巻き三つ巴文の軒丸瓦で、珠文は12である。6は左巻き三つ巴文の軒棧瓦で、18世



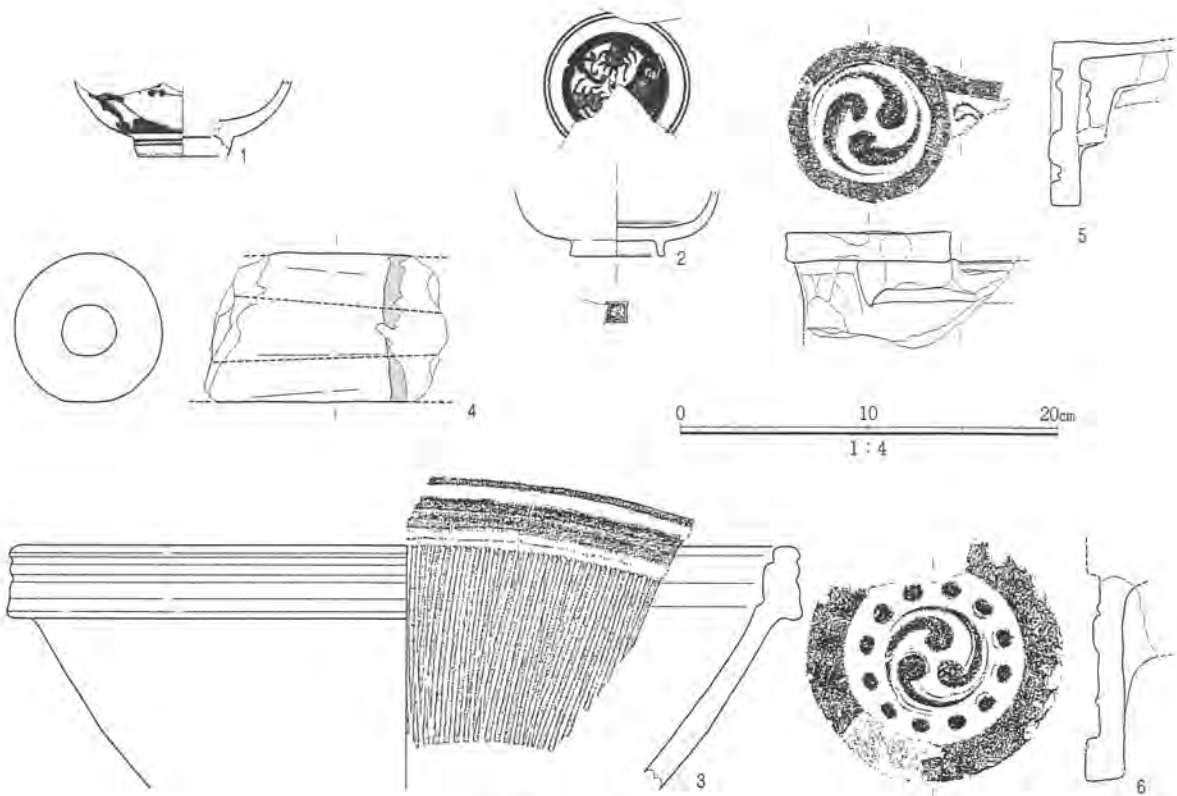


図4 SK08出土遺物実測図

紀前半頃のものであろう。以上の出土遺物から、この土壙は18世紀後半に埋め立てられたことが判明した。

#### 〈まとめ〉

今回の調査では、柱穴群SP01～07と土壙SK08を検出した。柱穴群は、攪乱により時期や規模が明らかにならなかったが、近接するOS92-60・07-7次調査で検出された遺構は大部分が徳川期のものであり、柱穴群も同様な時期に形成された可能性が高い。土壙SK08の構築時期は不明であるが、18世紀後半に埋め立てられていることが判明し、こちらも徳川期の屋敷との関係で捉えることができよう。

今後、周辺部の調査によって中世末から現代に至る都市形成の過程がさらに判明することが期待される。

調査状況  
(南東から)



第1層上面  
検出遺構  
(南から)



SP06・07  
埋土断面  
(南から)





# Ⅲ 西 区

西区土佐堀一丁目における建設工事に伴う  
土佐堀1丁目所在遺跡発掘調査(TL09-1)報告書

調査個所 大阪市西区土佐堀一丁目20-7・20-8・20-66  
調査面積 20㎡  
調査期間 平成22年3月23日～3月26日  
調査主体 財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南 秀雄、松本百合子

## 1) 調査に至る経緯と経過

当該地は近世の大坂にあって「天下の台所」と称された経済の中心地であり、各藩が領内の米や産物を貯蔵・販売するために建造した蔵屋敷が建ち並んだ堂島・中之島地区の土佐堀川南岸に位置する(図1)。調査地が所在する土佐堀一丁目は、貞享4年(1687)『新撰増補大坂大絵図』によると萩藩蔵屋敷の一角にあたり、周辺ではなにわ筋を挟んで西側に尼崎藩あるいは新谷藩と推定される蔵屋敷の遺構の一部が検出されている。さらに土佐堀川の北側、中之島には広島藩蔵屋敷や高松藩蔵屋敷といった船入りを伴う蔵屋敷跡も発掘調査されている。

当該地において2010年2月24日に大阪市教育委員会が実施した試掘では、地下約1.0m以下で中世および豊臣から徳川時代に至る遺構面が確認されたことから本調査を行うこととなった。よって、今回の調査ではそれらの遺構面や地層の状況、遺構や遺物の年代や分布を明らかにすることを目的とした。

調査範囲は当初、東北隅に東西5m、南北4mのトレンチを予定していたが、既設の工事基礎杭を避けるために東西7m、南北2.5mの規模に変更した(図2)。3月23日に資材搬入と地下約1.6mまでの機械掘削を行い、3月24日から地層の断面と江戸時代の盛土および遺物包含層を調査し、トレンチの西端に地層観察のための深掘りを行った。3月26日に発掘作業を終え、埋戻しを行い、同日、機材などを撤収して調査を完了した。

本報告で用いる水準は東京湾平均海面値を用い、 $TP \pm \text{〇}m$ と表記する。また、方位は図1・2が座標北、それ以外は磁北を基準にしている。

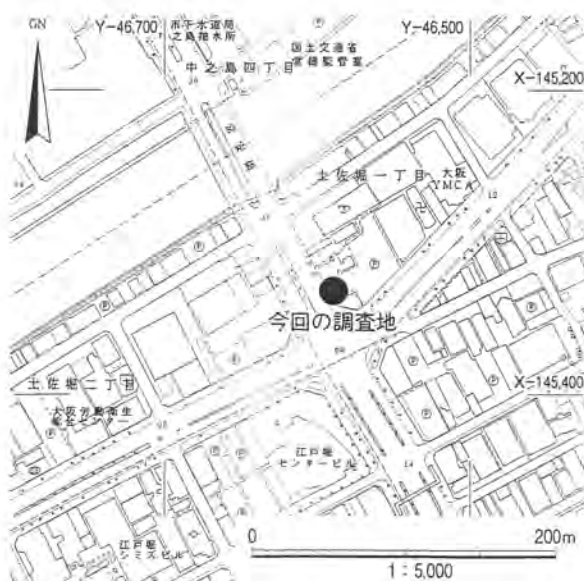


図1 調査地位置図



図2 調査区配置図

## 2) 調査の結果

### i) 層序

トレンチ内の地層は現代攪乱および近代以降の盛土が厚く、近世の地層は失われた部分が多い。また、TP-0.5m以下は湧水のため崩落が著しく、第4層以下は部分的な深掘りでの知見である(図3・4、図版上・下段)。

第0層：層厚50~110cmの現代攪乱および盛土である。上部は土壤改良剤が混入されており、硬くしまっている。下部には整地の際のレンガやコンクリート片が多く含まれる。

第1層：近世盛土層で、層厚は50~80cmである。TP 0 m前後で1a・1bの2層に分かれる。第1a層は直径5 cmほどの黄褐色シルトの偽礫を含むにぶい黄褐色粗粒砂の盛土層で、層厚は20~60cmである。第1b層は直径5 cmほどのにぶい黄褐色シルトの偽礫を多く含む黄褐色中粒砂の盛土層である。偽礫は層の下部に多く含まれる。層厚は20~50cmである。19世紀末頃の肥前磁器染付碗10を含む。

第2層：直径1 cmほどの炭粒および焼土片を含むオリーブ褐色砂質シルトの遺物包含層で、層厚は約20cmである。上面は北に緩く傾斜する。17世紀後半から18世紀にかけての国産・中国産の陶磁器や瓦を含む。本層中で直径20~40cmほどの円礫を複数検出した。

第3層：直径5 cmほどの黄褐色シルトの偽礫を少し含むにぶい黄褐色粗粒砂の整地層で、層厚は約20cmである。瓦片を含む。

第4層：黄褐色中~粗粒砂質シルト層で、層厚は30cm以上ある。直径1 cmほどの炭粒を含む。TP-0.8 m以下で認められた。17世紀前半の土師器・唐津焼・青磁などを含む。

第0層		現代攪乱および盛土層	
第1層	1a	黄褐色シルトの偽礫を含むにぶい黄褐色粗粒砂	18世紀以降盛土層
	1b	にぶい黄褐色シルトの偽礫を多く含む黄褐色中粒砂	
第2層	円礫	オリーブ褐色砂質シルト炭粒、焼土片を含む	遺物包含層
第3層		黄褐色シルトの偽礫を少し含むにぶい黄褐色粗粒砂	17世紀以降盛土層
第4層		黄褐色中~粗粒砂質シルト炭粒を含む	

図3 地層と遺構の関係

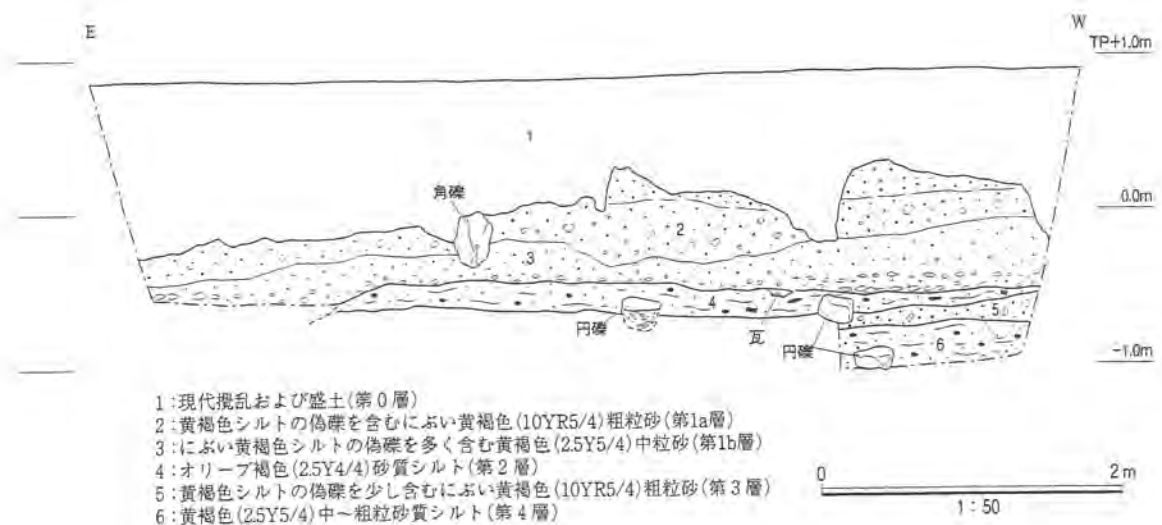


図4 南壁地層断面図

## ii) 遺構と遺物

### a. 第1層上面の遺構(図5)

調査区の北隅で近代の瓦溜めを検出した。第0層で整地される直前に形成されたもので、検出した規模は2.0m×1.5m、深さ約0.5m以上で、調査区の北に拡がってゆく。埋土は黄灰色中粒砂で、ほとんど近代の棧瓦で満たされていた。

### b. 第2層中の遺構(図5、図版中段)

調査区の中央、第2層中で9個の直径20~40cmほどの円礫を検出したが、配置に規則性は見出せなかった。いずれも工事基礎杭の打設により原位置を留めない。また、調査面積が狭小で、おりからの雨による激しい湧水のため掘形も検出できなかった。しかし、周囲の第2層から17世紀後半から18世紀にかけての中国製青花青菜文皿12・唐子文碗13、白磁小皿11、青磁鉢14、肥前磁器染付碗9、肥前陶器皿7、瀬戸美濃焼水差8、関西系陶器4、土師器皿1・2、十能16、巴文軒丸瓦などが出土していることから、萩藩蔵屋敷に係わる遺構・遺物の可能性がある。

このほか、第4層から17世紀前半のものと思われる肥前磁器青磁鉢15、肥前陶器碗5・6、糸切底の土師器皿3、巴文軒丸瓦および小型の砥石17が出土している。

## 3) まとめ

今回の調査は面積20㎡で、湧水に加えて全日降雨という悪天候が重なったため遺構面の精査には困難が伴った。しかし、17世紀から19世紀にかけての遺物が多数検出されたことは、土佐堀川南岸の蔵屋敷の歴史を解明する上で、新たな材料を提供することとなった。特に17世紀前半の遺物を含む第4層の存在は、当該地における萩藩蔵屋敷の成立時期について重要な資料となった。

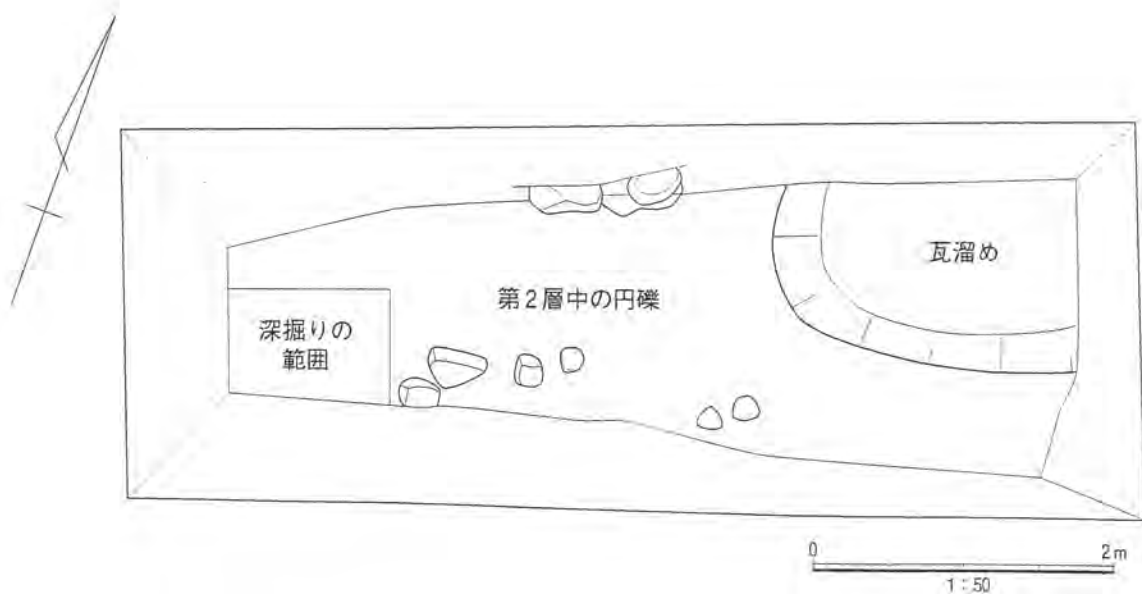


図5 遺構平面図

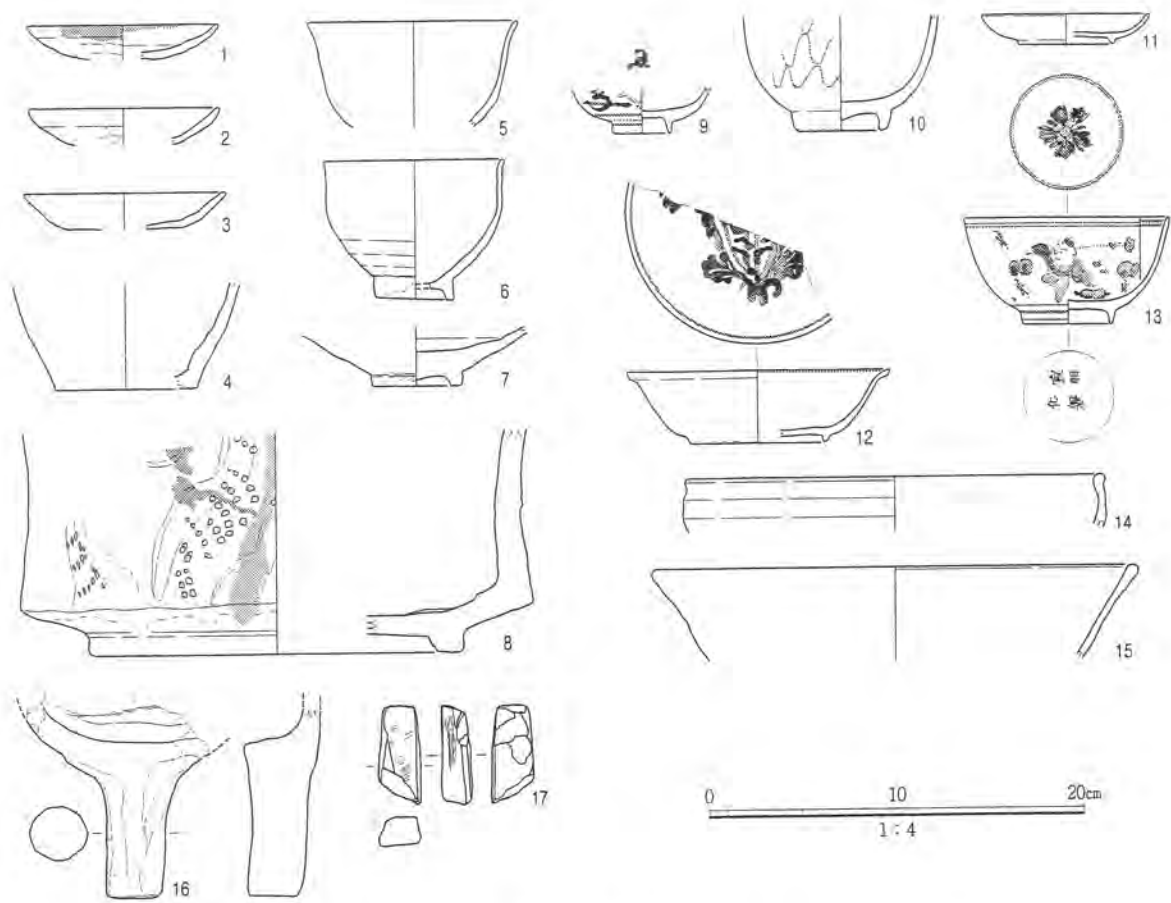


図6 出土遺物

第1b層(10)、第2層(1・2・4・7～9・11～14・16)、第4層(3・5・6・15・17)

参考文献

新修大阪州市史編纂委員会1989、『新修大阪州市史』3

塚田孝・吉田伸之編2001、『近世大坂の都市空間と社会構造』山川出版社

南壁地層断面  
(北東から)



調査区の全景  
(東から)



西端の深掘り地層断面  
(北から)





# IV 天王寺区

## 大道1丁目所在遺跡発掘調査(DA09-2)報告書

- ・調査箇所 大阪市天王寺区大道1丁目10-3・10-4・10-5
- ・調査面積 60㎡
- ・調査期間 平成21年11月25日～11月27日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 文化財研究部次長 南 秀雄、杉本厚典

### 〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は茶臼山古墳の東150m、四天王寺の南西100mの地点に位置する(図1)。本調査地の南側には現在でも東西方向に谷地形が残っており、これが8世紀末に和気清麻呂によって掘削されたとされる「河内川」と推測されている。また遺跡の北側には四天王寺旧境内跡があり、古代の建物跡、寺院関連遺構、中世の建物などが検出されている。

大道1丁目所在遺跡として最初に実施されたDA01-2次調査では、中世後期の井戸が検出され、包含層からは古墳～飛鳥時代の須恵器が出土した。また調査地の西50mで実施されたDA06-1次調査では16世紀に遡る達磨窯、中世の瓦質の井戸側をもつ井戸などが検出された。この達磨窯は、焚口と燃烧室との高低差が無い古いタイプのもので注目されている。これらの調査成果から、大道1丁目所在遺跡が古代～中世に栄えた集落跡であることが明らかにされつつある。

本調査地はDA06-1次調査地から東へ緩やかに下る傾斜地に位置する。調査は11月25日に着手し



図1 調査地位置図



図2 調査区位置図

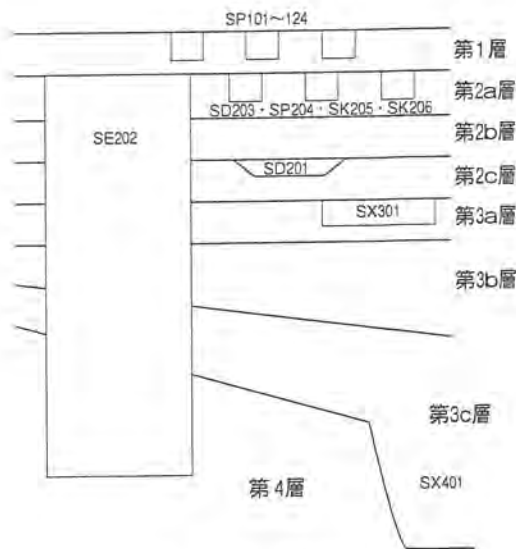


図3 地層と遺構の関係図

重機による上掘りを実施した。調査区東半部は鉄筋コンクリート基礎によって、地下2mまで攪乱されており、遺構は認められなかった(図2)。

調査区西半部では近世～古代の地層が遺存していたため、第1層より人力による遺構の検出と掘削を行った。適宜、写真・図面などの記録を作成し、深掘りトレンチを設けて下位層の状況を確認後、11月27日に現地での調査を終了した。

報告書の方位は図1は座標北、その他の平面図は磁北を基準に作図し、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・図中ではTP+〇mとした。

〈調査の結果〉

1. 層序(図3・4)

第1層：灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂で構成される層厚10cm以上の整地層であった。調査区の西側に部分的に分布しており近世の遺物を層中に含んでいた。

第2a層：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルトで構成される層厚15cm以上の整地層であった。

第2b層：にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂で構成される層厚20cmの整地層であった。第2a・2b層はいずれも調査区の西側に分布しており、層中からは瓦器の細片が出土した。

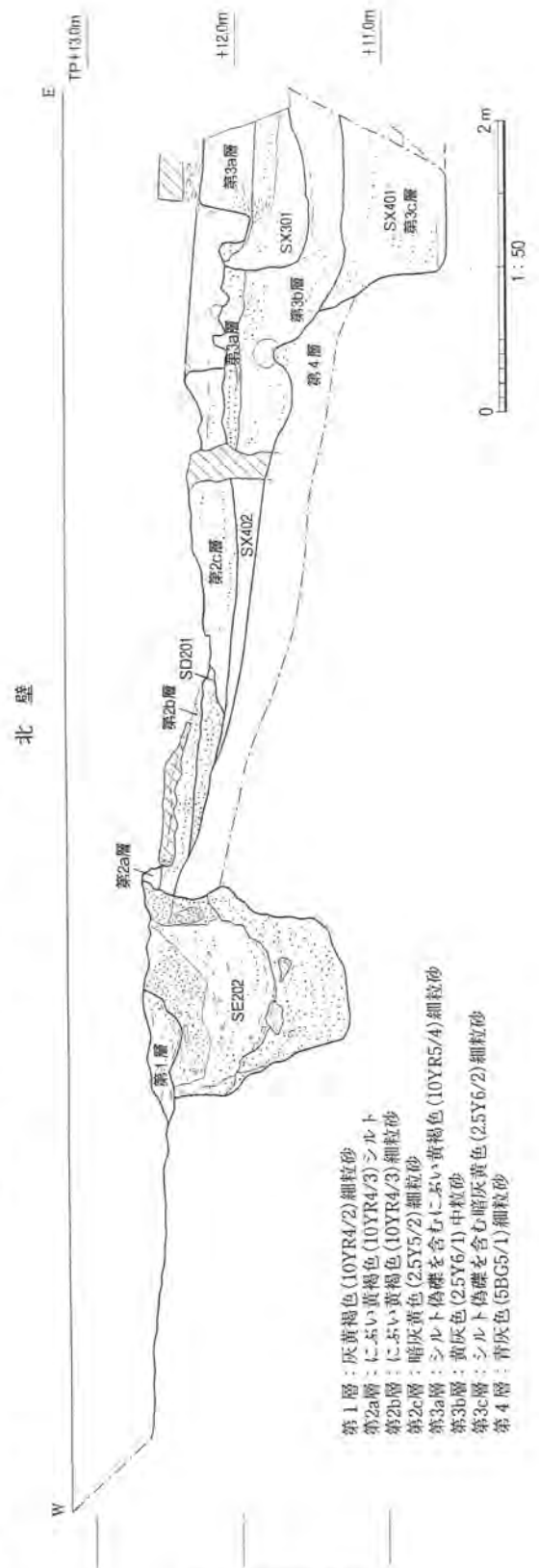


図4 北壁断面図

- 第1層：灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂
- 第2a層：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト
- 第2b層：にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂
- 第2c層：暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂
- 第3a層：シルト偽礫を含むにぶい黄褐色(10YR5/4)細粒砂
- 第3b層：黄灰色(2.5Y6/1)中粒砂
- 第3c層：シルト偽礫を含む暗灰黄色(2.5Y6/2)細粒砂
- 第4層：青灰色(5BG5/1)細粒砂

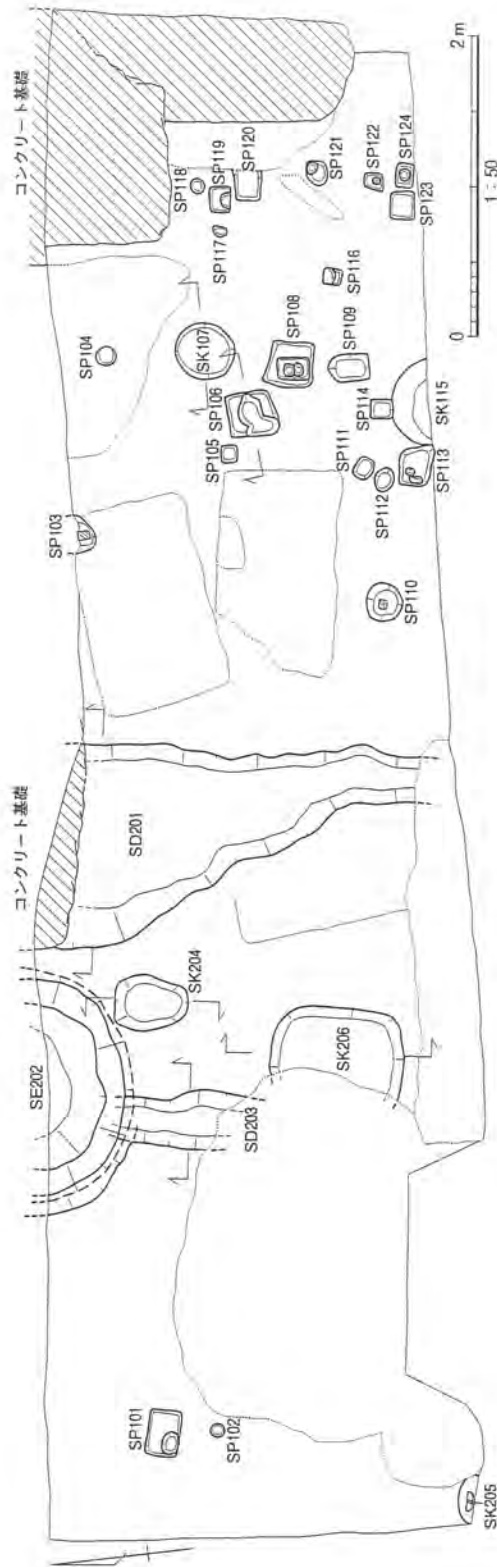


図5 第1・第2層上面の遺構平面図

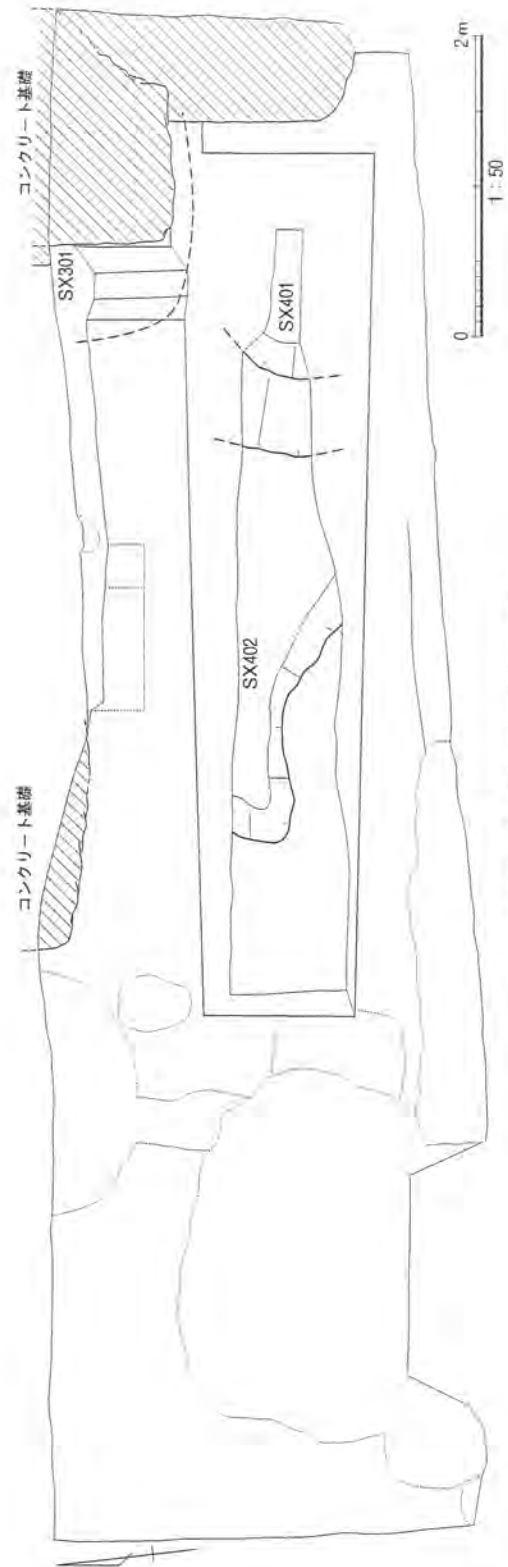


図6 第3層・第4層上面の遺構平面図

第2c層：暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂で構成される層厚35cmの整地層であった。調査区東側に分布しており、古代の遺物を含んでいた。層中から瀬戸美濃焼陶器皿(図8-2)が出土した。

第3a層：シルト偽礫を含むにぶい黄褐色(10YR5/4)細粒砂で構成される層厚20cmの整地層であった。調査区東側に分布しており、東に向って層厚を増していた。層中からは古代～古墳時代後期の遺

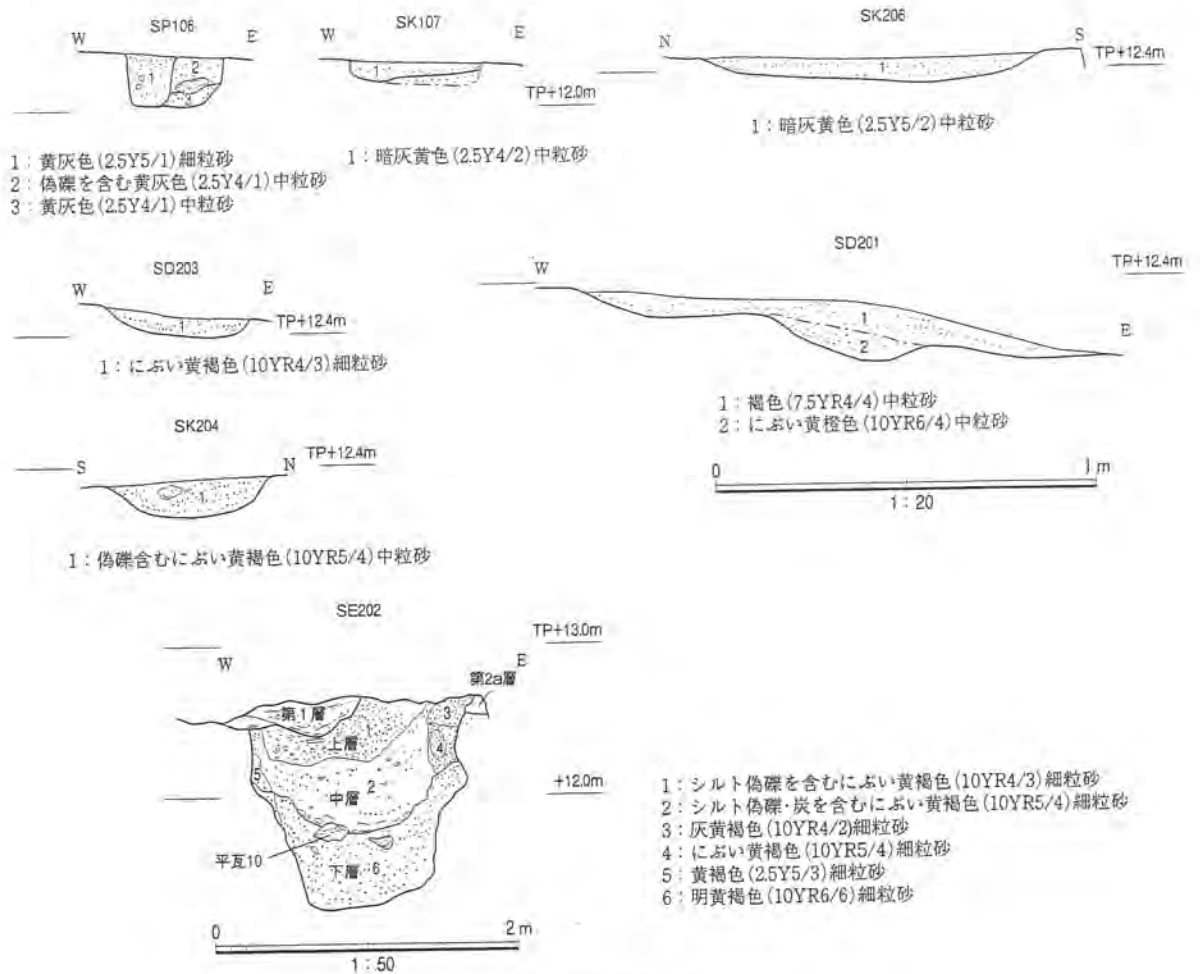


図7 遺構断面図

物(図8-6~9・12・14)が出土した。

第3b層：黄灰色(2.5Y6/1)中粒砂で構成される層厚64cmの整地層であった。第3a・3b層ともにSX402を埋戻した整地層である。

第3c層：シルト偽礫を含む暗灰黄色(2.5Y6/2)細粒砂で構成される層厚74cmの整地層であった。SX401を埋めた整地層である。

第4層 青灰色(5BG5/1)細粒砂で構成される地山であった。

## 2. 遺構と遺物(図5~8)

### a. 第4層上面の遺構と遺物

SX401は調査区中央で検出した深さ0.7mの落込みである。面積が狭いため谷地形か人為的に掘りこまれた遺構であるかを確定できなかったが、第3c層とした埋土から須恵器や土師器の細片が出土した。また埋土中には偽礫が含まれており、人為的に埋戻されたものと判断される。本遺構からは11が出土した。11は須恵質に焼成された丸瓦である。凹面に布目痕が認められる。凸面はナデで平滑に整える。端部は鋭利な工具で切断し整形する。

SX402は調査区西側で検出した谷の肩とみられる落込みである。この落込みは東側へ向けて下っており、上述したSX401はこの斜面に設けられていた。第3a層とした埋土には偽礫が含まれており、人

為的な埋戻し層とみられる。

#### b. 第3層の遺構

SX301は北壁断面で観察した遺構である。鉄筋コンクリート基礎の下にあり、遺構の平面的な掘削はできなかった。北壁で確認したが南壁では認められなかったため、土壌が落込みの可能性がある。

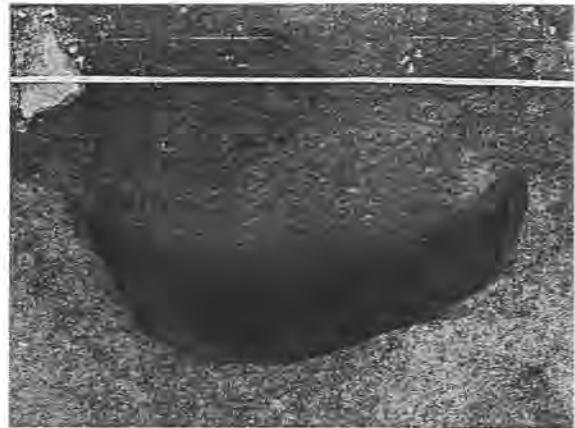


写真1 SE202断面(南東から)

#### c. 第2層上面の遺構と遺物

SD201は第2c層上面で検出した溝である。幅1.30~0.40m、深さ約0.2mで南北に延びていた。埋土は褐色細粒砂質中粒砂であった。

SE202、SD203、SK204~SK206は第2a層上面で検出した遺構である。

SE202は直径1.60m、深さ1.42mの井戸である。上層がシルトの偽礫を含むにぶい黄褐色細粒砂、中層がシルトの偽礫や炭を含むにぶい黄褐色細粒砂で、いずれも偽礫が多く見られたため人為的な埋戻し層と判断された。一方、下層は上部にシルトの偽礫が見られるものの、全体的に淘汰の良い明黄褐色細粒砂で構成されており、機能時に堆積した水成層と判断された(写真1)。

遺物は中層から10、上層から5・13が出土した。5は産地不明の焼締陶器壺底部である。長石・石英を多く含んでおり、内外面ともにナデ調整を施す。底部内面には灰が落ちた痕跡が認められる。中世後期のものとみられる。10は土師質に焼成された平瓦である。凸面に縄目タタキ、凹面に布目痕が認められる。凹・凸面および断面に煤が付着し、破片になった後に、二次的に火を受けている。13は須恵質に焼成された丸瓦である。凹面に布目痕と吊り紐痕が認められる。凸面はナデで平滑に整える。端部は鋭利な工具による切断後、ナデを施す。10・13はいずれも古代のものである可能性が高い。

SD203は幅0.38m、深さ0.07mの溝であり、北端でSE202に接続していた。

SK204は東西0.38m、南北0.5mの土壌である。深さ0.1mでおもににぶい黄褐色中粒砂で埋っていた。

SK205は調査区南西隅で検出した直径0.24m以上の土壌である。埋土中より瓦器4が出土した。4は和泉型瓦器椀である。13世紀後半の時期のものとみられる。

SK206は東西0.6m以上、南北0.88mの土壌である。深さ0.07mであり、暗灰黄色中粒砂で埋っていた。埋土からは土師器・瓦器が出土した。1は土師器皿である。外面にユビオサエの痕跡が顕著である。14世紀くらいのもものとみられる。3は和泉型瓦器椀の底部である。底径は小さいが高台が高く12世紀中~後葉のもものとみられる。

#### d. 第1層上面の遺構

上面で柱穴・小穴(SP101~106・108~114・116~124)、土壌(SK107・115)を検出した。これらの遺構の埋土からは肥前磁器の細片などが出土したため、近世の遺構と判断される。

柱穴・小穴は方形のもの(SP101・105・106・108・109・111・113・114・116・119・120・122~124)と円形のもの(SP102~104・110・112・117・118)とに分かれる。

方形の柱穴のSP105・SP119・SP123は正方位に規則的に配置されており、建物などを構成する

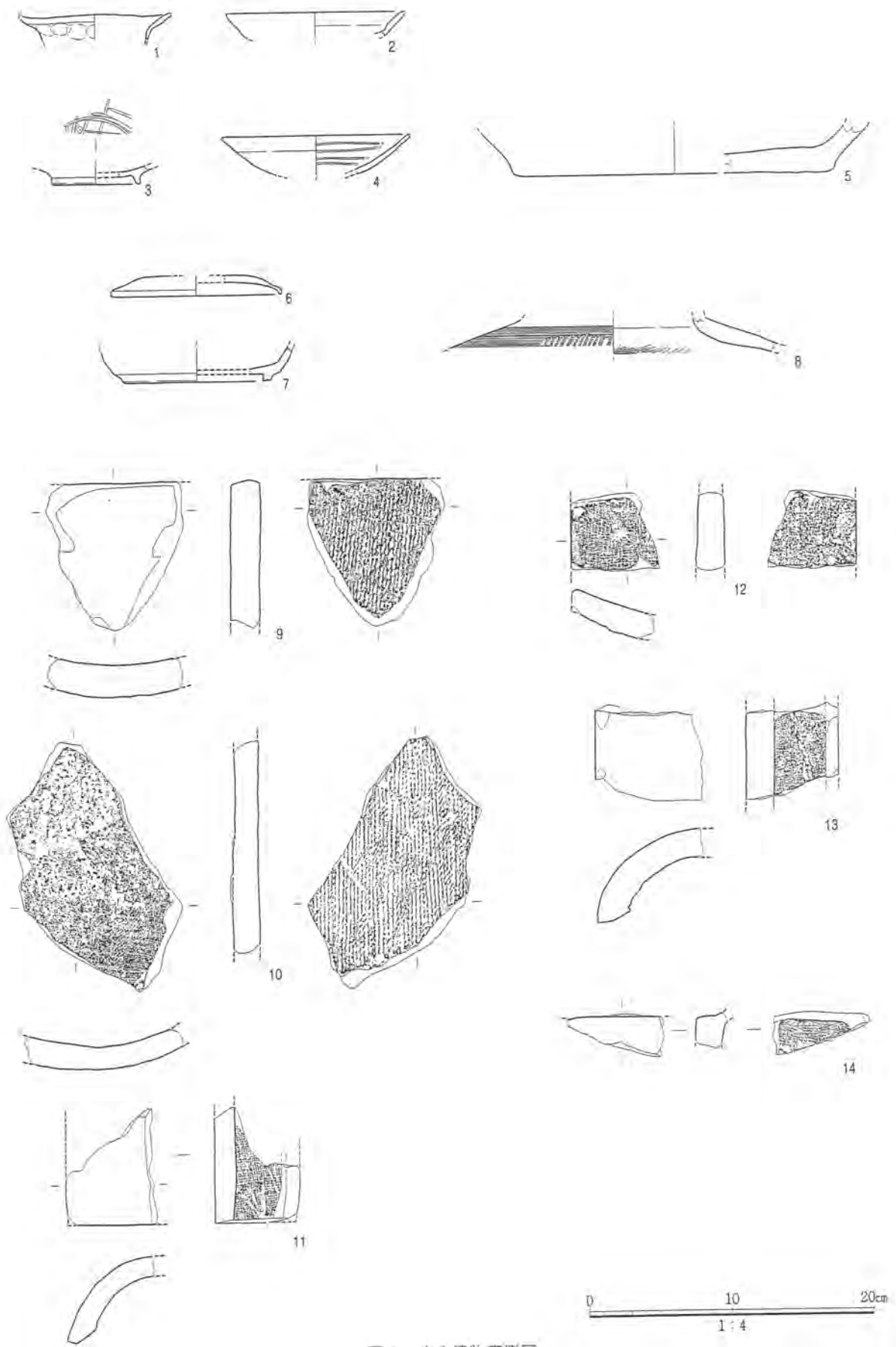


图8 出土遺物実測図  
 SK206(1·3)、SK205(4)、SE202(5·10·13)、SX401(11)、第2c層(2)、第3a層(6~9·12·14)



可能性がある。

またSP106には0.12mの柱痕跡が認められ、SP103・SP110には柱材が遺存していた。

SK107は直径0.38m、深さ0.06mの土壙である。暗灰黄色中粒砂で埋っていた。

#### e. 地層出土の遺物

第2c層中からは内外面に灰釉を施した瀬戸美濃焼陶器皿2が出土した。

また第3a層中からは6・9・12・14が出土した。6は須恵器杯B蓋である。口径が11.8cmに復元される。稜線がシャープであり8世紀前半頃のものと思われる。7は底径が10.2cmに復元され、杯Bとみられる。高台が比較的外側にあるが、シャープなつくりではなく、8世紀前半頃の時期のものと思われる。8は古墳時代後期の須恵器甕である。外面をタタキで整形した後、カキメを施す。内面は同心円タタキを施す。9は土師質に焼成された平瓦である。凸面に縄目タタキ、凹面に布目痕が認められる。12は須恵質に焼成された平瓦である。凹面に布目痕が認められる。凸面は磨滅しているが、縄目タタキがわずかに認められる。端部はナデで整える。14は丸瓦とみられる須恵質に焼成された瓦である。玉縁とみられる部分が欠損する。凹面に布目痕が付着する。

#### 〈まとめ〉

今回の調査地では近世の柱穴・土壙、中世の井戸・溝・土壙などを検出した。また古代の遺物を含む整地層が認められた。

本調査地では、東に向かって下がる古代の地形が認められた。限られた範囲の成果から調査地周辺の地形を復元することは困難であるが、現況の地形を参考に判断すると、調査地付近に南北方向の谷地形の存在が想定される。上述したように調査区の南側に東西方向に延びる谷地形が認められ、このような谷につながる小支谷にあたる可能性がある。

そしてこの古代の谷を埋められた後、中世以降に居住域が形成されていた。今回の調査地では中世後期の井戸1基が検出されたが、DA01-2・DA09-6次調査地でも中世後期の井戸が検出されており、居住域が本調査地を含む東西250mの範囲に広がっていたと考えられる。

中世に四天王寺に栄えた門前町については、『大乘院社寺雑事記』1499(明応8)年に「天王寺ハ七千間在所」とあり、西門を中心として門前町が形成されていたことが想定されている。発掘調査でも、西門付近で中世の遺構・遺物が数多く発見されており、ST92-7次調査地では中世の六角形井戸、ST92-10次調査地では掘立柱建物、ST90-2次調査地では中世後期の蔵跡などが見つまっている[大阪市文化財協会1996、5-10頁]。大道1丁目所在遺跡において当時のようすを記録した文献史料はほとんど認められないため、発掘調査がより重要な歴史復元の手段となる。今後、調査地周辺部の調査が進展するにつれ四天王寺の門前町との関連もより明確になるものと期待される。

#### 引用文献

大阪市文化財協会1996、『四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告』I

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「大道1丁目所在遺跡発掘調査(DA06-1)」：『大阪市内埋蔵文化財包



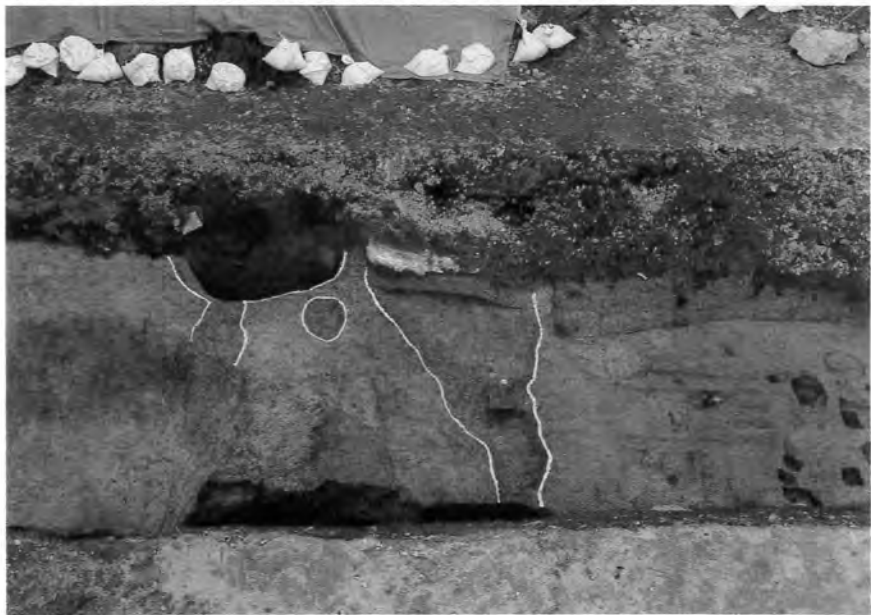
蔵地発掘調査報告書(2006)』 pp.271-280

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2003、「大道1丁目所在遺跡発掘調査(DA01-2)」:『平成13年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 pp.49・50

第3a～3c層と東側の  
落込みSX401・402  
(南東から)



第2層の遺構  
(南から)



第1層の遺構  
(南東から)



堂ヶ芝廃寺発掘調査(DS09-2)報告書

- ・調査個所 大阪市天王寺区堂ヶ芝1丁目16-1・16-2・16-3
- ・調査面積 150㎡
- ・調査期間 平成21年9月1日～9月9日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、黒田慶一

〈調査に至る経緯と経過〉

今回調査地は堂ヶ芝廃寺の伽藍の中心と推定される豊川稻荷(観音寺)の東方50mに位置する(図1)。堂ヶ芝廃寺は江戸時代から、古代瓦が散布することから古代寺院址として知られており、石田茂作氏は著書[石田茂作1936]で、豊川稻荷の社殿北側に堂址とみられる土壇を報告し、氏はその土壇を金堂址とする法隆寺式伽藍配置を想定した(図2)。ただし、氏の踏査時はすでに区画整理が行われ、周辺は家屋が建ち並んでいたらしく、憶測の域に止まった。近年、北方の細工谷遺跡の井戸から「百済尼寺」と墨書する土器が出土し、飛鳥時代は「僧寺」と「尼寺」が併せ建てられる習慣があったことから、当廃寺を「百済(僧)寺」に比定する説が出されたが、伽藍配置等は今をもって不明のままである。



図1 調査地位置図

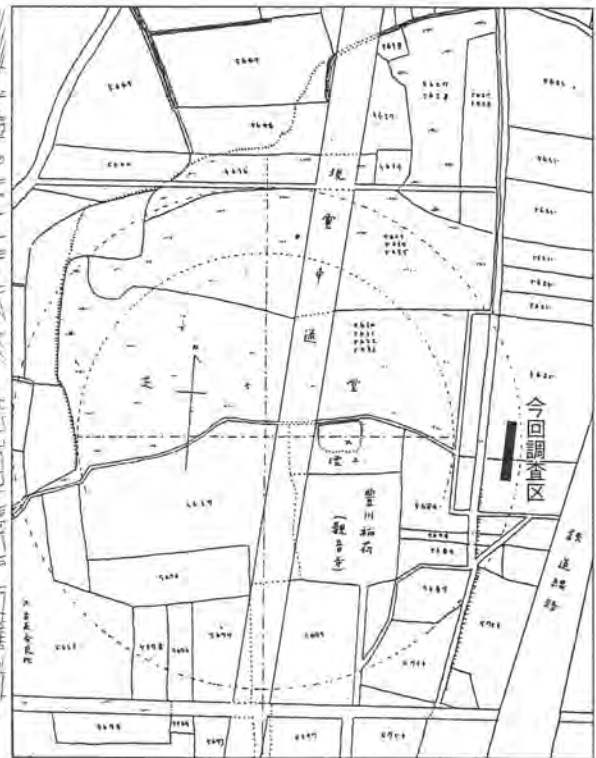


図2 堂ヶ芝廃寺周辺地籍図と今回調査区  
([石田茂作1936]に加筆、縮尺約1/4000)

当敷地にて大阪市教育委員会が2箇所の試掘調査を行い、須恵器や土師器を含む包含層が見つかったことから、本調査を実施することになった。試掘堀を含むように調査区を設定し、9月1日より重機掘削を開始した(図3)。以後、人力掘削にて遺構精査すると同時に、平面図・断面図の作成、写真撮影で記録保存し、9月9日にすべての調査を終えた。

図1・2以外の報告に使用した方位は磁北、標高はTP値(東京湾平均海面値)で、TP+〇mと記した。

### 〈調査の結果〉

#### 1. 層序(図4～6)

第0層：旧建物解体時の攪乱と現代のアスファルト舗装時の整地層である。

第1層：旧建物の基礎や旧建物建設時の整地層である。

第2層：北東部に遺存する層厚50cmのにおい黄褐色シルト質粗粒砂層である。調査区の大部分を占める後述の土採り穴と池跡は、本層上面からの掘込みである。

第3層：におい黄褐色シルト質粗粒砂の地山層である。

#### 2. 遺構と遺物(図7～10)

##### a. 第2層上面検出遺構

SK02 直径0.7m、深さ0.5mのピットで、褐色シルト質粗粒砂などを埋土とし、瀬戸美濃焼磁器が検出されたことから、近代の遺構と考えられる。

SK03 一辺4.3m、深さ1.1mの方形の土採り穴で、須恵器蓋1・杯身2・壺4・鉢5・播鉢7、土師器高杯9・把手10、平瓦17、丸瓦21が出土した。1はTK48型式、2は体部と底部の境界線に部分的な回転ヘラケズリをもつTK217型式で、4は沈線による鋸歯文とカキメが見られ、5は2本の凸線を口縁下部に巡らせている。7は底部側面に条線タタキを施す。9は中空の脚部で、17の凸面には条線文タタキ痕が見られる。タイル片が出土したことから近代に属する遺構である。

SK04 長さ4.5m、幅1.9m、深さ0.7mの土採り穴で、須恵器杯身3、平瓦15が出土した。3は外反する踏ん張るような高台で、15の凹面には幅3cmの模骨痕がある。近代遺構である。

SK07 調査地北西部に位置する、長さ9.3m以上、幅4.2m以上、深さ0.9mの近代の土採り穴で、土師器杯8、蓮華文軒丸瓦11、平瓦18～20・22が見つかった。11は杏仁形の単弁と逆三角形の間弁を交互に配し、周縁部は素文である。18の凸面には条線文、19・20・22の凸面には格子文タタキ痕が見られる。22のタタキ痕は、広端面を下にして立てた粘土板を真横から弧を描くように叩いた角度で配されていることから、桶巻き作りの可能性が高く、凹面には広端部から狭端部方向へ4本の指でナデ消した痕跡がある。側面は丁寧にはら切りしている。

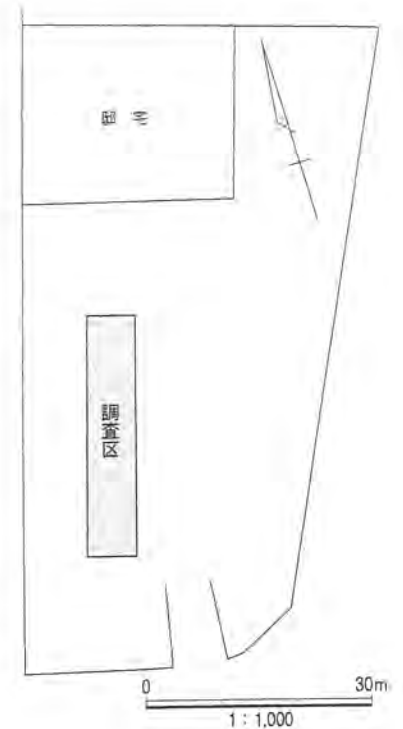


図3 調査区位置図

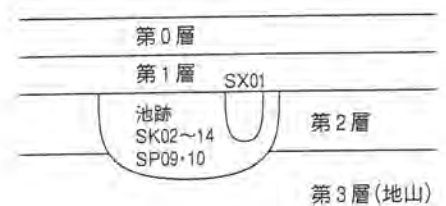
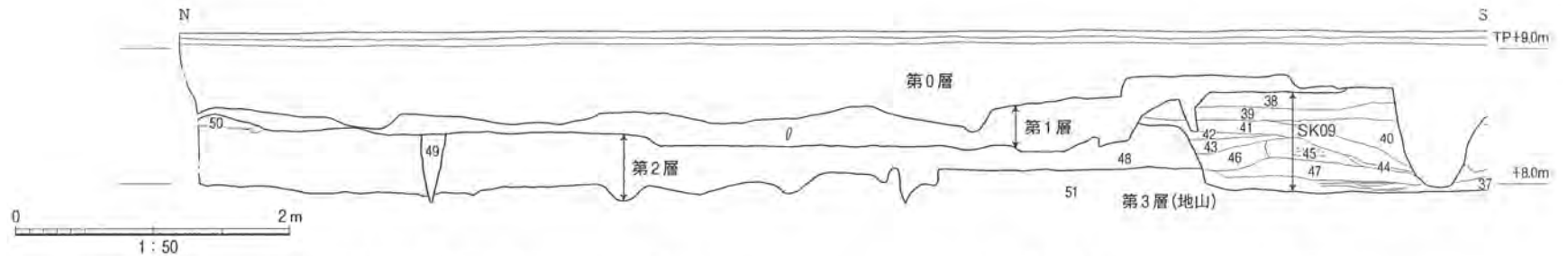
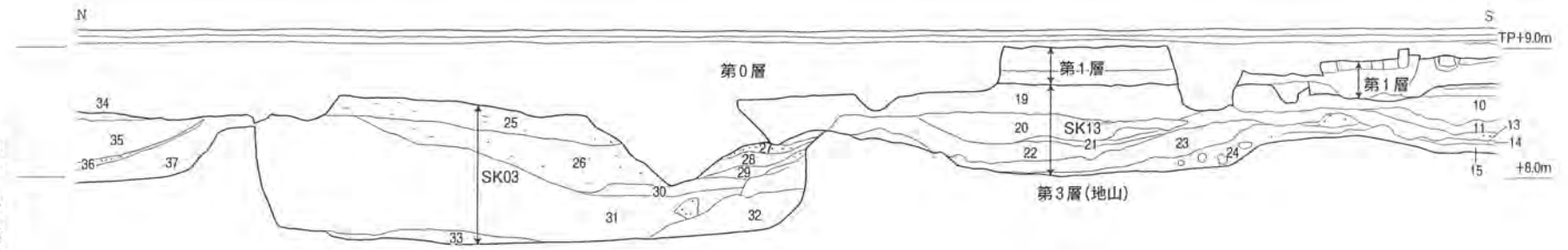
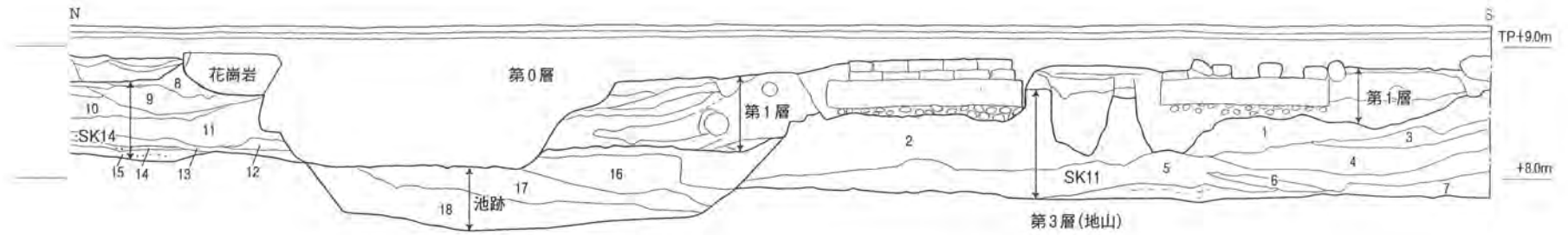


図4 地層と遺構の関係図



- 1: 灰黄色シルト質粗粒砂
- 2: 暗灰黄色シルト質粗粒砂
- 3: 灰黄色シルト質粗粒砂
- 4: 灰黄色シルト質粗粒砂
- 5: におい黄褐色細礫質粗粒砂
- 6: 灰黄色シルト質粗粒砂
- 7: におい黄色粗粒砂
- 8: 灰黄褐色粗粒砂
- 9: におい黄褐色シルト
- 10: におい黄褐色シルト質粗粒砂

- 11: におい黄褐色粗粒砂質シルト
- 12: におい黄褐色シルト
- 13: におい黄褐色粗粒砂質シルト
- 14: におい黄褐色シルト
- 15: 灰黄色シルト
- 16: 明黄褐色粗粒砂
- 17: 浅黄色粗粒砂質シルト
- 18: 灰白色粗粒砂質シルト
- 19: におい黄褐色シルト質粗粒砂
- 20: におい黄褐色シルト質粗粒砂

- 21: 灰黄色シルト
- 22: 灰黄色粗粒砂質シルト
- 23: 灰黄色シルト
- 24: におい黄褐色シルト偽礫含む粗粒砂質シルト
- 25: におい黄褐色シルト質粗粒砂
- 26: におい黄褐色シルト質粗粒砂
- 27: 灰黄褐色粗粒砂
- 28: におい黄褐色シルト
- 29: 暗灰黄色シルト
- 30: 黄褐色粗粒砂質シルト

- 31: 暗褐色シルト
- 32: 暗灰黄色シルト
- 33: におい黄褐色シルト
- 34: におい黄褐色粗粒砂
- 35: 褐色シルト
- 36: におい黄褐色中粒砂
- 37: 褐色シルト
- 38: 褐色シルト質粗粒砂
- 39: におい黄褐色シルト質粗粒砂
- 40: 褐色シルト

- 41: 暗褐色シルト
- 42: におい黄褐色シルト
- 43: におい黄褐色シルト質粗粒砂
- 44: におい黄褐色中粒砂
- 45: 褐色シルト
- 46: におい黄褐色粗粒砂
- 47: 褐色シルト
- 48: におい黄褐色シルト質粗粒砂
- 49: 褐色シルト
- 50: 褐色中粒砂
- 51: におい黄褐色シルト質粗粒砂

図5 東壁断面図

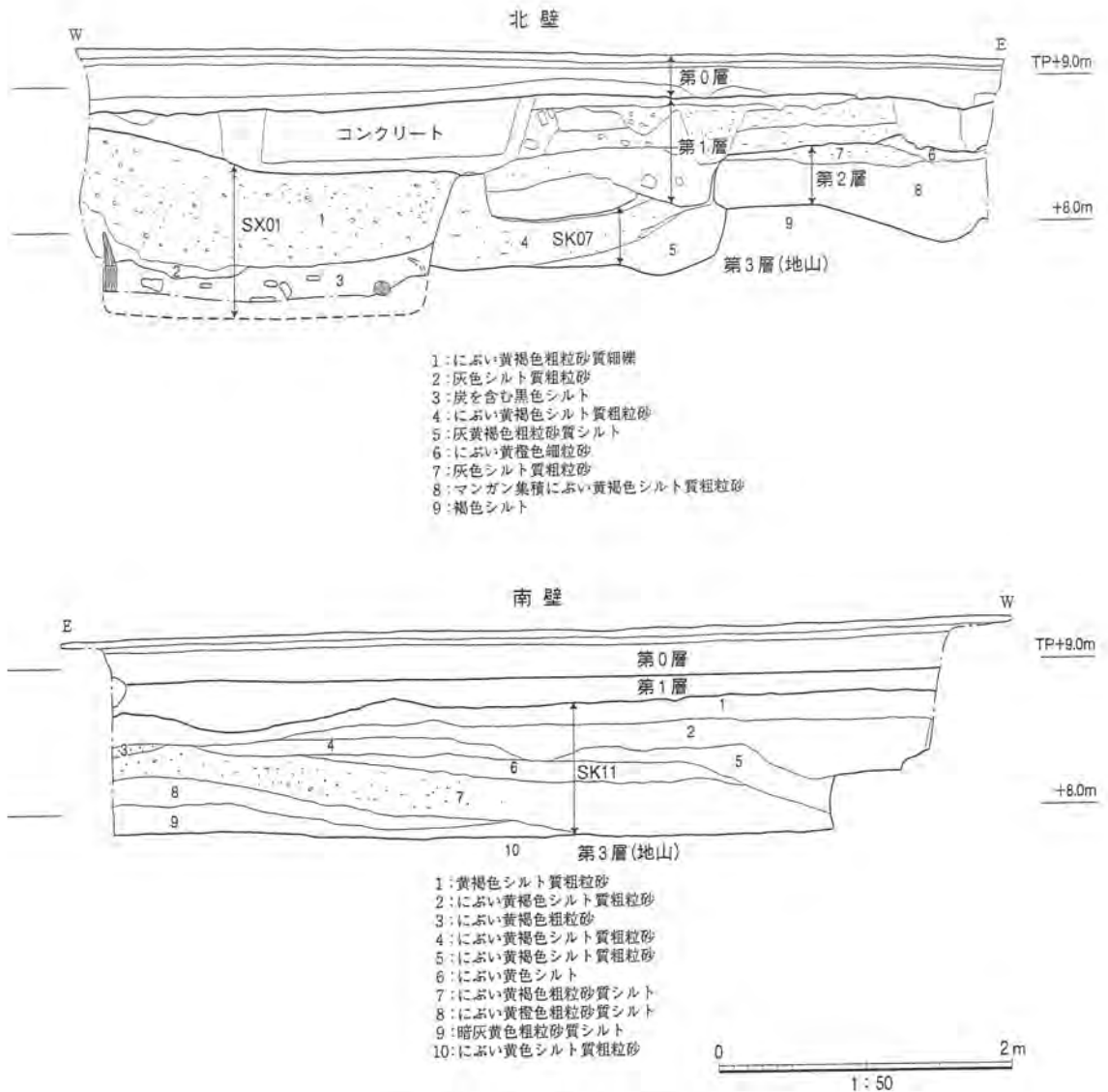


図6 北壁・南壁断面図

SP09 直径0.3m、深さ0.05mのピットで褐色シルト質粗粒砂などを埋土とする。

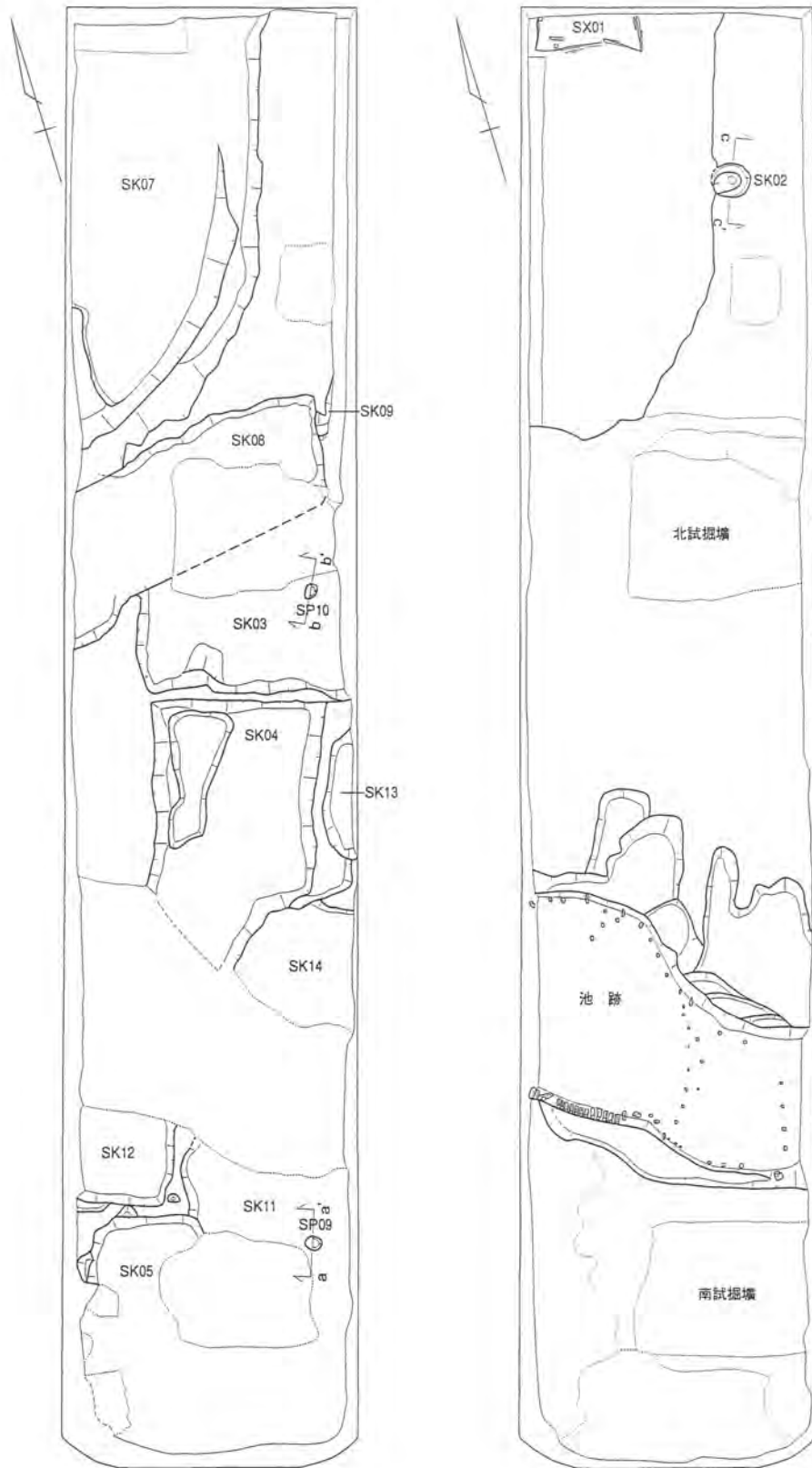
SP10 長径0.3mの楕円形を呈し、深さ0.1mを測るピットで、黄褐色シルト質粗粒砂などを埋土とする。

調査区の大部分はSK03~05・07・08・11~14の近代の土採り穴で占められている。SK08以外はほぼ正方位を意識して掘削されるが、SK03のように底面がTP+7.5mまで掘られた深いものもあるが、ほとんどはTP+8.0m前後の浅いものである。明確な切合い関係がないことから、短期間の土採り後に、一挙に整地されたものと思われる。

#### b. 第1層下面検出遺構

SX01 調査区北西隅に掘られた水溜状の遺構で、一辺2.5m、深さ1.3mの方形の土壌を掘り、底に杭を四隅と辺の中央に打込み、その外側に長さ1.0m、幅0.2mの板材を重複させながら立てて、内部を水溜としている。水溜内からは加工木や陶磁器類が、炭を含む黒色シルトの埋土から出土し、その上層にはにおい黄褐色粗粒砂質細礫が、層厚0.8mで堆積していた。瀬戸美濃焼磁器蓋12・皿13・14





最終面(第3層(地山))の状況

第1層下面検出遺構

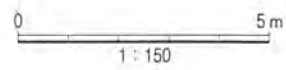


図7 平面図

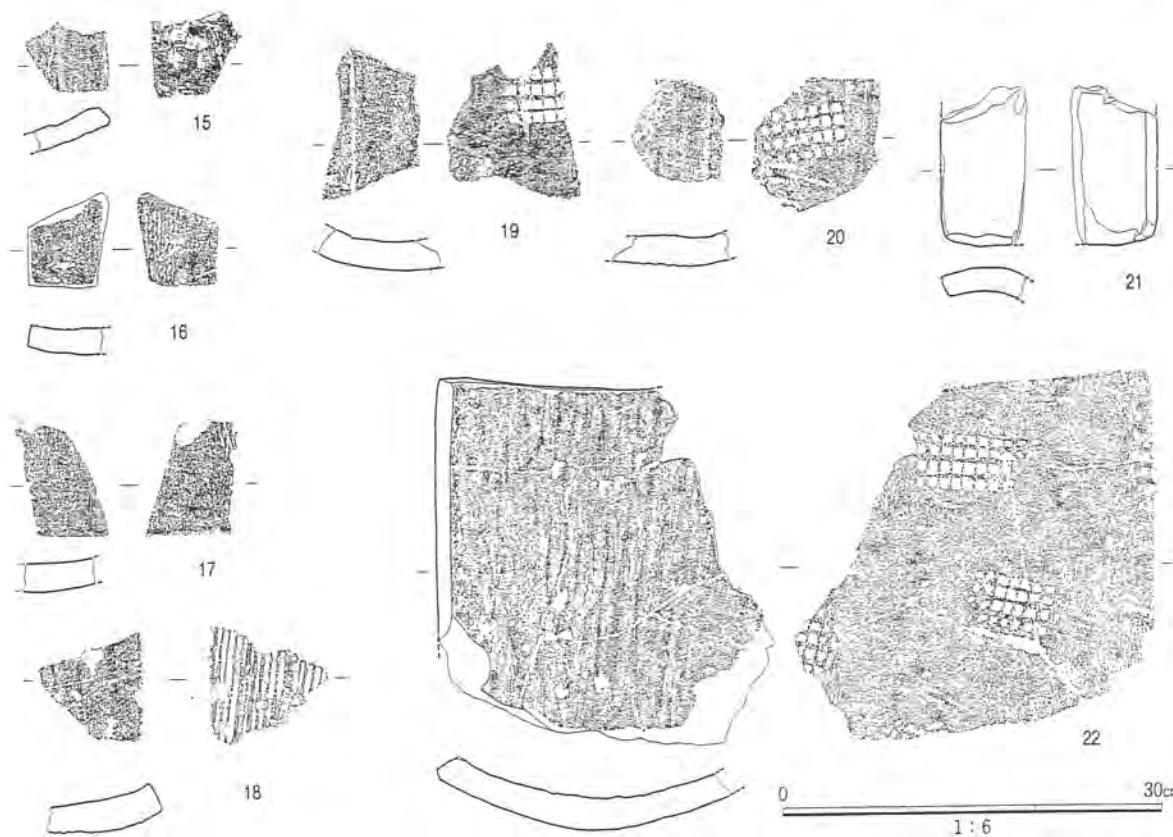
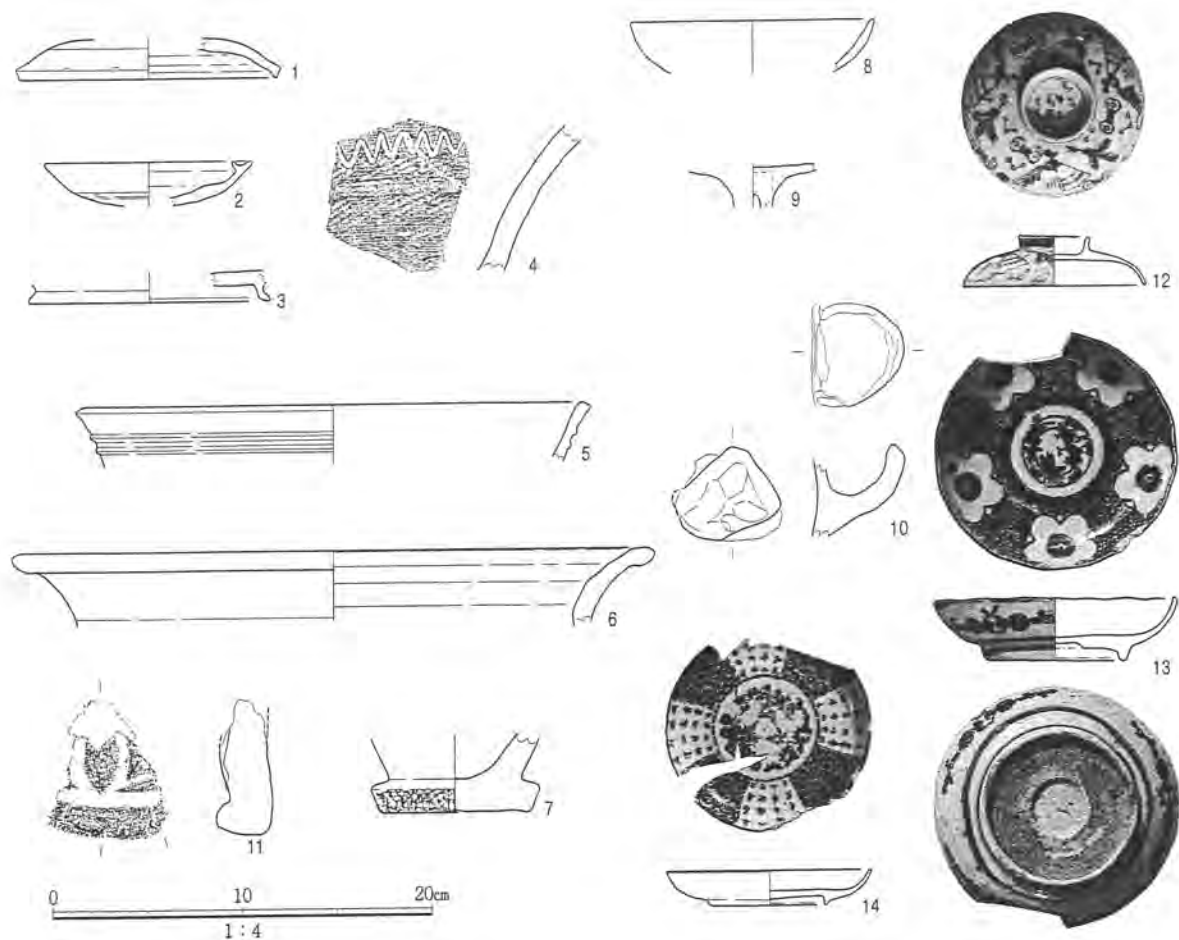


図8 遺物実測図

SK03(1・2・4・5・7・9・10・17・21)、SK04(3・15)、SK07(8・11・18・20・22)、SX01(12~14)、北試掘壙(6・16)



が出土した。12はゴム印で施文し、つまみ内に「晴高園製」の文字が見える。13・14は型紙刷りである。12から昭和時代の投棄と考えられる。

池跡 長さ7.5m以上、幅3.5~5.0m、深さ0.6mを測るやや蛇行する池跡で、側面は杭と板材で土留めしている。西半は底に黒色粘土が層厚30cmで堆積していた。

### c. その他の遺物

須恵器甕6、平瓦16、礎石の可能性のある花崗岩23があり、16は凸面に縄目タタキ痕をもつ。23(図9)は第0層からの出土で、一辺60~70cm、厚さ24~26cmの花崗岩で、平坦面を上にして出土した。表面下部は風化が激しい。近代に灯籠台などに使われたものと思われるが、堂ヶ芝廃寺の主要伽藍の礎石であった可能性もある。

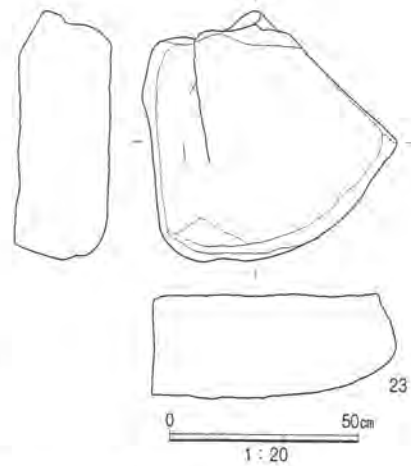


図9 花崗岩実測図

### 3. 考察

今回、石田茂作氏が報告した土壇の東方70mを南北に調査した。氏が推定した法隆寺式伽藍配置としても、中心伽藍の回廊もしくは築地塀の外側の僧房などの関連施設が想定される位置である。しかし、近代の土採り穴が調査区の大半を占め、古い遺構は見られなかった。ただ土採り穴が古代の包含層で埋められていたことから、たくさんの遺物を得ることができた。軒丸瓦11や平瓦22は特筆すべきものだが、土器には6世紀に遡る資料があり、堂ヶ芝廃寺創建以前から、当地が栄えていたことが判明した。

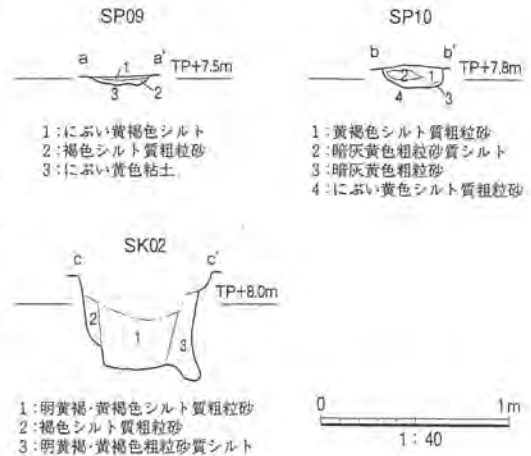


図10 遺構断面図(断面位置は図7参照)

### (まとめ)

近代の土採りのため、寺跡の遺構は失われていたが、多量の古代の遺物が出土し、当地が6世紀代から連綿と続く遺跡であることが確認された。その古くから栄えた土地柄から、日本でも最古級の寺院が建立されたものと考えられる。

今後、周辺の地形を復元しつつ地道に調査を重ねることが、堂ヶ芝廃寺の遺構やその分布を明らかにすることにつながると思う。

### 参考文献

石田茂作1936、『飛鳥時代寺院址の研究』

調査区全景  
地山上面  
(北から)



調査区全景  
地山上面  
(南から)



中央部  
地山上面  
(西から)



池跡(東から)



SX01  
(北から)



礎石の可能性  
のある花崗岩



## 難波京朱雀大路跡発掘調査(NS09-3)報告書

- ・調査箇所 大阪市天王寺区松ヶ鼻町55-15
- ・調査面積 12㎡
- ・調査期間 平成21年8月11日～8月13日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、市川 創

### 〈調査に至る経緯と経過〉

本調査地は難波京朱雀大路跡に位置し、東北には細工谷遺跡、東方には堂ヶ芝廃寺、西方には上本町遺跡が所在する(図1)。これら古代における重要遺跡である3遺跡を南北に縦断する難波京朱雀大路跡は、難波宮の中心軸から真南へ延びる主軸道路と想定されている。

この主軸道路については、難波京朱雀大路の延長である「難波大道」の痕跡と推定される遺構が新大和川以南の複数地点で検出されている[大和川・今池調査会1979、大阪府教育委員会1995、大阪府文化財センター2009]。一方、より難波宮に近い難波京朱雀大路跡では道路痕跡がまだ検出されておらず、起伏の多い地形とも相まって、その実態については様々な意見もあるが、周辺には古代を中心とする遺構・遺物が密に分布しており、上町台地の開発史を考古学的に明らかにするにあたって重要な遺跡であることは論を待たない。

今回の調査地では、事前に大阪市教育委員会によって敷地内の試掘調査が行われた。その結果、現地表下約0.2mにおいて古代の遺物包含層を確認したため、発掘調査を実施することになった(図2)。

調査は2009年8月11日から開始した。現地表面から約0.2mまで重機による掘削を行い、その後現地表から約0.5mまでをすべて人力によって掘削した。その間、遺構検出・掘下げ・記録などの作業を適宜行い、調査を進めた。また、地層の堆積状況を確認するため、部分的に地表下0.9mまでの掘削を行った。こうした調査ののちに埋戻しを行い、8月13日には機材類の撤収を含むすべての工程を完了した。

以下、本報告で使用する標高はT.P.値(東京湾平均海面値)であり、本文・挿図中では「TP+○m」と示す。平面図は図1は座標北を、それ以外は磁北を基準として作成した。

### 〈調査の結果〉

#### 1. 層序

今回の調査では、厚さ約20cmの現代盛土(第0層)以下、部分的な深掘りによって現地表下90cmまでの地層を確認した。以下では、各層の特徴について述べる(図3・4)。なお各層に共通する特徴として、植物の根による著しい擾乱を受けていた。

第1層:後述するSX201を埋立てる地層であり、シルト質中粒～粗粒砂からなる。黒褐色(10YR3/2)

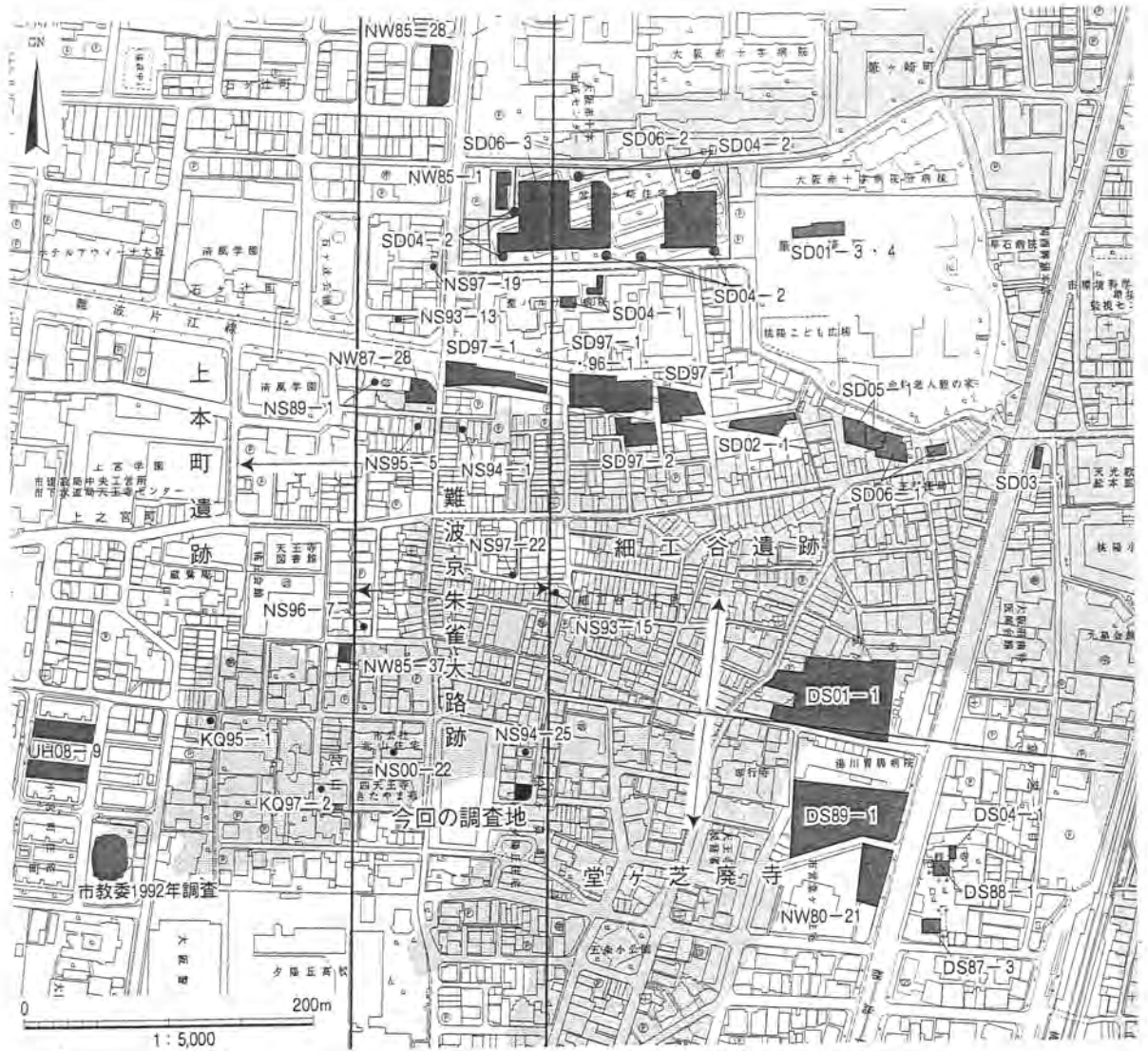


図1 調査地の位置と周辺の埋没谷

(●印は試掘調査、[大阪市文化財協会2007]所収図を一部改変して使用)

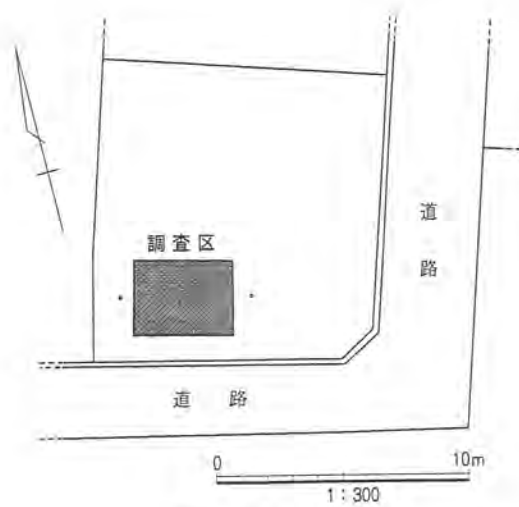


図2 調査区配置図

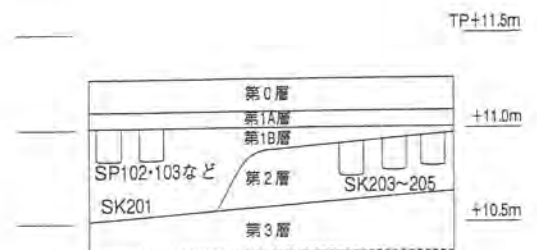


図3 地層と遺構の関係



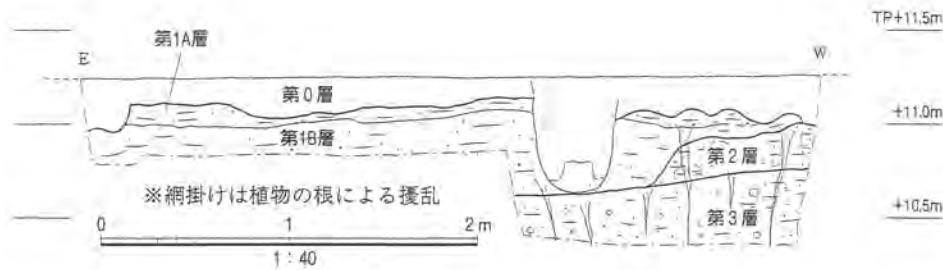


図4 調査区南壁断面

を呈しややシルト分の多い上部(第1A層)と、暗褐色(10YR3/4)を呈しシルト分の少ない下部(第1B層)に細分した。層厚は第1A層が11cm以下、第1B層が44cm以下であった。本層からは土師器・須恵器が出土し(図7)、これらの遺物から本層は7世紀後葉以降に堆積したものとわかる。本層上面では土壌SK101のほか、SP102~107を検出した。

第2層：整地層である。黄褐色(10YR6/8)を呈するシルト質中粒砂からなり、シルト質中粒～粗粒砂の偽礫を含む。層厚は最大で24cmであり、遺物は出土しなかった。本層上面では第1層によって埋まるSX201のほか、SK202、SP203~207を検出した。

第3層：明黄褐色(10YR6/8)を呈する小礫混りシルト質中粒～粗粒砂からなる。調査区南東隅に設けた深掘りトレンチでのみ確認した。第1・2層と同様に植物の根による著しい擾乱を受けていたが、岩相から段丘構成層である可能性が高い。検出範囲の中では、本層上面は東側が低くなっていた。層厚は40cm以上あり、遺物は出土しなかった。

## 2. 遺構と遺物

### a. 第2層の遺構(図5)

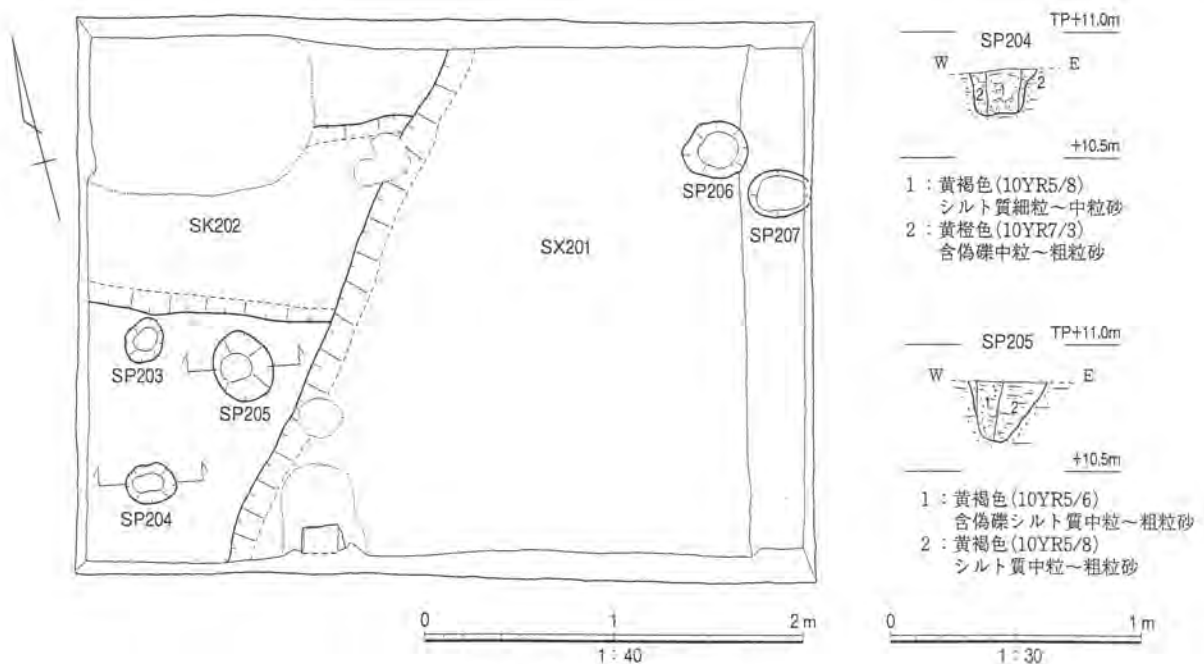


図5 第2層の遺構実測図

SX201は調査区の東半を占め、南東に向って下がる遺構である。SK202を切っており、第1層によって埋る。調査区東端に掘削したトレンチで確認した検出面からの深さは0.4mであった。

SK202は、調査区の北西部に位置する土壌である。南北に1.06m、東西に1.54m以上の規模がある。完掘することはできなかったが、検出面からの深さは0.15m以上ある。遺物は出土しなかった。

SP203は不整形な楕円形を呈し、長辺0.24m、短辺0.20m、検出面からの深さは0.10mある。遺物は出土しなかった。

SP204も不整形で、長辺0.26m、短辺0.22m、検出面からの深さは0.18mある。断面観察により直径0.13mの柱痕跡が検出できた。遺物は出土しなかった。

SP205は楕円形を呈し、長辺0.38m、短辺0.32m、検出面からの深さは0.19mを測る。断面観察により直径0.10mの柱痕跡を検出した。遺構内から土師器片が出土している。SP204と205はともに柱穴であるが一連の構造物を構成したかについては、明らかでない。

SP206は直径0.35m、検出面からの深さ0.05mと浅い。土師器の細片が出土した。

SP207は長辺0.36m、短辺0.24m、検出面からの深さ0.03mとやはり浅い。遺物は出土しなかった。これら第2層に伴う遺構からは時期決定可能な遺物が出土しておらず、遺構群の時期は不詳である。

#### b. 第1層の遺構と遺物(図6・7)

SK101は調査区の北西部で検出した土壌である。規模は2.30m以上ある。検出面からの深さは0.10mであり、小礫混りのシルト質中粒～粗粒砂で埋る。埋土から図6-4などの土師器のほか、須恵器片が出土した。4は土師器鉢である。定形化していない形態や内面の暗文から、7世紀代の資料と考える。

SP102は直径0.30mで、検出面からの深さは0.20mである。断面観察により、直径0.07mの柱痕跡を検出した。遺物は出土しなかった。

SP103は直径0.42mで、検出面からの深さは0.20mである。断面観察により、直径0.07mの柱痕跡を検出した。遺物は出土しなかった。

SP104は直径0.40mで、検出面からの深さは0.22mである。土師器・須恵器の細片が出土した。

SP105は調査区西端で検出したもので、直径は0.10m以上である。検出面からの深さは0.19mである。遺物は出土しなかった。

SP106は直径は0.30mであり、検出面からの深さは0.14mである。断面観察により、直径0.08mの柱痕跡を検出した。遺物は出土しなかった。

SP107は直径0.26m、検出面からの深さは0.21mである。土師器片が出土した。

これらの遺構からは時期の確定できる遺物が出土しておらず、遺構群の時期は不詳である。

#### c. 第1層出土遺物(図7)

第1層からは、弥生土器・土師器・須恵器が出土した。1～3はいずれも土師器高杯である。このうち大型の1は器表面の磨滅が著しいが、外面の一部にハケメ、内面の一部に指頭圧痕がある。古墳時代中期のものであろう。2・3についても近似した時期の資料と考えられる。5は弥生時代後期の鉢あるいは甕で、外面にはタタキメ、底部には葉脈の圧痕がある。6は須恵器杯Bの底部である。高



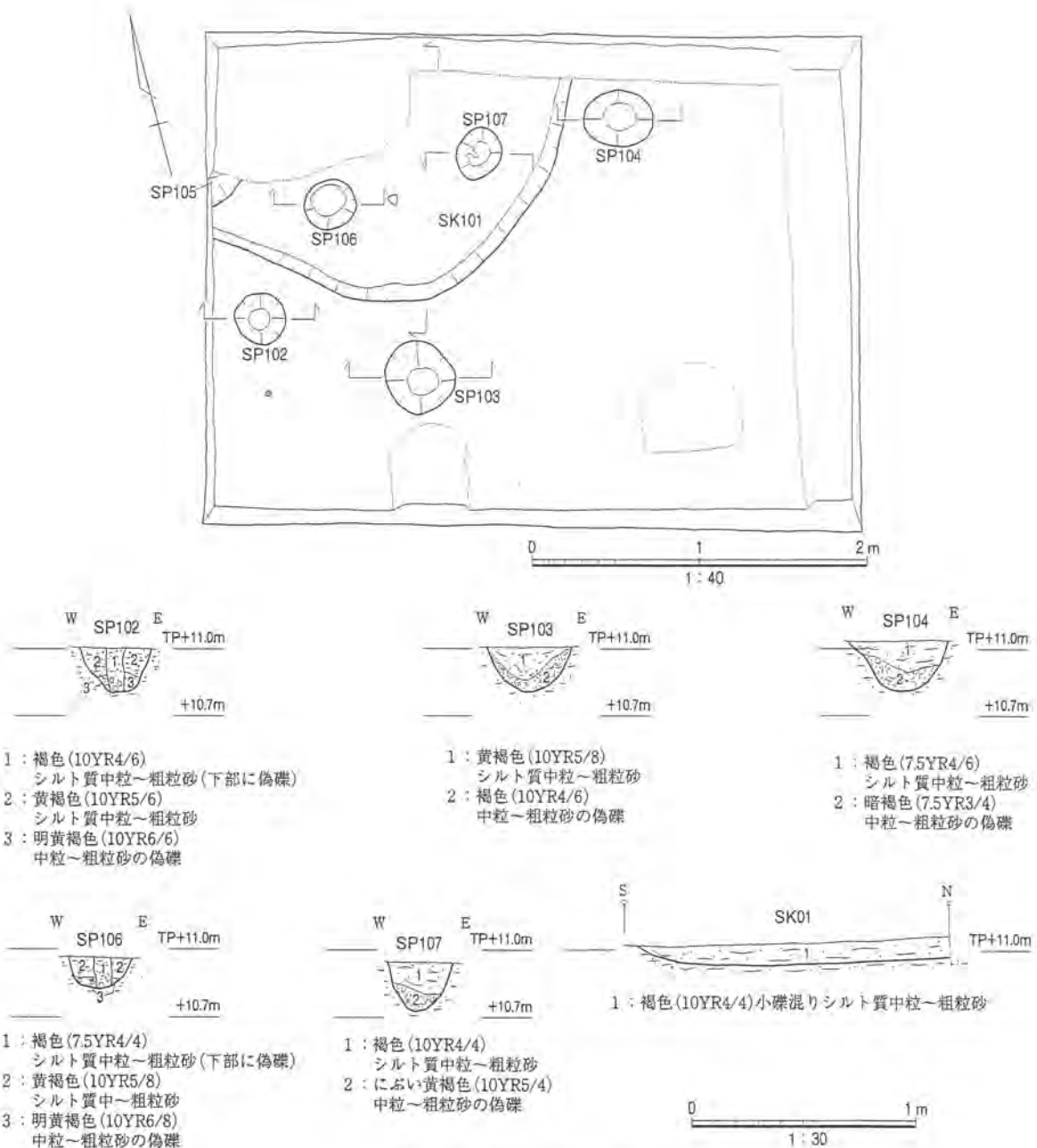


図6 第1層の遺構実測図

台形態にやや定形化していない感があり、難波IV前後に属する資料と考えられる[佐藤隆2000]。したがって、弥生時代後期や古墳時代の土器を含みはするが、第1層の堆積時期は7世紀後葉以降に下る。

〈まとめ〉

今回の調査では、明瞭な道路遺構の痕跡は確認出来なかったものの、これまでに周辺で得られた成果に一定度の知見を加えることができた。その主たる成果は以下のとおりである。

第1層および第2層による整地を確認した。起伏の多い周辺地形を考えれば、これらの整地が谷地形などの土地条件を克服しようとしたものであったと推測できる。出土遺物が少なくその時期は明確にしがたいが、第1層については7世紀後葉に下るものである。難波京の整備とも係わって、周辺の

開発を考える上で重要な知見である。また、遊離史料ではあるが、弥生時代後期の土器や古墳時代中期の土師器が出土した。このことは、周辺において該期に人間活動が行われたことを示す。とくに古墳時代中期については、細工谷遺跡でこの時期の開発の痕跡が認められており[大阪市文化財協会2007]、その関連性が注目できる。

今回の調査で得たこうした知見に対し、今後とも周辺調査における成果を積み重ねていくことが必要であろう。

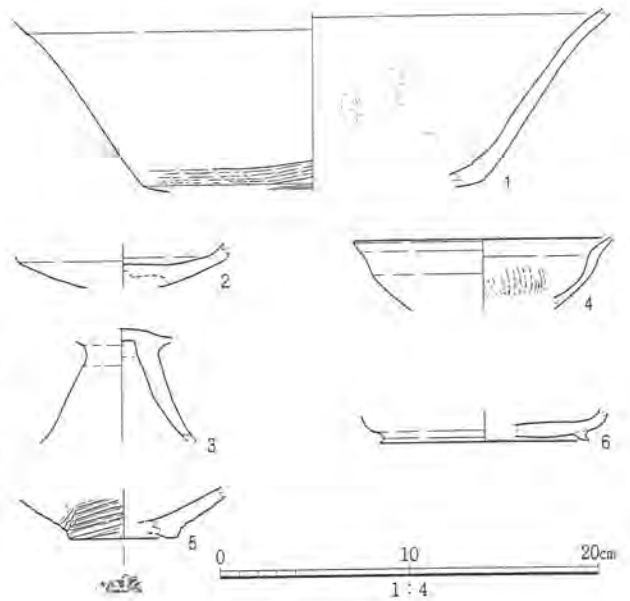


図7 出土遺物  
SK101(4)、第1層(1～3・5・6)

#### 引用・参考文献

大阪市文化財協会2007、『細工谷遺跡発掘調査報告』Ⅱ

大阪府教育委員会1995、『大和川今池遺跡発掘調査概要』XII

大阪府文化財センター2009、『大和川今池遺跡Ⅰ－難波大道の調査－』

佐藤 隆2000、『古代難波地域の土器様相とその史的背景』：『難波宮址の研究』第十一 大阪市文化財協会、pp.253-265

高橋 工2007、『細工谷遺跡周辺の古代における谷の開発について』：『細工谷遺跡発掘調査報告』Ⅱ 大阪市文化財協会、pp.61-68

大和川・今池調査会1979、『大和川・今池遺跡 第1地区発掘調査報告』

調査区南壁断面  
(北西から)



第2層の遺構  
(東から)



第1層の遺構  
(東から)



# V 淀川区

## 宮原遺跡発掘調査(MH09-3)報告書

- ・調査箇所 大阪市淀川区宮原1丁目4-1・4-9
- ・調査面積 75㎡
- ・調査期間 平成21年12月21日～12月25日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 文化財研究部次長 南 秀雄、京嶋 覚

### 〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は宮原遺跡の北東部に当り、中世の「宮原荘」の範囲内であると推定される。

摂津国西成郡に属する宮原荘は1220(承久2)年の文書に「宮原田参町」、1280(弘安3)年の文書に「宮原北方庄内」が初見で13世紀代には存在していたことがわかるが、領主については1351(正平6)年の文書で奈良春日神社領であったことがわかるのが最初である。南北朝時代には宮原荘・宮原北荘・宮原南荘に分割されていたとされ、宮原南荘が中島南方を指す可能性があることから、今回の調査地は春日神社領の宮原荘か興福寺領の宮原北荘内の可能性が高い。その後、15世紀以降はしだいに西成郡守護により支配が固められていったとされる[大阪市1988]。

周辺の調査では、MH99-3次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2001]で室町時代の東西方向の坪境溝が検出され、地層からは埴



図1 調査地位置図

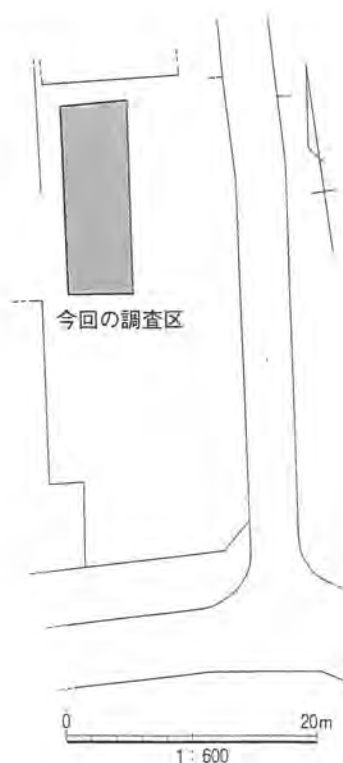


図2 調査区位置図

輪や古代の土師器・須恵器が出土している。また、MH06-1・2次調査[大阪市文化財協会2008a・b]では明確な遺構は検出されていないものの、12~15世紀代の遺物が出土しており、荘園があった時代の遺物が確認されている(図1)。

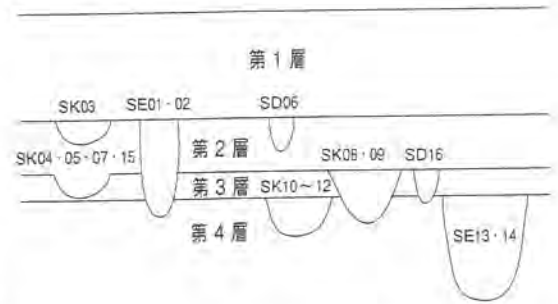


図3 地層と遺構の関係図

本調査地では事前の試掘調査で、地下0.8m以下に鎌倉~江戸時代と思われる遺構面が確認されたため、敷地の北半部に南北15m、東西5mの調査区を設け発掘調査を行うことになった(図2)。

重機による表土掘削を行うと、地下0.6mほどで地山層と思われる砂礫層が検出されたため、その上面の精査と遺構の掘削および記録作業に努めた。

12月25日には記録作業を終えるとともに埋戻し・機材撤収などの作業を行って現場での作業を完了した。

以下にその結果を報告する。なお、図中の方位は図1が座標北のほかは磁北、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・図中ではTP+〇mと記している。

## 〈調査の結果〉

### 1. 層序(図3・4)

第1層：細礫を含む暗灰黄色(2.5Y4/1)細粒砂質シルト層で、近現代の盛土層および攪乱の埋土である。層厚は30~50cmである。

第2層：にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂質シルト層で、層厚は約10~20cmである。近現代の作土層である。SE01・02およびSK03、SD06は本層上面の検出で、SK04・05・07・15は本層下面検出の遺構である。

第3層：灰黄褐色(10YR5/2)細粒~中粒砂質シルト~暗褐色(10YR3/4)シルト質細粒砂層で、層厚は5~15cmである。近世の作土である。SK08・09はおよびSD16は本層上面検出の遺構である。

第4層：にぶい黄褐色(10YR3/4)細粒~中粒砂層で、地山層と思われる水成層である。SE13・14およびSK10~12は本層上面で検出された。

### 2. 遺構と遺物(図4・6)

#### a. 第4層上面検出遺構

南半部でSE13・14、SK10~12を検出した。

SE13は直径2.0m、深さ1.1m以上の井戸で素掘りと思われる。下方は直径0.8mの規模にすぼまっている。埋土はにぶい黄褐色(10YR5/4)中粒~粗粒砂で、細粒~中粒の礫やシルト偽礫が含まれる埋戻し土である。出土遺物には丹波焼徳利・堺播鉢・土師器播鉢・肥前磁器染付などがある。

SE14は掘形の規模が南北2.5m、東西が1.6~2.0mで、土製の井筒を用いている。土製井筒は直径0.54m、高さ0.2m以上で、本来は瓦質と思われるが、焼成があまく土師質に見える。土製井筒は2段確認され、最下部は曲物の井筒があったことを示す木質部分が確認された。この井筒の南側に土製井

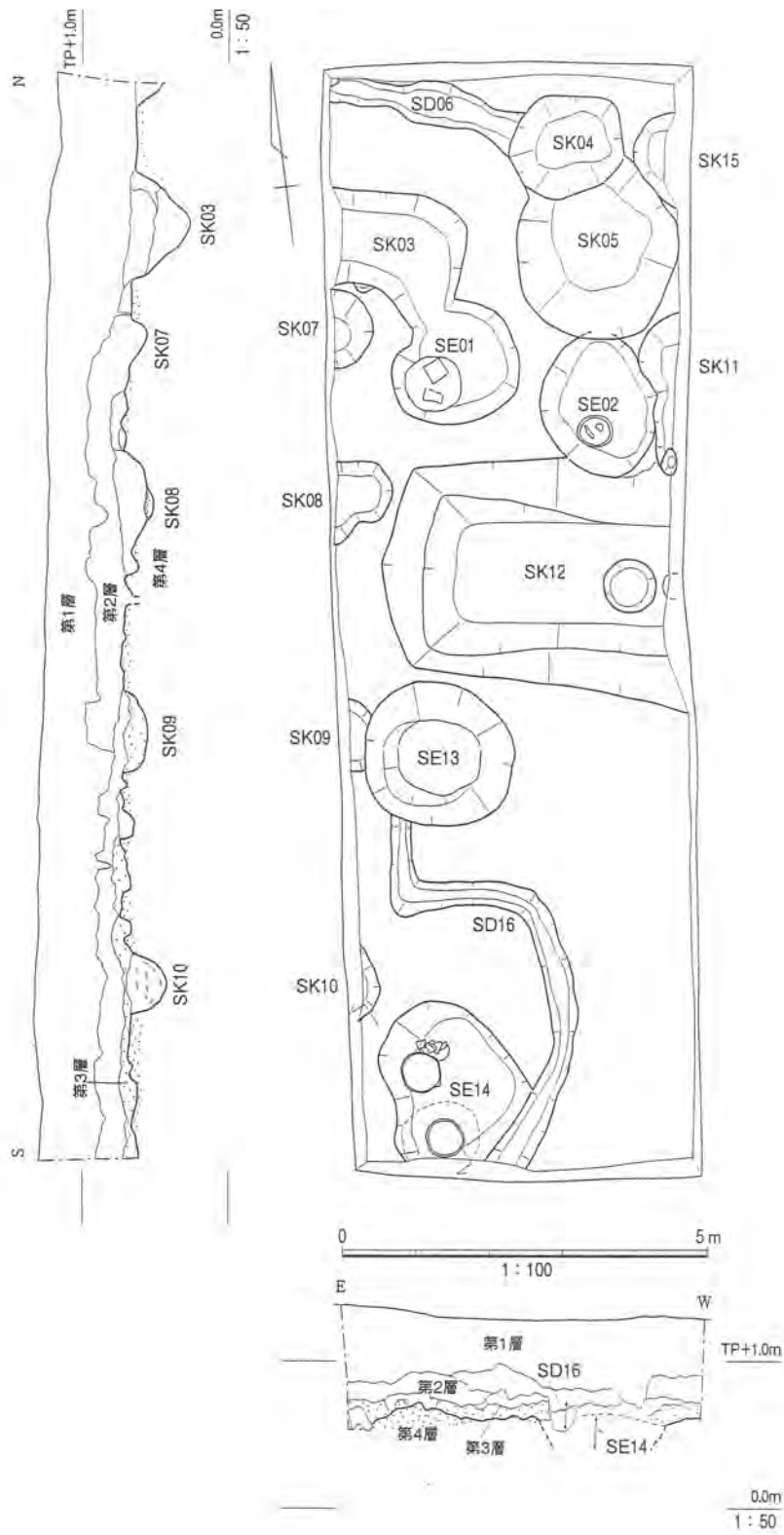


図4 第2～4層上面平面図および西・南壁断面図



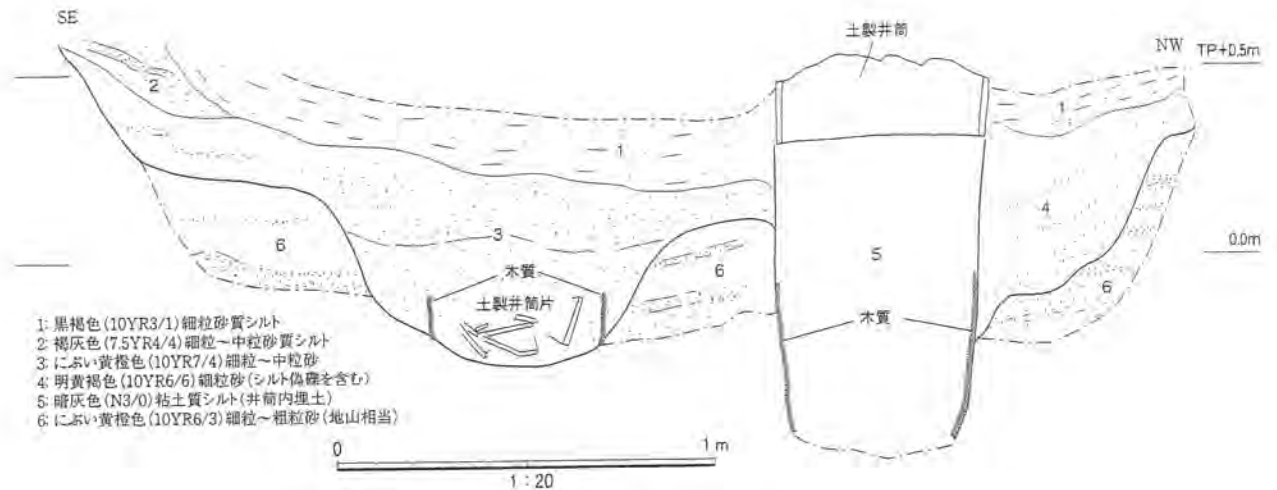


図5 SE14断面図

筒の破片がまとまって含まれている部分が掘形断面で確認され、掘削を進めると最下部にやはり上部が瓦質の土製井筒で最下部に曲物の痕跡が確認され、当初構築された井戸が改築されていたことが判明した。

掘形の埋土は上部が黒褐色(10YR3/1)細粒砂質シルト、下部はにぶい黄褐色(10YR7/4)～明黄褐色(10YR6/6)細粒～中粒砂である。改築後の井筒内部は暗灰色(N3/0)粘土質シルトで埋っていた(図5)。

出土遺物は少量であるが、2点以上の土製井筒6・7のほか、掘形から瓦器椀、瓦質土器羽釜、土師器皿・椀、常滑焼大甕5、備前焼播鉢3が、井筒内部から瓦質土器羽釜1、中国製青磁碗2、砥石4などが出土し、15世紀初頭前後に埋ったものと思われる。

SK10は南部の西壁にかかっていた直径0.8m以上、深さ0.25mの円形と推定される土壌である。埋土は灰黄褐色(10YR5/2)細粒砂質シルトである。

SK11は北部の東壁にかかっていた南北1.8m以上、深さ0.4mの土壌である。埋土は暗灰黄色(2.5Y4/2)の礫を含むシルト質が強い粗粒砂層である。瓦質土器片や土製玩具が出土した。

SK12はSK11の南に隣接する東西4m以上、南北3m以上、深さ0.7mの大型土壌である。埋土はSK11と同様の粗粒砂で一連の遺構と思われる。肥前磁器染付碗が出土している。

以上の遺構の時期はSE14が15世紀代まで遡るほかは、18世紀後半～19世紀代と思われる。

#### b. 第3層上面検出遺構

SK08・09およびSD16がある。

SK08・09はいずれも調査区西壁にかかって検出された南北1m前後、深さ0.15mの土壌である。遺物は出土しなかった。

SD16は調査区南部で検出された幅0.3～0.4m、深さ0.1mの溝で、SE13南肩部から直線的に南に1m延び、東に直角に曲って弧を描きながら南に続き、SE14の掘形を切っている。肥前磁器染付の筒形碗や瓦質土器が出土した。

以上の遺構は出土遺物が少なかったが18・19世紀代のものであろう。

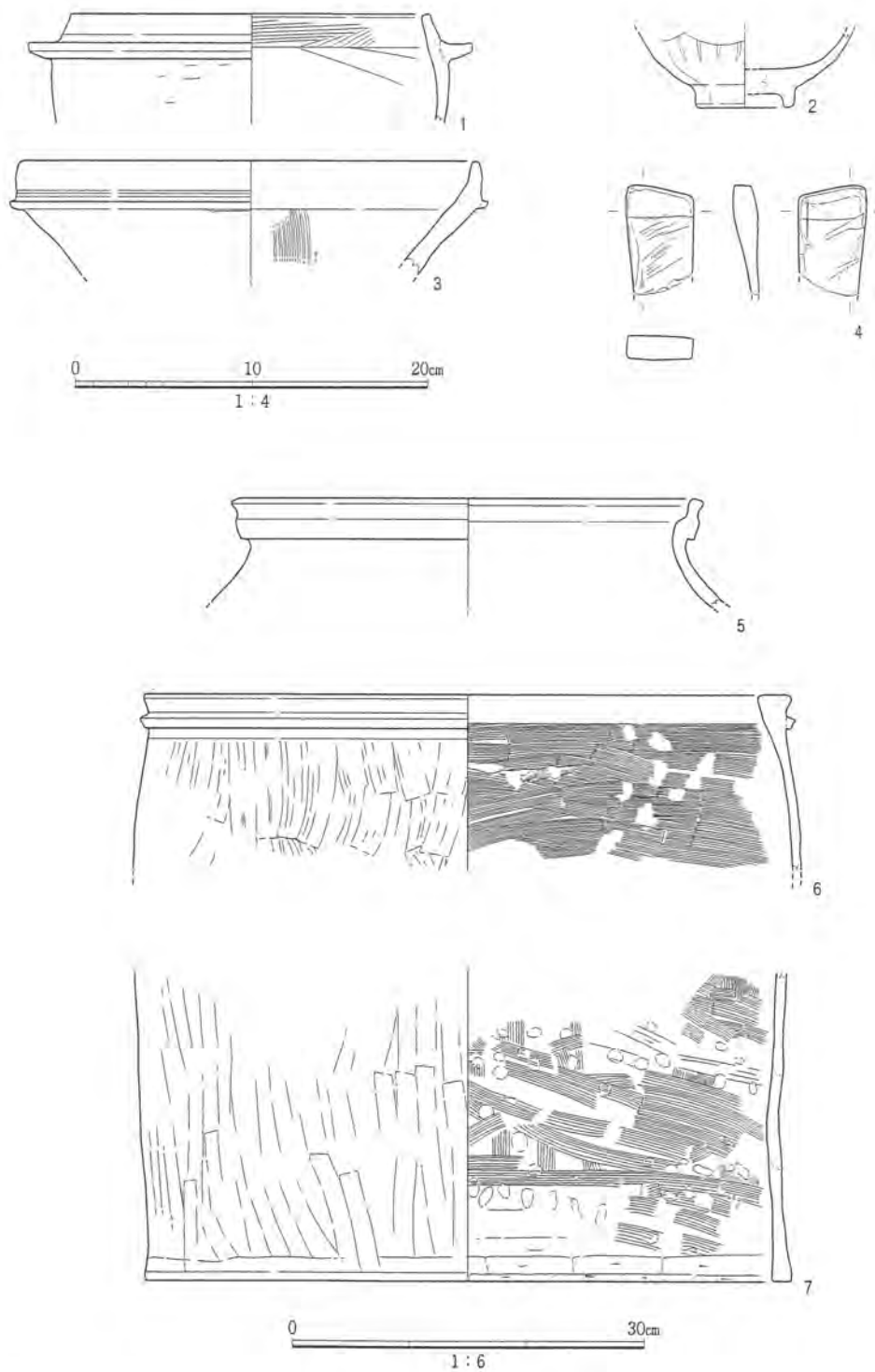


図6 SE14出土遺物実測図

c. 第2層上・下面検出遺構

SK04・05・07・15を下面で、SE01・02およびSK03、SD06を上面で検出した。

土壙SK03～05・07・15はいずれも調査区北部で検出した土壙で、瀬戸美濃焼磁器染付や関西系陶器、瓦質土器焜炉のほかガラス製品が含まれるものがあり、最終的な埋没が近代に下る可能性がある。SD06も北端で検出された幅0.3mの溝であるが、遺物は出土しなかった。

SE01は上部に直径0.7mの木枠の井戸側がある現代まで機能した井戸で、井戸側内部の埋土はオリーブ黒色(5Y3/1)シルト質粗粒砂～細礫である。関西系陶器、土師器焙烙のほかセルロイド製石罅箱も出土し、現代まで使用されたのであろう。SE02は最下部に直径0.5mの木桶が置かれ、関西系陶器、棧瓦、瀬戸美濃焼磁器染付碗・皿、木製柄付き鉄製庖丁など近代の遺物を含む黒褐色(5YR2/2)シルトで埋戻されている。

以上の遺構は19世紀後半以降、現代まで使用された遺構であろう。

#### 〈まとめ〉

今回の調査では中世「宮原荘」の初期の遺構・遺物は確認できなかったが、荘園末期の15世紀代に遡る井戸を確認することができた。土製井筒と曲物を用いた生活用井戸であり、この付近が当該期の屋敷地内に位置していたことを示している。今後、周辺での調査成果がさらに蓄積されていくことで、中世「宮原荘」の盛衰の過程を具体的に辿ることも可能になっていくだろう。

#### 引用・参考文献

大阪市1988、「新修大阪市史第2巻」

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2001、「丸紅株式会社による建設工事に伴う宮原遺跡B地点発掘調査(MH99-3)報告書」：『平成11年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008a、「宮原遺跡発掘調査(MH06-1)報告書」：『平成18年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008b、「宮原遺跡発掘調査(MH06-2)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2006)』

検出遺構全景  
(南から)



SE14(北から)



SE14造替前底部  
(北から)



## 西中島遺跡発掘調査(WN09-2)報告書

- ・調査箇所 大阪市淀川区西中島1丁目105・144・145・106の一部
- ・調査面積 125㎡
- ・調査期間 平成21年4月30日～5月13日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、平田洋司

### 〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は淀川の右岸に位置する(図1)。調査地周辺は淀川水系の堆積作用によって形成されたデルタ上に立地している。北東約1.3kmには崇禅寺遺跡があり、弥生時代末～古墳時代前期・室町時代の集落跡が検出されている。また、南約1kmの豊崎遺跡では古墳時代前期の土器が出土している。

標題地において大規模工事が計画されたことから、周知の遺跡範囲外ではあるが、事前に大阪市教育委員会による試掘調査が実施された。その結果、現地地表下0.5mから1.2mまでの間に土師器や瓦器などを含む遺物包含層が存在することが明らかとなったため、本調査を実施することとなった。

調査は平成21年4月30日から開始した。試掘調査の結果にもとづき、敷地の西に南北25m東西5mの調査区を設定し(図2)、重機による掘削を開始した。重機による掘削は後述の第7層上面までとし、以深は人力による掘削を行い、適宜遺構検出・記録作業を実施した。同年5月13日、埋戻し作業などの旧状復帰を行い、現地における調査を完了した。

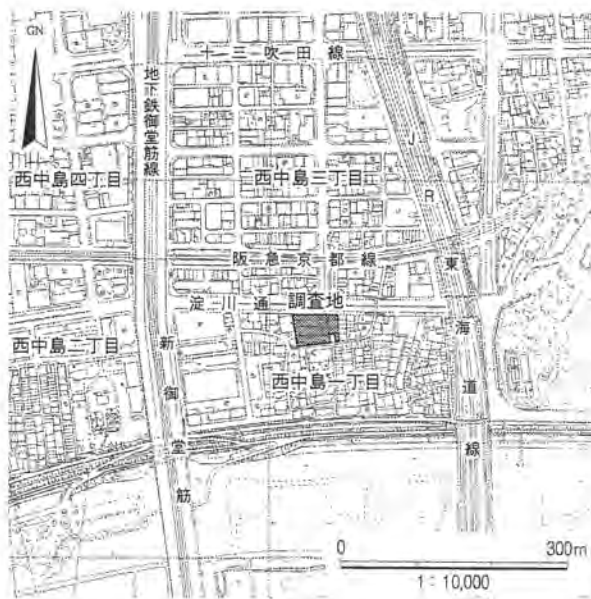


図1 調査地位置図



図2 調査区位置図

調査および本報告で使用した水準値は東京湾平均海面値であり、本文・挿図中ではTP+〇mと表記する。方位は図1・2・7は座標北、図4・5は磁北である。

#### 〈調査の結果〉

##### 1. 層序(図3・4)

本調査では現地表下約1.5mまでの地層を第1～8層に区分した。各地層の特徴は以下の通りである。

第1層：現代盛土層で層厚は20～25cmである。

第2層：シルト偽礫を含む暗オリーブ褐色シルト質細粒砂からなる整地層である。層厚は20cm程度であるが、南では35cmと厚みを増す。本層の上面では土壌などが見られた。近代の整地層と考えた。

第3層：シルトなどの偽礫を多量に含む暗オリーブ褐色細礫混り粗粒砂質シルトからなる整地層で、層厚は30～45cmである。本層上面では井戸などが認められた。近世の整地層である。

第4層：オリーブ褐色シルト質細粒砂からなる作土層で、層厚は15cm程度である。下面では耕作に伴うと考えられる凹凸が顕著に見られる。遺物は確認されなかったが、上下位の層位関係から近世に位置づけられる。

第5層：暗オリーブ褐色細粒砂質シルトからなる作土層で、層厚は10～20cmである。下面では耕作に伴うと考えられる凹凸が認められた。土師器・瓦器細片を含み、中世に位置づけられる。

第6層：オリーブ褐色～暗褐色シルトからなる作土層で、層厚は10cm未満である。下面では耕作に伴うとみられる北で西に振る方位の小溝群が検出された。土師器・瓦器細片を含むことから中世に位置づけられる。

第7層：暗オリーブ褐色～暗褐色を呈する細粒砂質シルトおよび細礫混りシルト質粗粒砂などからなる古墳時代前期の遺物包含層である。2層程度に細分でき、下部は細礫を多く含む。層厚は15～20cmである。本層中および本層下面にて柱穴・土壌・溝など古墳時代前期の遺構が確認された。下面にて検出した遺構についても本来は本層中に掘込面を持つ遺構と判断できる。

第8層：本層は部分的な掘削を行ったのみである。褐色細礫および黄褐色粗粒砂などからなる河成層である。層厚は50cm以上ある。本層上面の標高はTP+0.1m前後である。一部のみの観察ではあるが、堆積状況から概ね南西方向に流れの向きがあり、深みが徐々に北西へと移動していったようすが認められた。最上部には細礫および中礫が多く堆積し、急激な水流によって土砂が運ばれ、陸地化していったものと推定できる。層中から土器体部片が1点出土した。著しく磨滅しているため時期は不明であるが、径が大きく、弥生土器の可能性はある。

##### 2. 遺構と遺物(図4～6)

第7層中および下面にて、掘立柱建物・柱穴・土壌・溝などを検出した。第7層下面にて検出した

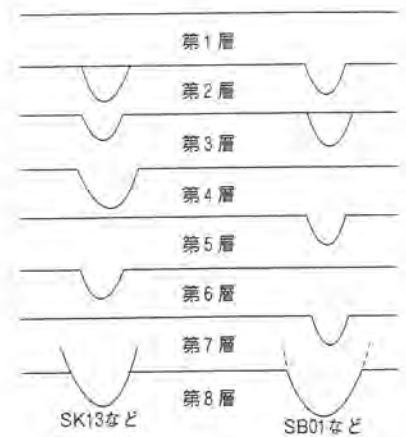


図3 地層と遺構の関係図



遺構についても、本来は第7層中に掘込み面があると考えられるものである。いずれも出土遺物から古墳時代前期に位置づけられる。主要な遺構について記す。

a. 建物・柱穴

SB01 調査地南部で検出した掘立柱建物である。柱穴の並びからSP57・60・66・86・54・59・96・84で構成される南北3間(5.4m)、東西2間(0.9m)以上の総柱建物に復元した。柱間隔は0.85m～1.00mである。柱痕跡は平面形が直径0.12～0.15mの円形と共通するが、柱穴の深さは検出面から0.03～0.55mとばらつきが大きい。特にSP57を隅柱とみるにはやや浅いこと、その西側のSP54も浅いことから、南北方向については2間であるのかもしれない。土師器片が少量出土したが、図化できるものはない。

柱穴 多くの柱穴を検出した。遺存状況のよいものと悪いものがあるが、SB01を構成するもの以外で、図4中にSPの記号と遺構番号を付した柱穴はいずれも検出面からの深さが0.2m以上のものである。調査地北側に柱穴が集中する部分があり、組合せを復元することはできないものの、建物が存在した可能性がある。

SP29からは土師器器台6・甕11が、SP35からは土師器高杯5が、それぞれ出土した。

b. 土壙

形状・規模ともにさまざまな種類の土壙を検出した。遺物が出土したおもな土壙について記す。

SK19 調査地北部で検出した長軸0.7m、深さ0.1mの平面形が不整形な土壙である。

土師器高杯1が出土した。

SK22 SK19の南に位置し、切合い

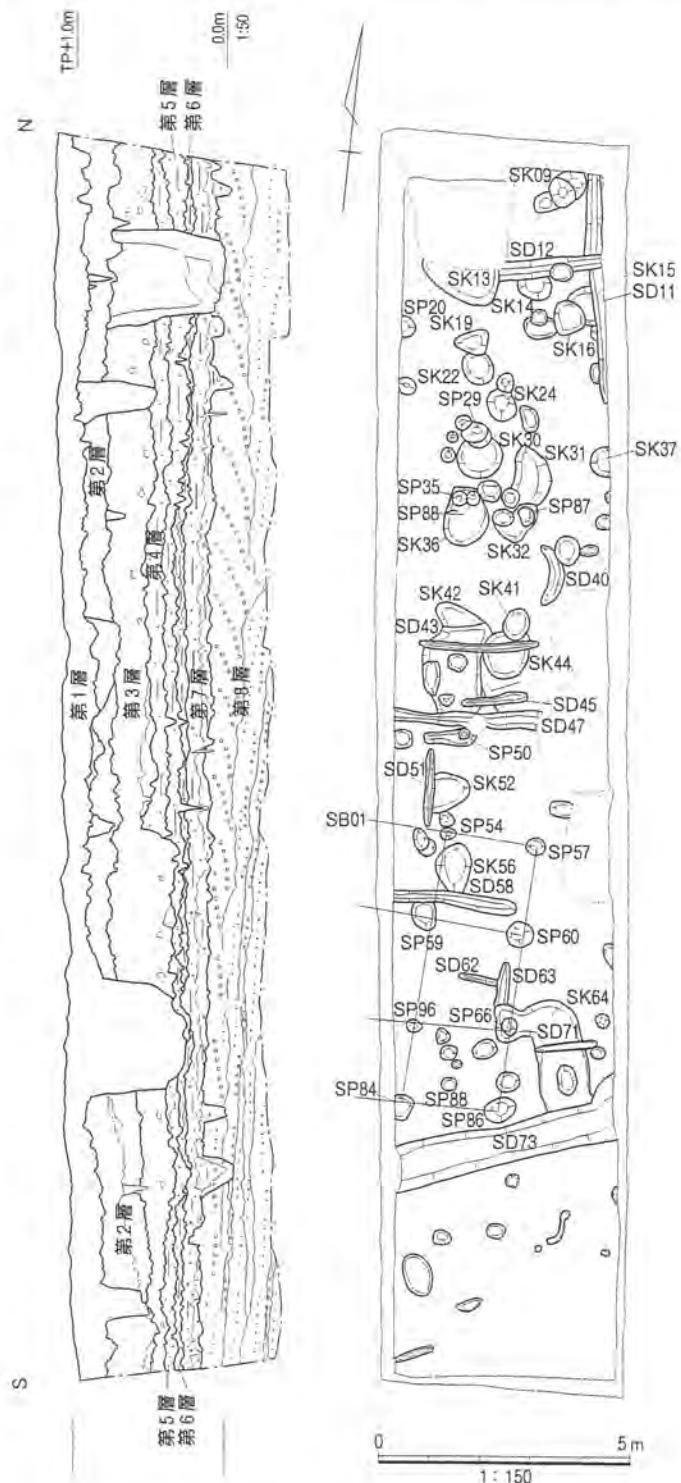


図4 第7層内・下面の遺構平面図および西壁断面図



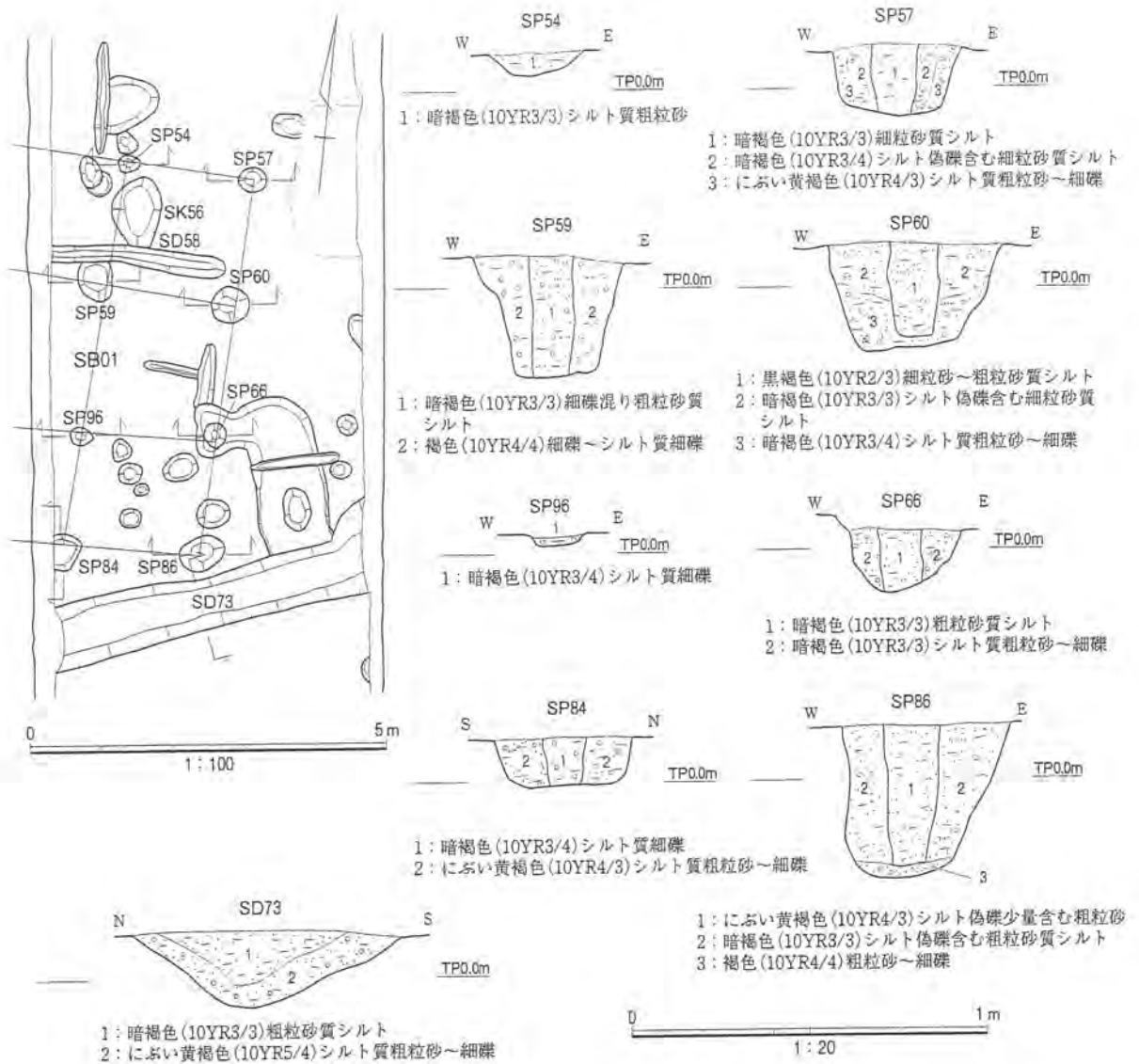


図5 SB01・SD73平・断面図

関係からSK19に先行する。直径0.6m、深さ0.2mの平面形が円形の土壇である。

土師器高杯3・4、小型丸底壺8、甕12などが出土した。

SK30 北部で検出した直径0.9m、深さ0.2mの平面形が円形の土壇である。底部は平坦で、埋土の上部には炭を含む。

土師器ミニチュア器台9が出土した。

SK64 調査区南部で検出した最大長2.2mの平面形が不整形な土壇である。深さは0.1m未満で規模に比して浅い。

土師器小型丸底壺7、甕13、鉢14・15などが出土した。

### c. 溝

SD73 調査区南部で検出した南西から北東方向の溝である。幅0.7～0.8mであるが、東部では北側に上幅を増すことから、調査区外で北寄りに方向を変える可能性がある。検出面からの深さは0.2mである。埋土は下部は細礫主体の加工時形成層、上部はシルト主体の機能時堆積層であるが、水流の痕

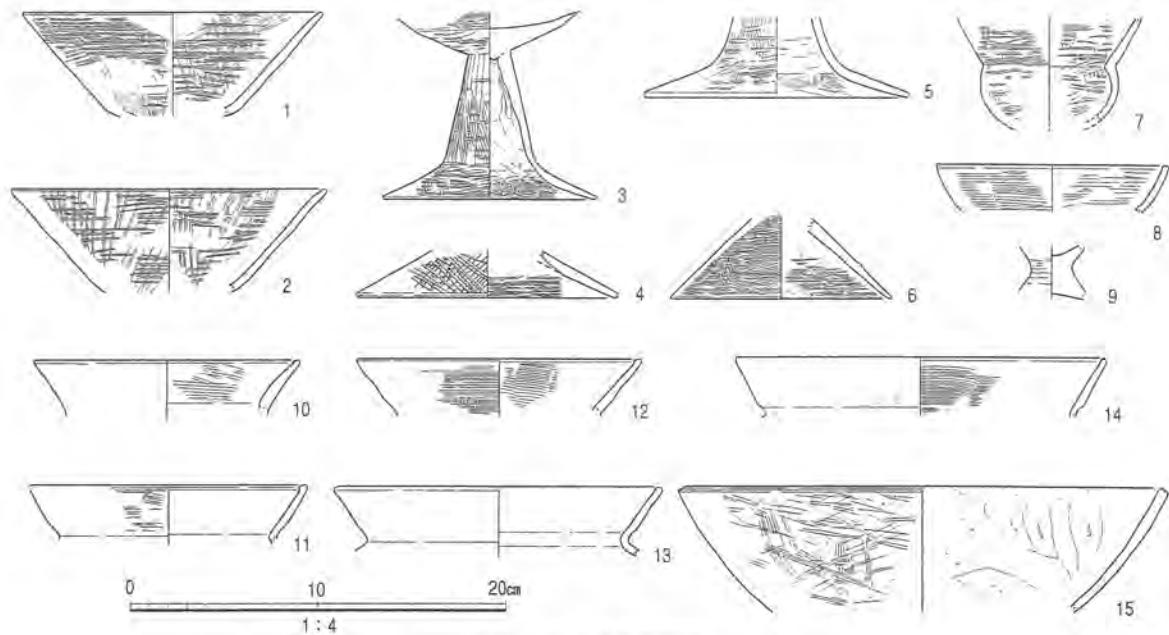


図6 出土遺物実測図

SP29(6・11)、SP35(5)、SK19(1)、SK22(3・4・8・12)、SK30(9)、SK64(7・13~15)、SD73(2・10)

跡は確認できなかった。

土師器高杯2・甕10が出土した。

小溝 全域で確認した。幅0.2m前後、深さ0.1m未満で、南北あるいは東西方向に直線的に延びるものが多い。切合い関係からは、他の遺構に比べて新しい。機能としては形状から耕作に係る可能性があるだろう。

### 3. 検出した遺構群について

全域で多くの遺構を検出したが、SD73以北と以南において、遺構の分布に差があることは注目されよう。SD73以北では多くの遺構が存在するのに対して、以南では顕著な遺構が存在しない。小穴および土壇状の窪みは認められるが、いずれも深さ数cm未満と浅く、木根状の形状を持つものもあり、確実に遺構と判断できるものはなかった。一部を調査したに過ぎず、断定することはできないが、こうした遺構の分布状況からSD73は区画を意図した溝であった可能性があるだろう。もしそうであるならば集落の拡がりには北西方向にあるといえよう。集落の継続期間については、SB01とSD73は極めて近接していることから、同時に併存していたとは考えにくく、ある程度の期間、集落は継続していたと判断しうる。

今回検出した遺構群の時期については、出土遺物は多くないもののいずれも布留期の様相を示しており、古墳時代前期に位置づけられる。

ここで、周辺の遺跡を見ると、崇禅寺遺跡・豊崎遺跡・本庄東遺跡など、弥生時代末葉～古墳時代前期にあらたに集落が営まれることがわかる。これらは淀川流域沿いに点在している。いずれも遺構のベースは砂であり、淀川によって土砂が運ばれて形成されたデルタ上に立地していると推測されよう。

〈まとめ〉

西中島一丁目における発掘調査は初めての機会であったが、古墳時代前期の集落跡を検出することができた。遺跡の立地は周辺での同時代の遺跡と同様であり、淀川の堆積作用によって、居住可能な地域が広がったとする推測が正しいことを追認する結果となった。また、今回の調査結果からもデルタ上には集落が点在していた可能性が高まったといえよう。なお、今回検出した集落の生業については不明な点として残されており、今後の周辺の調査に期待したい。

淀川の下流域は大小様々な砂州が存在していると考えられ、地形の復元には困難を要する地域である。近年、淀川下流域における発掘調査が増加しており、これらの進展により、それぞれの地点での陸地化の時期や集落の様相が明らかになっていくと期待される。



図7 調査地と周辺の遺跡

西壁断面(北東から)



第7層内・下面の  
遺構全景  
(北から)



SB01・SD73  
(北東から)



淀川区西中島三丁目における建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査(WN09-3)報告書

調査個所 大阪市淀川区西中島3丁目9-1  
調査面積 100㎡  
調査期間 平成21年12月24日～平成22年1月8日  
調査主体 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所  
調査担当者 次長 南秀雄、絹川一徳

## 1) 調査に至る経緯と経過

調査地は淀川水系のデルタに立地する(図1)。至近の調査は南約300mのWN09-1・2次で、掘立柱建物などからなる古墳時代前期の集落跡が発見された。北東約800mには弥生時代末～古墳時代の崇禪寺遺跡があり、北約800mの新大阪駅構内では奈良時代の井戸が見つかった(WA07-1次)。崇禪寺遺跡より西で発掘成果が出始めたのはここ数年に過ぎないが、古墳時代前期には既に集落があったことが明らかになった。以降、中・近世まで交通の要所で、古地形復元の成果も活用し、予測を立てつつ成果を上げていかねばならない地域である。

本調査は、大阪市教育委員会の試掘結果を受け、東西5m、南北20mのトレンチを設定した(図2)。地表面から約1.9mの深さの第8層上面まで全面を調査し、それ以下は北西隅を深掘りしてTP-1.9mまでの地層を観察した。

報告で使用した方位は座標北と磁北を基準に、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP±〇mと記した。

## 2) 調査の結果

### i) 層序(図3・4)

現地表面の標高はTP+0.7m、層厚約90cmの表土下は以下の層序であった。第1・2層は近代以降の島の作土で、東西方向の畝が明瞭である。

第1層：中粒～細粒砂混り黄灰色(2.5Y4/1)粘土質シルト層で、層厚は5～17cmである。

第2層：黄灰色(2.5Y4/1)砂質シルト層で、層厚は5～10cmである。

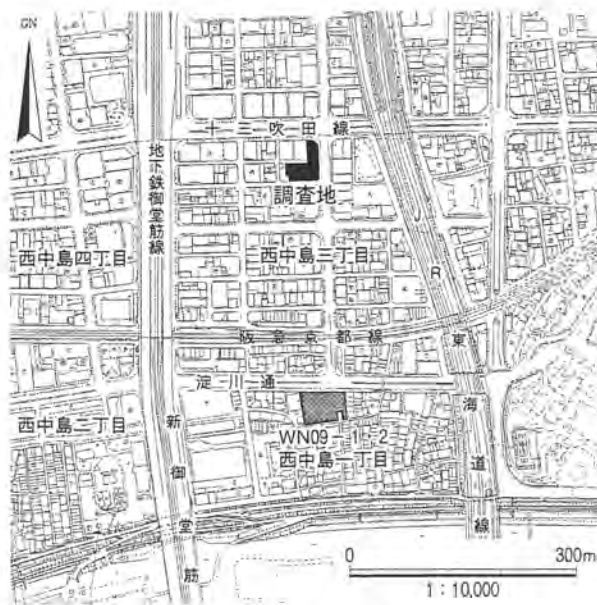


図1 調査地位置図

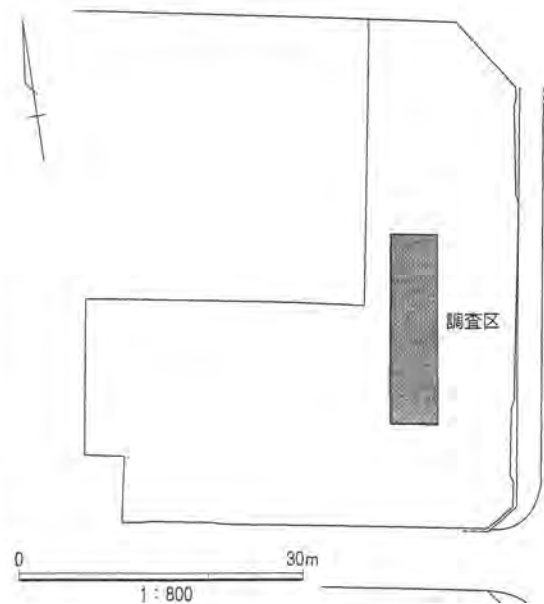


図2 調査区位置図



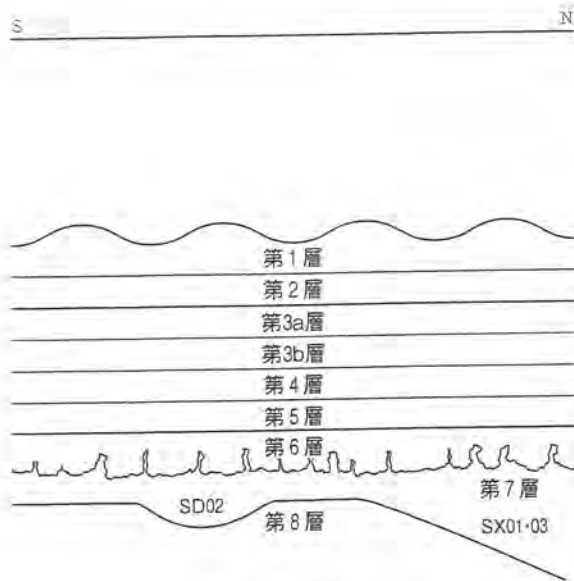


図3 地層と遺構の関係図

第3～5層は近世の水田の作土である。

第3a層：褐灰色(10YR4/1)粘土質シルト層で、層厚は5～10cmである。細粒～中粒砂、礫を含み、その量が第3b層より多い。

第3b層：黄灰色(2.5Y4/1)シルト質粘土層で、層厚は5～10cmである。細粒～中粒砂、礫を含む。

第4層：黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト層で、層厚は5～8cmである。細粒～中粒砂を含む。

第5層：黒褐色(10YR3/1)シルト質粘土層で、層厚は3～10cmである。細粒～中粒砂を含む。18世紀に属する土師器焙烙(図5-5・6)などが本層の時期を表していると推定される。

第6層：黒色(10YR2/1)粘土質シルト層で、層厚は3～13cmである。瓦器が出土し(図5-4)、豊臣期以降の陶磁器はない。中世の地層と推定される。

第7層：黒色(10YR2/1)シルト層で、層厚は5～45cmである。第6層との層理面が火焰状に変形している。木片などの植物遺体を多量に含む。調査区の北と南には本層を埋土とした落込み(SX01・03、写真中段)があり、そこではラミナが明瞭である。瓦質鉢が最新の遺物で、中世の地層と推定される。

第8層：暗灰黄色(2.5Y4/2)極粗粒砂～細礫層で、層厚は90cm以上である。植物遺体の薄層を多数挟む水成層である。上面に植物の根によると推定される多くの凹みがある。南北断面では、中央が高く、そこを境に北では北へ、南では南へラミナが傾斜する。北壁では上部約20cmの間で、東から西へラミナが傾斜する。遺物は弥生土器や土師器などがあり、古代の土師器と思われる細片が最も新しい時期を示す。

#### ii) 遺構と遺物(図4・5)

調査区では近世以降の水田・畠以外は、明確な遺構は見つかっていない。第8層上面、おそらく中世の段階では、東西方向に僅かに高い部分があり、北と南は低くなっていた(SX01・03)。第6層形成以降は地形的に安定し、耕作地として継続して利用される。

SX01は深さ0.35m、SX03は深さ0.55mで、いずれも埋土に腐植した植物を多量に含む。SD02は北西-南東方向の浅い溝で、幅1.65m、深さ0.05～0.10mである。

出土遺物には、弥生土器・須恵器・中国製白磁などがある。1～3は肥前磁器の碗と小杯で、1は第4層、2・3は第4～5層の出土である。5・6の土師器焙烙は第5層から出土した。18世紀頃のものである。7は口縁が輪花をなす中国製白磁皿で、豊臣期に出土するものかわからない。第5～6層の出土である。4は瓦器椀の高台部で第6層から出土した。底部内面に格子状の暗文がある。8～10は弥生土器で、8は甕の口縁部、9は壺の底部、10は壺などの把手が外れたものである。11は表土掘削中に出土した東播系の鉢である。

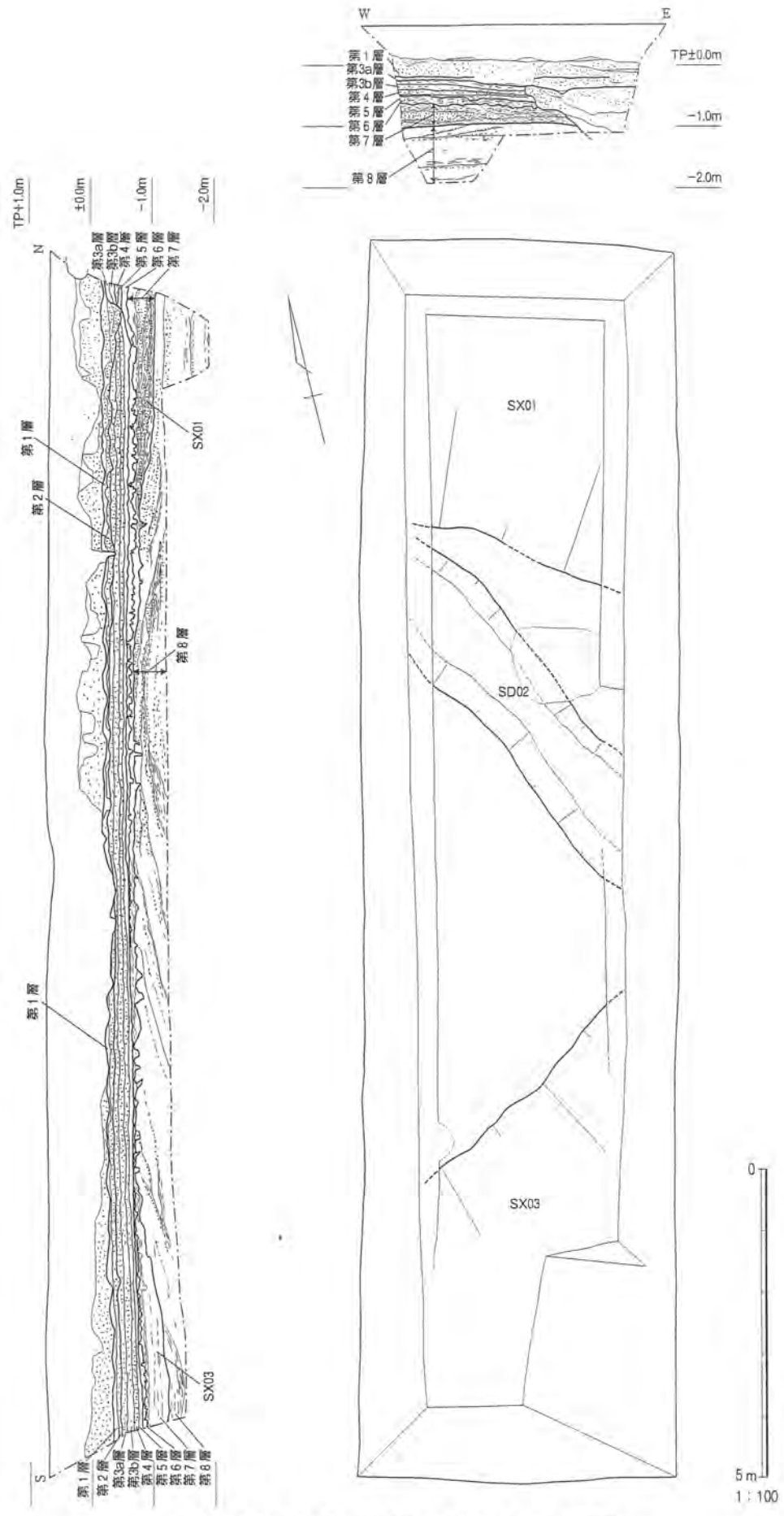


図4 第8層上面遺構平面図と西壁・北壁地層断面図

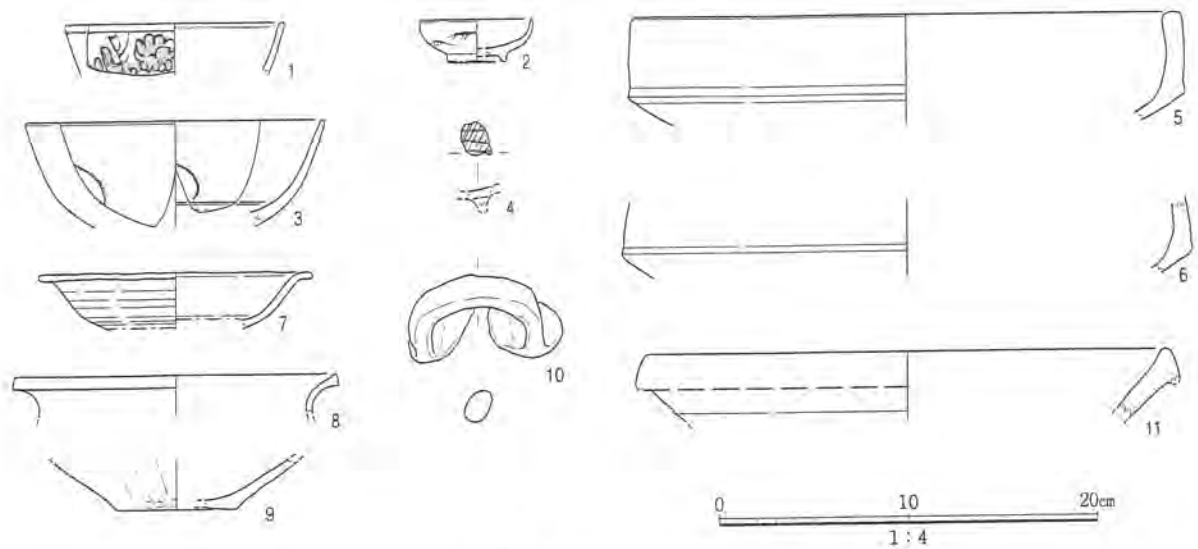


図5 出土遺物実測図

第4層(1)、第4～5層(2・3)、第5層(5・6)、第6層(4)、第5～6層(7)、第7層(8)、第7～8層(9・10)、表土(11)

8～10、4・11から、近くに弥生時代や中世の集落などが存在したことが予測できる。

### 3)まとめ

調査地点が地形的に安定するのは、第6層が形成される中世末以降と推定される。以降、継続して耕作地に利用される。

第8～7層が形成される中世以前には、微妙な高低差があり、低い所は水に洗われるような状態であった。この時期に調査区では人が住んだり、耕作地に利用した痕跡はないが、出土遺物からは、近くに弥生時代や中世の集落などの存在が予測される。

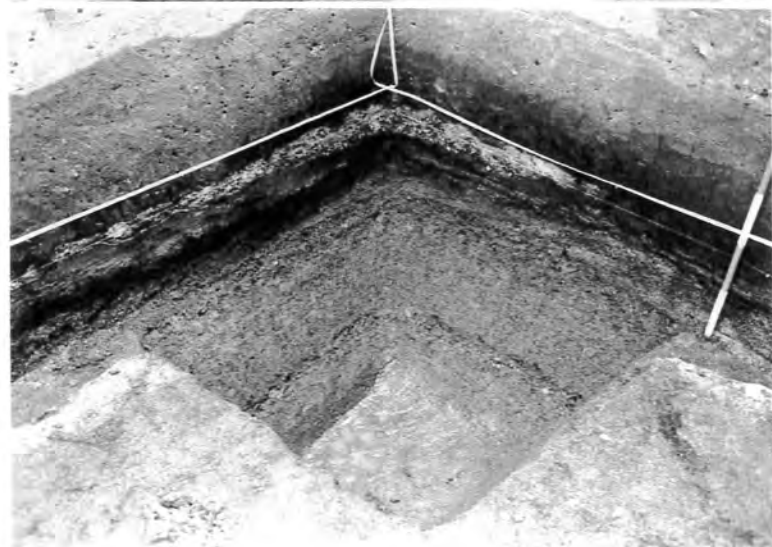
調査区全景  
(南から)



第8層上面 SX03  
(南東から)



北西部地層断面  
(南東から)



VI 旭

区

## 森小路遺跡発掘調査(MS09-2)報告書

- ・調査箇所 大阪市旭区新森4丁目51-7・51-8の一部
- ・調査面積 12㎡
- ・調査期間 平成21年5月11日～5月13日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄

### 〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は、弥生時代前～中期の遺跡を主とする森小路遺跡の東南部に当る。周辺では、北西約100mのMS80-12・85-17次調査で弥生時代中期中～後葉の方形周溝墓が検出されているが、弥生時代の遺構・遺物の出土は希薄な地域である。調査地から西約80mのMS80-18次調査では、平安時代以降の包含層が検出されている(図1)。

本調査は、大阪市教育委員会の試掘結果を受けて、敷地南寄りに4m×3mのトレンチを設定し(図2)、地表面から深さ約1mの第6層上面まで全面を調査し、第6層以下は西北隅の一部分を深掘りしてTP0mまでの地層を観察した。

報告で使用した方位は図1は座標北、ほかは磁北、標高はTP値(東京湾平均海面値)でTP+〇mと記した。



図1 調査地位置図

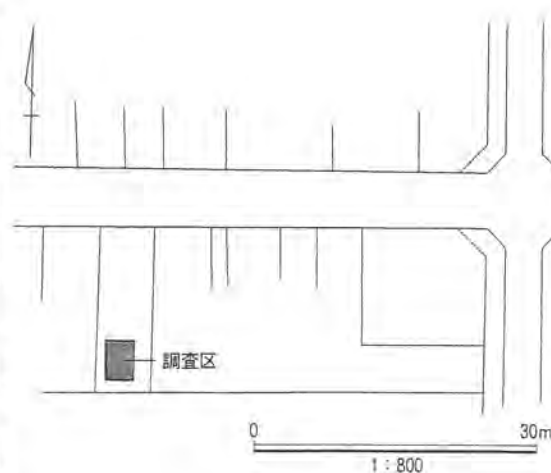


図2 調査区位置図

〈調査の結果〉

1. 層序(図3・4)

層厚約25cmの表土下は以下の層序であった。周辺で弥生時代の遺構があれば、第6層上面から第4層上面の間である。

第1層：にぶい黄褐色(2.5Y6/4)砂質シルトの近現代の作土層で、層厚は15cmである。SD301の中央上部の窪みを埋める層厚40cmの灰色(5Y5/1)中粒砂層も第1層に含める。

第2層：粗粒砂質灰黄褐色(10YR4/2)シルト～粘土層で、層厚は20～60cmである。SD301な

どを埋めた水成層で、SD301の北側では攪拌されている。下面が凹凸する。江戸時代の地層である。

第3層：灰黄褐色(10YR4/2)中粒砂の上層と同色のシルト～極細粒砂の下層からなり、層厚は5～

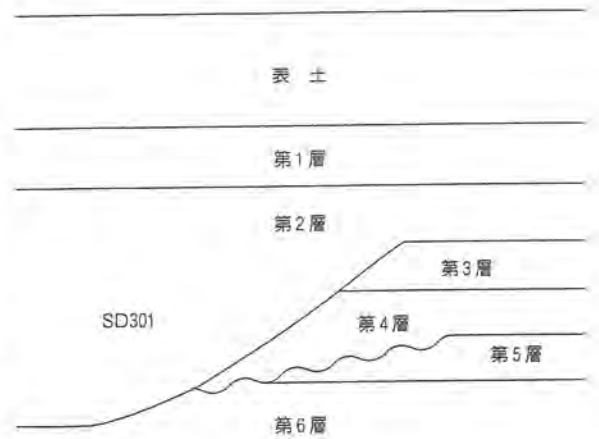


図3 地層と遺構の関係図

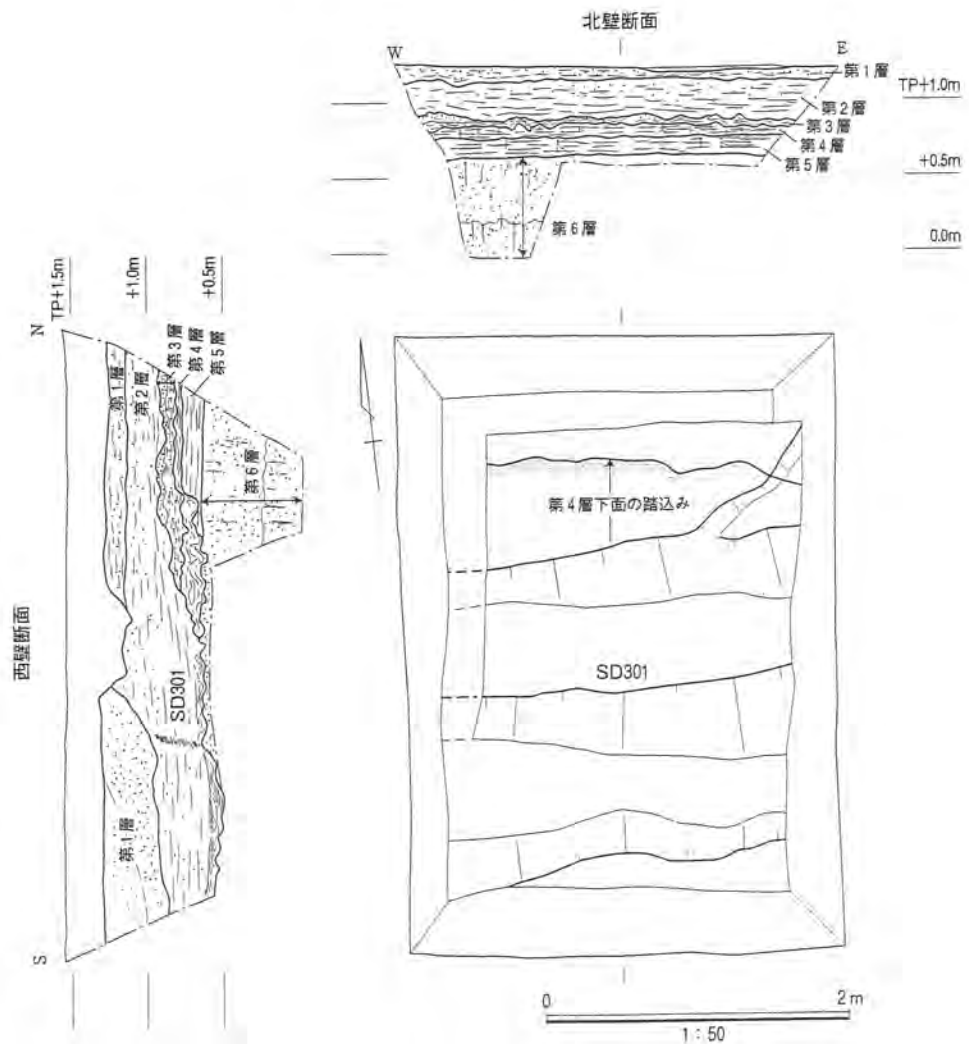


図4 第3・4層平面図および北・西壁断面図



16cmである。下面が凹凸する。中世以後の時期と推測される。

第4層：黒褐色(10YR3/1)粘土層で、層厚は5～15cmである。北辺を除き、踏込み状の凹凸が広がる(図4)。遺物は出土していない。

第5層：黄灰色(2.5Y5/1)粘土層で、層厚は13cmである。遺物は出土していない。

第6層：におい黄色(2.5Y6/4)細粒～中粒砂の上層(層厚40cm)と灰色(5Y4/1)中粒砂の下層(層厚25cm以上)からなる水成層である。植物の擾乱を受けている。遺物は出土していない。

## 2. 遺構と遺物(図4・5)

今回の調査では弥生時代の遺構・遺物は検出されていない。

第3層上面検出のSD301は、幅2.4m以上、深さ0.4mの東西方向の溝で、中央部の幅1.1～1.2mの間が0.1mほど深くなっている。下面は踏込みにより凹凸している。埋土は粘土で、緩やかに埋った後は湿地状になっていたと推定される。SD301は近世以降の用排水路と考えられる。

出土遺物は少量だが、図化できるものに瓦器椀1、瓦質土器鉢2がある(図5)。これらから近くに中世の集落があったことは、西側の各調査地点の成果と合せて推測できる。また飛鳥時代の須恵器杯、中世の輸入青磁や瓦などがあった。

### 〈まとめ〉

本調査では、弥生時代の遺構・遺物は検出されていないが、中世の土器が出土したことから近くに集落があったことが推測できる。調査地周辺は森小路遺跡では調査例が多くはないが、今回の調査のようにデータを蓄積し、弥生時代以降の微地形の復元の精度を上げていくことで、遺跡の時期ごとの拡がりや変遷過程をより明らかにすることができる。

### 参考文献

大阪市文化財協会2001、「森小路遺跡発掘調査報告」I

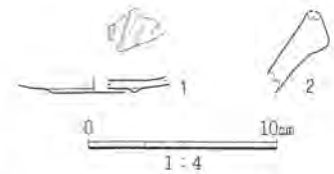
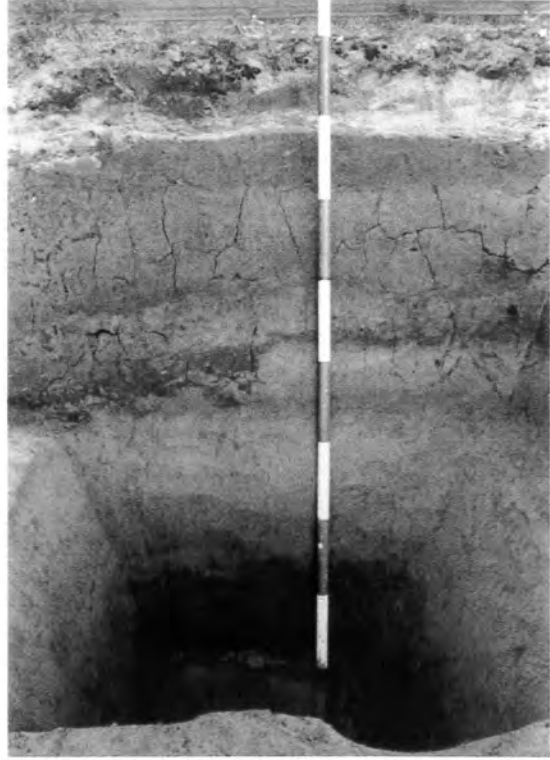


図5 遺物実測図  
第2層(1・2)

西壁北端断面  
(東から)



第4層下面の踏込み  
検出状況(北西から)



SD301  
(南東から)



## 森小路遺跡発掘調査(MS09-4)報告書

- ・調査箇所 大阪市旭区新森7丁目227ほか4筆
- ・調査面積 60㎡
- ・調査期間 平成21年6月25日～7月1日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、杉本厚典

### 〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は大阪市営地下鉄今里筋線清水駅の南東200mの位置で、内環状線の東側に当る。森小路遺跡ではこれまで内環状線から西側一帯で数多く発掘調査が実施されており、弥生時代前期～中期の居住域・墓域、古墳時代中期の居住域などが見つかっている。また地元の土器の他に、近江地方・紀伊地方からもたらされた土器や、紀伊地方でとれる緑色片岩を素材とした石庖丁も多く出土しており、これらは当時の地域間のつながりをうかがうための重要な資料になっている。

調査地周辺ではこれまでにMS89-50・01-4・01-26次調査が実施され、弥生時代のピット群(MS89-50次)や溝(MS01-26次)、古墳時代中期の土壙(MS89-50・01-4・01-26次)、近世初頭の杭列(MS01-26次)などが検出されてきた(図1)。

調査は6月25日に着手し、重機で現地表下1.5mまで掘下げた後、人力掘削を行った。中世、弥生時代の遺構の調査を行ったのち、7月1日に埋戻し、撤収作業を行い調査は完了した。報告の座標と

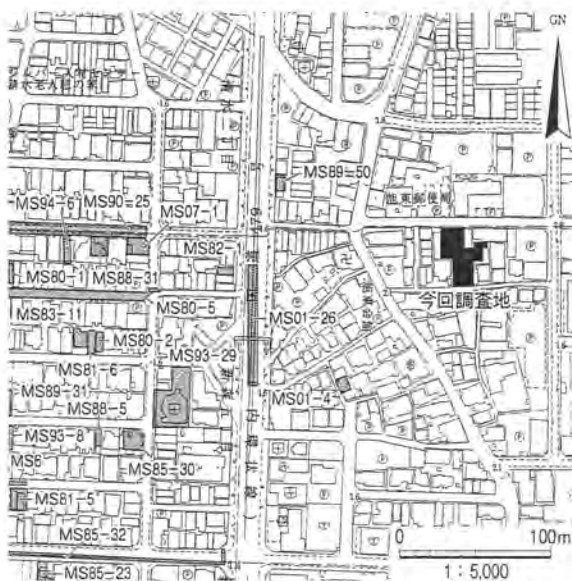


図1 調査地位置図



図2 調査区位置図

方位は世界測地系と磁北を使用し、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP±〇mと記している。

〈調査の結果〉

1. 層序(図3・4)

第1層：暗オリーブ色(5Y4/4)細粒砂で構成される、層厚35cmの近現代の作土層である。

第2層：灰色(5Y4/1)粘土層で構成される、層厚27cmの近世の作土層である。調査区東半部に厚く堆積していた。

第3a層：暗灰黄色(2.5Y5/4)細粒砂質粘土～シルトで構成される、層厚40cmの作土層である。本層中から瓦器、灰釉碗、青磁碗などが出土しており、中世の地層である。

第3b層：暗灰黄色(2.5Y5/4)シルト質細粒砂で構成される、層厚20cmの作土層である。本層中から瓦器が出土しており、中世の地層である。

第3c層：灰色(7.5Y4/1)シルト質細粒砂で構成される、層厚15cmの作土層である。本層中から瓦器が出土しており、中世の地層である。

第4層：灰色(7.5Y4/1)細粒砂で構成される、層厚25cmの古土壤層である。下部にはラミナが認められ上部が暗色化していた。本層中から須恵器、土師器の細片が出土しており、古墳時代から古代にかけて形成されたとみられる。多数の中世の遺構は、部分的にその上位の作土層に削られているものの、遺構埋土は第4層を母材とするもので第4層上面に設けられたものとみられる。

第5a層：黄灰色(2.5Y4/1)シルト～粘土で構成された、層厚30cmの古土壤層である。この上面および層中で弥生時代中期の遺構を検出した。

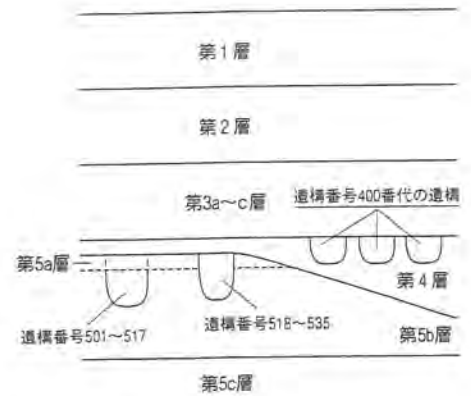


図3 地層と遺構の関係図

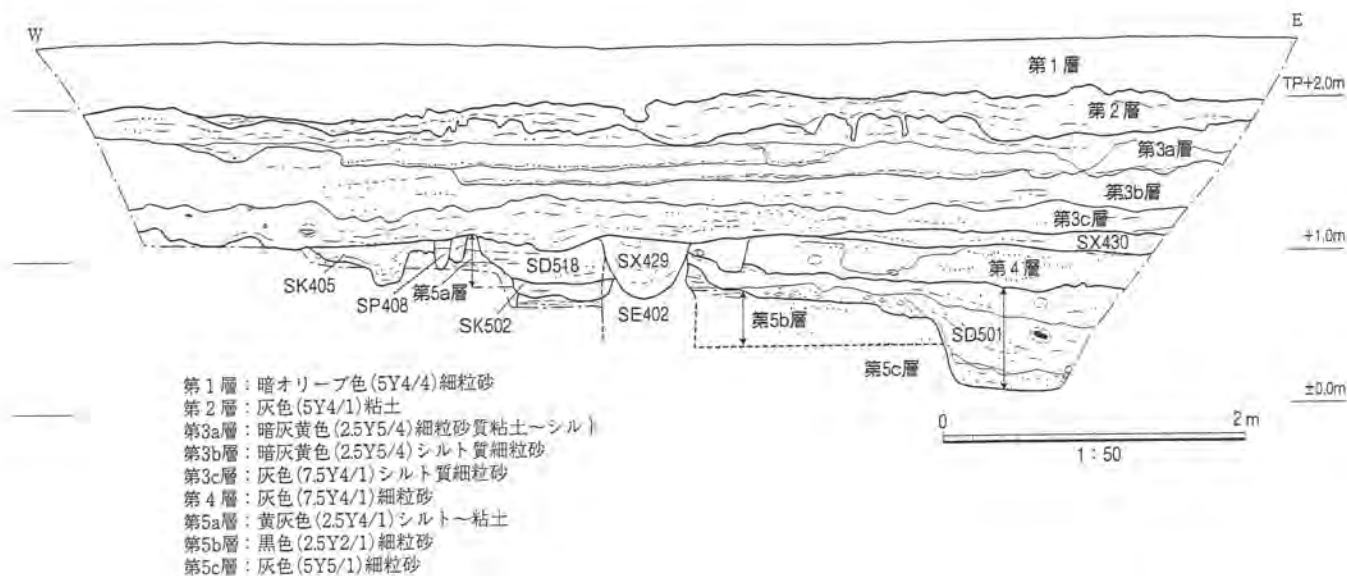


図4 北壁断面図

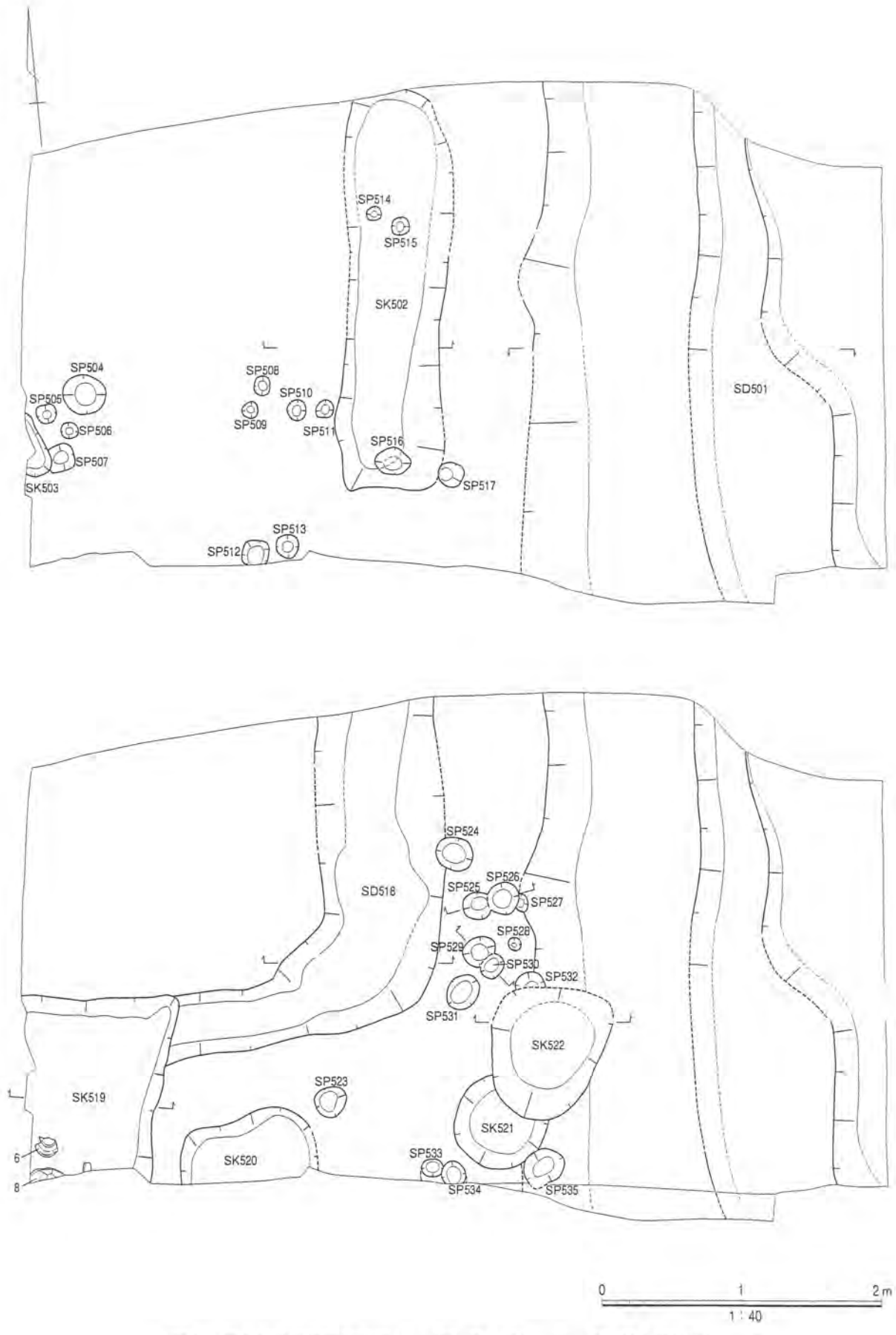


図5 第5層検出遺構平面図(上：第5a層中検出、下：第5a層上面検出)

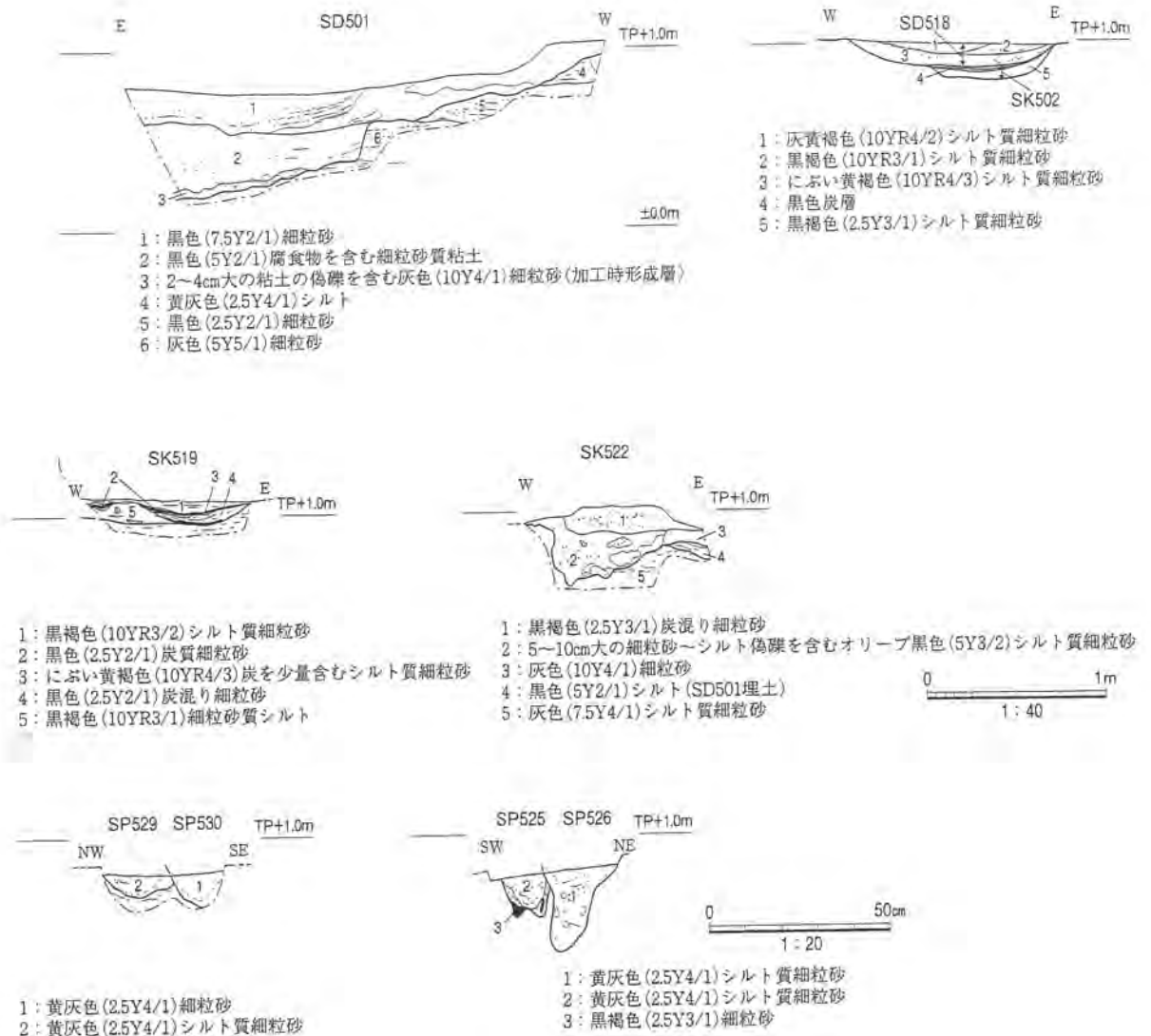


図6 第5a層上面・第5a層中検出遺構断面図

第5b層：黒色(2.5Y2/1)細粒砂で構成された、層厚40cmの古土壤層である。植物根の痕跡が認められた。

第5c層：灰色(5Y5/1)中粒砂で構成された、層厚80cm以上の河川堆積層である。上方に向かって細粒化しており、トラフ型斜交層理が認められた。この形状から古流向は概ね東から西であったと判断した。

## 2. 遺構と遺物(図5~9)

弥生時代の遺構は第5a層中および第5a層上面で検出した。いずれの遺構からも弥生時代中期前葉~後葉の遺物が出土しており、時期差は認められなかった。以下において、遺構は第5a層中および第5a層上面検出のものに分けて記述する。

### a. 第5a層中検出の弥生時代の遺構

SD501は幅2.7m以上、南北3.8m以上の溝である。深さは0.72mで最下層は粘土の偽礫を多く含む細粒砂で構成された加工時形成層である。溝は下部層は腐食物を多く含む細粒砂質粘土、上部層は細粒砂であった。埋土中から弥生時代中期の土器が出土した。



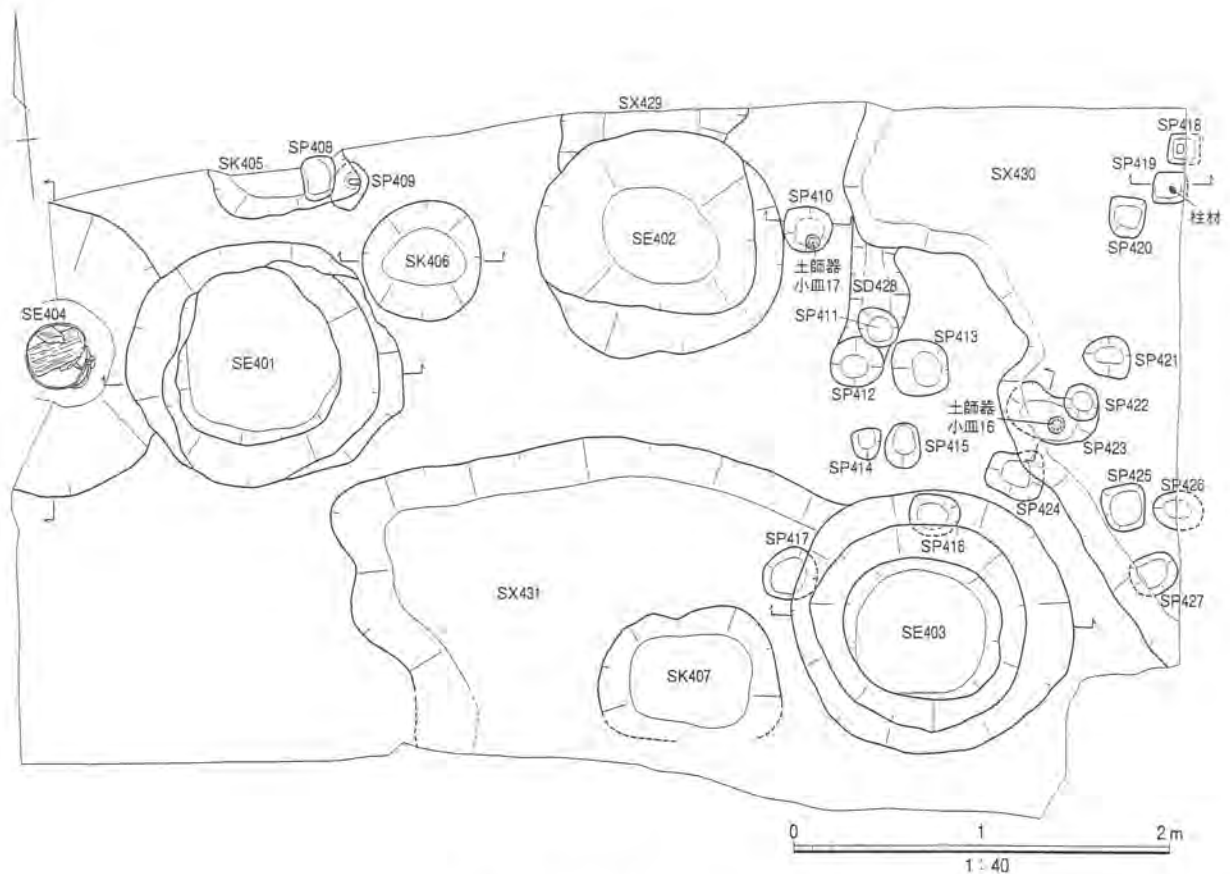


図7 第4層検出遺構平面図

1～3は甕の口縁部である。1は体部外面を縦方向のハケ、内面をナデで整えた後、口縁部にヨコナデを施す。弥生時代中期中葉～後葉に属する。

2は体部外面を粗いハケ、内面をナデで整えた後、口縁部にヨコナデを施す。弥生時代中期前葉に属するとみられる。

3は短く屈曲した形状で、弥生時代中期前葉のものである。体部外面を縦方向のミガキ、内面をナデで整えた後、口縁部内面に横方向のミガキを施す。

5は広口壺口縁部である。外面を縦方向のヘラミガキ、内面をハケで整える。口縁端部はヨコナデを施す。

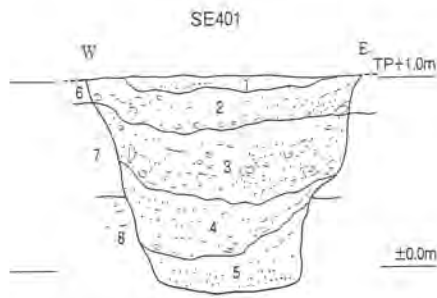
7は壺の体部である。内外面をそれぞれナデで整えた後、外面に櫛描文を施す。櫛描文は6条1単位で、流水文とみられる。流水文は直線文を部分的に消去した後、各直線文端部に半円を付加して描いており、施文後に櫛描文帯間をミガキで整える。弥生時代中期中葉に属する。

9・11～13は底部である。9は甕底部である。外面に煤が付着する。外面を縦方向のハケ、内面には工具のあたりが認められる。底部には木葉の圧痕が見られる。

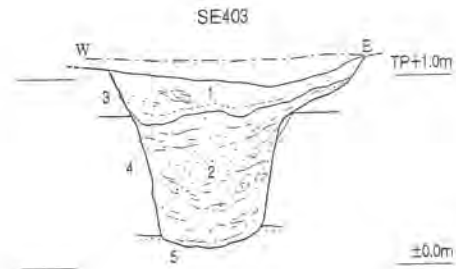
11は内外面とも磨滅が著しいが、外面に縦方向のハケ調整がうかがえる。底部には木葉の圧痕が認められる。胎土には片岩が含まれる。

12は壺とみられる底部である。内外面にハケ調整を施す。底面に木葉の圧痕が認められる。外面に煤、内面にコゲなどは認められない。

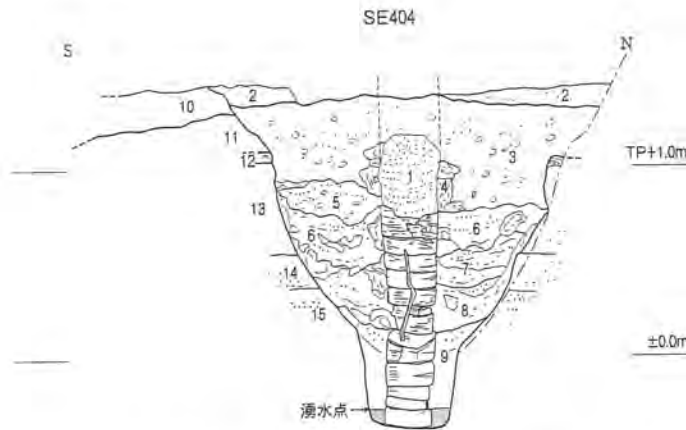




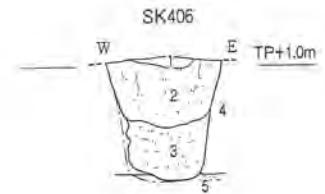
- 1: 灰色(5Y4/1)細粒砂
- 2: 黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂質シルト
- 3: オリーブ黒色(5Y3/1)シルト偽礫・細粒砂質シルト
- 4: オリーブ黒色(5Y3/2)シルト偽礫・細粒砂質シルト
- 5: 灰色(7.5Y4/1)細粒砂
- 6: にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質細粒砂
- 7: 黄灰色(2.5Y4/1)粘土〜シルト
- 8: 灰色(5Y5/1)細粒砂



- 1: 10cm大のシルト偽礫含む黄灰色(2.5Y4/1)シルト質細粒砂
- 2: 5〜8cm大のシルト偽礫含む黒褐色(2.5Y3/1)細粒砂
- 3: 灰色(5Y5/1)細粒砂
- 4: 灰色(7.5Y4/1)細粒砂
- 5: 灰色(5Y5/1)細粒砂



- 1: 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質細粒〜中粒砂
- 2: オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質細粒砂
- 3: 拳大の粘土偽礫含む黒褐色(10YR3/2)細粒砂
- 4: 黄灰色(2.5Y5/1)粘土
- 5: 2〜3cm大の粘土偽礫含む黒褐色(10YR3/2)シルト
- 6: オリーブ黒色(5Y3/1)細粒砂質粘土
- 7: 灰色(5Y4/1)細粒砂質粘土
- 8: 黄灰色(2.5Y5/1)細粒砂質粘土
- 9: 灰色(7.5Y4/1)細粒砂
- 10: にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質細粒砂
- 11: SK519埋土
- 12: 黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂質シルト(第5a層上部)
- 13: 黄灰色(2.5Y4/1)粘土(第5a層)
- 14: 黒色(2.5Y2/1)細粒砂(第5b層)
- 15: 灰色(5Y5/1)細粒砂(第5c層)



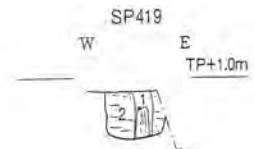
- 1: 暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂
- 2: 黄灰色(2.5Y4/1)シルト質細粒砂
- 3: 黒褐色(2.5Y3/1)シルト質細粒砂
- 4: 黄灰色(7.5Y4/1)細粒砂
- 5: 灰色(5Y5/1)細粒砂



- 1: 黒褐色(2.5Y3/1)細粒砂質シルト



- 1: 黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂



- 1: 黒褐色(10YR3/1)細粒砂質シルト
- 2: 黒褐色(10YR3/1)シルト〜粘土

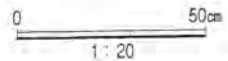


図8 第4層検出遺構断面図

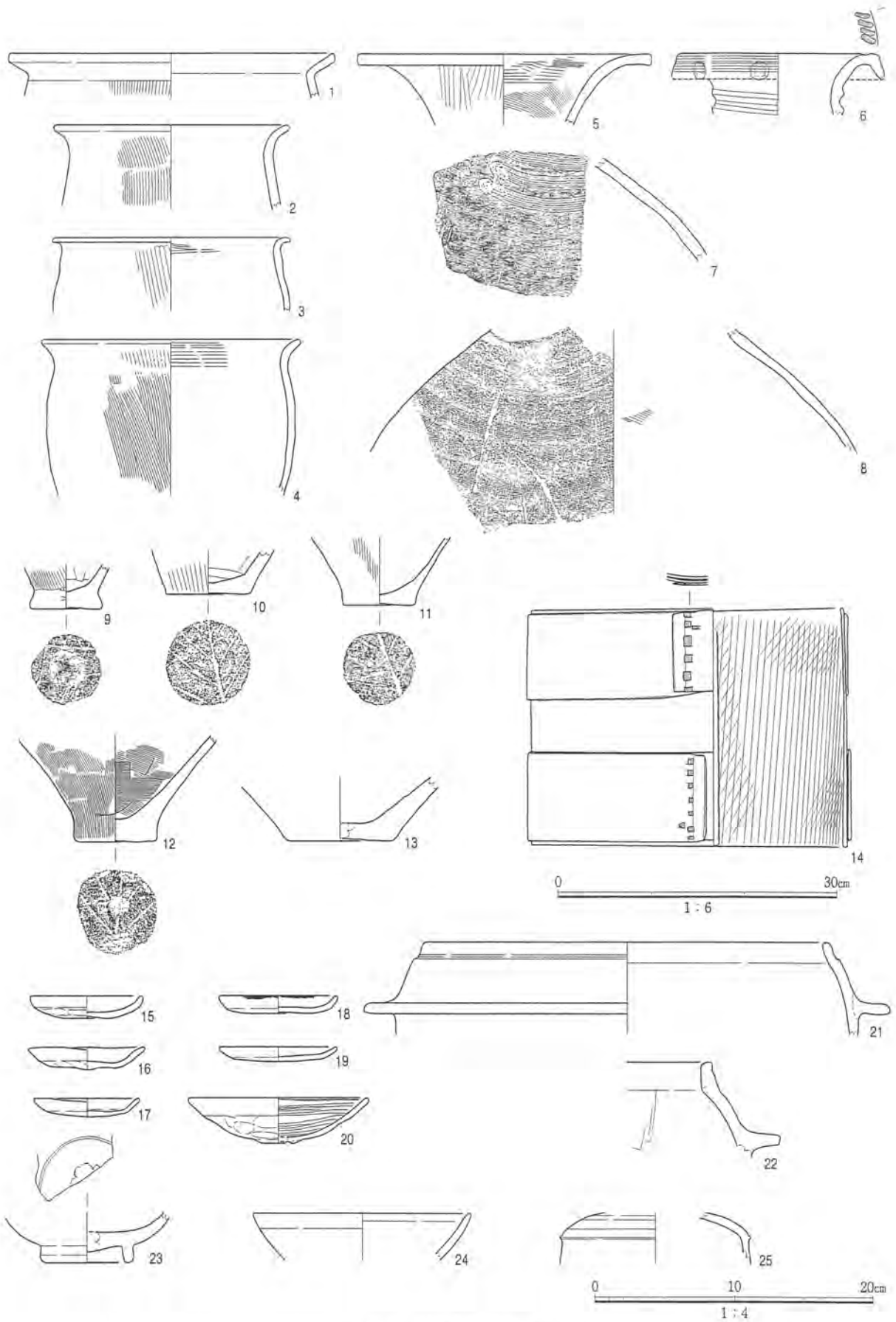


图9 出土遺物実測図

SD501(1~3·5·7·9·11~13)、SK519(6·8)、SK521(4)、SE404(14·19·20·22)、SE402上層(15·21)、  
SP423(16)、SP410(17)、SE403(18)、第3a層(23·24)、第4層(25)、第5a層中(10)

13は形状から壺とみられるが、底部付近が赤く変色し、そのやや上に煤が付着する。全体的に磨滅しており調整は不明である。

SK502は東西0.76m、南北2.84mの土壙である。上部をSD518によって削られており深さ0.04mしか残存していないが、本来は0.20m前後の深さであったとみられる。埋土は黒褐色シルト混り細粒砂で、上位に黒色の炭化物層が拡がっていた。この炭化物は遺存状況から植物茎を燃やしたものである。埋土中から弥生時代中期の土器が出土した。

SK503は調査区南西で検出した南北0.44m以上の土壙である。

SP504～517は直径0.10～0.30mを測る円形の小穴である。埋土に偽磔が含まれるものが多く、人為的に埋戻されたものとみられる。

SP504は直径0.30mを測る円形の小穴である。深さはSK519によって上部を削られていたものの、0.19mあまり遺存していた。埋土は灰色の細粒砂質シルトで、第5a層の黄灰色粘土を母材とする2～7cm大の偽磔が含まれていた。

#### b. 第5a層上面検出の弥生時代の遺構

SD518は幅0.40～0.84mの屈曲する溝である。西端がSK519によって切られていた。深さ0.14mでシルト質細粒砂で埋没していた。埋土中から弥生時代中期中葉の土器が出土した。

SK519は深さは0.12mであり、下部が黒褐色細粒砂質シルトで埋戻された後、その上位に炭混り細粒砂と炭を少量含むシルト質細粒砂の互層が自然堆積していた。底面に設置した状態で広口壺の口縁部や底部などが出土した。

6は口縁部が垂下した広口壺である。頸部下半に二条の凸帯を巡らせ、口縁部の外側には3条の凹線を入れ、その上から円形浮文を貼付ける。また口縁部内面には刻目文を施す。弥生時代中期後葉に属するものである。

8は壺の体部である。9条1単位の櫛描直線文と櫛描波状文を交互に施す。櫛描文様帯間はヘラミガキで整える。

SK520は東西1.00m、南北0.64m以上の土壙である。

SK521は直径0.68mを測る円形の土壙である。埋土中から4が出土した。

4は弥生時代中期前葉の甕である。外面を縦方向のハケ、内面をナデで整える。口縁部は内面を横方向のハケで整えた後、外面にわずかにヨコナデを施す。

SK522は東西0.80m、南北0.96mの土壙である。SD501を切って設けられていた。深さ0.44mで、5～10cmのシルト～細粒砂の偽磔を含むシルト質細粒砂で埋戻されていた。

SP523～535は直径0.10～0.30mを測る円形の小穴である。SP525では柱痕跡が確認された。埋土には偽磔が認められ、人為的に埋戻したものとみられる。

SP524は直径0.22mを測る円形の小穴で、SP518を切っていた。深さ0.28mで、2～5cm大の偽磔を含んだ細粒砂質シルトで埋戻されていた。

SP525は直径0.15mを測る円形の小穴である。深さ0.14mで、中央に直径0.12m、深さ0.10mの黄灰色シルトが認められ、柱痕跡とみられる。

SP529は直径0.20mを測る円形の小穴である。深さ0.08mでシルト質細粒砂で埋戻されていた。柱痕跡は認められなかった。

SP530は直径0.16mを測る円形の小穴である。SP529を切っていた。深さ0.11mであり、細粒砂で埋戻されていた。柱痕跡は認められなかった。

c. 第4層検出の遺構と遺物

SE401は直径1.48mを測る円形の井戸である。深さは1.13mで底には層厚0.20mの細粒砂で構成される水成層が認められた。それより上位はシルトの偽礫が多く含まれており、人為的な埋戻しの地層と判断される。

SE402は直径1.32mを測る円形の井戸である。井戸掘形の深さは0.96mで、シルトの偽礫を含む細粒砂で人為的に埋戻されていた。

15はSE402上層より出土した。土師器小皿である。粘土紐を巻きながら器壁を成形し、底部外面をユビオサエで整える。口縁端部を中心に、ヨコナデを施す。

21はSE402上層より出土した土師器羽釜である。全体をナデで整えるが、とりわけ口縁端部にシャープなヨコナデを施す。

SE403は直径1.50mを測る円形の井戸である。井戸掘形の深さは0.96mであり、人為的に埋戻されていた。

18はSE403より出土した土師器とみられる小皿である。口縁端部に煤が付着する。底部外面をユビオサエとナデによって整えた後、口縁部にヨコナデを施す。

SE404は直径2.12mを測る円形の井戸である。直径30~33cmの曲物を10段重ねて井戸側としていた。井戸掘形の深さは1.82mで、TP+0.9m以下には井戸側を構築した際の裏込め土が認められた。井戸側の外縁に沿って粘土塊が集中しており、曲物を固定する目的で貼り付けたものとみられる。井戸側内は細粒~中粒砂で埋っており、層中より19・20・22が出土した。

14は井戸側の最下段を構成していた曲物である。口径33.6cm、高さ25.8cmで、上下をそれぞれ幅9.3cm、9.6cmのタガで留める。内面には切込みが0.9cm間隔で入る。目釘穴は確認できなかった。これ以外の井戸側として用いられた曲物は直径30cmで、底板を留める目釘が認められたため、容器としての曲物の底板を外して再利用したものと考えられる。

19は瓦器小皿である。底部外面をユビオサエとナデによって整える。口縁部にはヨコナデを施す。内面に暗文は確認できない。

20は和泉型の瓦器椀である。高台は低く、貼付けており、周囲を幅約1.0~1.5cmのナデで整える。外面はユビオサエで整えた後、口縁部にヨコナデを施す。内面はナデ調整後に暗文を施す。13世紀中葉のものとみられる。

22は土師器羽釜である。口縁部外面には緩やかな凹凸が認められる。口縁部の内面は工具を用いたナデを横方向に施しており、その工具のあたりが認められる。

SK405はSP409を切って設けられた東西0.76m、南北0.30m以上の土壇である。深さは0.10mで、シルト質細粒砂で埋戻された後、その上からSP408が設けられていた。

SK406は直径0.64mを測る円形の土坑である。深さは0.64mで、シルト質細粒砂で埋没していた。  
SK407は東西0.96m、南北0.64m以上、深さ0.08mの浅い土坑である。

SP408～427は小穴である。直径0.20～0.30mの円形のもの、一辺0.15～0.25mの方形のものに区分される。これらの小穴の中には柱材や柱痕跡のあるものが認められ、いくつかは柱穴と判断されたが、組み合せて建物を復元するには至らなかった。これらの中で柱痕跡・柱材および土師器皿の埋納が認められたものについて記述する。

SP409は南北0.20mの方形の柱穴である。直径約10cmの柱材が認められた。

SP410は一辺0.24mの方形の小穴である。深さは0.19mで、底面からやや浮いた状態ではほぼ完形の土師器小皿17が出土した。埋戻し時に土師器小皿が埋納されたとみられる。

17は口縁部が二次的に熱を受けて赤く変色し、部分的に煤が付着する。口縁部に緩やかなヨコナデを施すが、歪みが大きい。

SP418は一辺0.12mの方形の柱穴である。深さは0.06mで、底面に柱のあたりとみられる直径0.05mの窪みが認められた。

SP419は一辺0.18mの方形の柱穴である。深さは0.12mで、直径4cmの柱材が認められた。

SP423は東西0.44m、南北0.24mの小穴である。深さは0.22mで、底面から約0.10m上のところではほぼ完形の土師器小皿16が出土した。SP410と同様に、埋戻し時に埋納されたとみられる。

16は底部外面をユビオサエで整えた後、口縁部に緩やかなヨコナデを施すが、歪みが大きい。

SD428は幅0.30m、深さ0.10mの南北方向の溝である。SP411・412によって切られていた。

SX429は調査区北辺で検出した窪みである。南側がSE402によって切られており、遺構は北へと延びていたため、全体の形状は不明である。深さは0.44mで、埋土は黒褐色粘土であった。

SX430は調査区北東で検出した深さ0.10mの浅い落込みである。オリブ黒色粘土の水成層が堆積しており、これを除去したところでSP418～427を検出した。

SX431は調査区南東で検出した深さ0.10～0.20mの浅い落込みである。SX430と同様にオリブ黒色粘土の水成層が堆積しており、これを除去したところでSK407・SP417を検出した。一方、SE403はSX431埋った後で掘込まれていた。

#### d. 各層出土の遺物

10は第5a層より出土した。弥生土器甕の底部である。外面は縦方向のミガキ、内面はナデによってそれぞれ整える。外面は剥離痕が顕著で煤が付着している。底部裏面に木葉の圧痕が認められる。器壁が厚く、砂粒を多く含んでおり、弥生時代中期前葉のものとみられる。

23・24は第3a層より出土した。23は青磁碗の底部である。内外面に施釉し、高台内に浅いケズリを施す。内面には圏線と花文が認められる。24は瀬戸焼灰釉碗である。いずれも中世後半期のものである。

25は須恵器杯蓋である。SE402より出土したが、本来は第4層に帰属していたものとみられる。復元した口径が12.6cmとやや小さく、稜線がシャープであることから、TK23型式に属するとみられる。

#### 〈まとめ〉

今回の調査では、内環状線より東側においても、弥生時代・中世の遺構・遺物が密度高く残っていることが明らかになった。とりわけこれまで森小路遺跡であまり知られることのなかった中世の遺構が高い密度で分布していることに注目される。

また弥生時代の遺構・遺物は内環状線の西側のものと内容や時期が類似していることも分かった。内環状線より西側ではTP+1.0m前後の微高地上で多数の土壙や溝、柱穴が検出されている。本調査地において弥生時代の遺構が検出された標高も内環状線の西側の調査地と同様にTP+1.0m前後であり、微高地が内環状線の西側からさらに東側にかけて東西600mの範囲に広がっていることがうかがえる。弥生時代の遺構・遺物がこの微高地上に密度高く分布していると考えられ、森小路遺跡の弥生時代集落が淀川下流域を代表する大規模集落の1つであることをあらためて示す結果となった。

#### 参考文献

大阪市文化財協会1989、『泉屋(株)による建設工事に伴う森小路遺跡発掘調査(MS89-50)略報』

大阪市文化財協会2001、『森小路遺跡発掘調査報告書』I

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2003、『森小路遺跡発掘調査(MS01-4)報告書』：『平成13年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.76-80

大阪市文化財協会2002、『大阪市交通局による建設工事に伴う森小路遺跡発掘調査(MS01-26)報告書』



弥生時代の遺構  
(北から)



中世の遺構  
(東から)



SE404  
(南東から)





## VII 阿 倍 野 区

## 阿倍寺跡発掘調査(AB09-2)報告書

- ・調査箇所 大阪市阿倍野区松崎町3丁目6-53
- ・調査面積 33㎡
- ・調査期間 平成21年12月7日～12月12日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 文化財研究部次長 南 秀雄、清水和明

### 〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は阿倍寺跡推定範囲の南部に位置し、松長大明神境内に北接する敷地に当る。松長大明神の境内では戦前に塔心礎が見つかり、「一本松礎石」として大阪府史蹟[大阪府学務部1931]に指定されていた。現在、心礎は西成区天下茶屋公園に移設され、松長大明神の祠付近は「阿倍寺跡推定地」として大阪市顕彰碑が設置されている。

阿倍寺跡に係わる出土遺物には重弧文軒平瓦[大阪市文化財協会1996]などがあり、白鳳期の瓦が出土するため以前から創建時期が古代に遡ると考えられてきた。本格的な発掘調査はAB98-5・6次調査が初めてである[大阪市文化財協会2001]。この調査地はかつて存在した金堂跡とも考えられる土壇跡に北接し、磨滅をあまり受けていない古代～中世の瓦がまとまって出土したことから、その関連が注目されている。また、寺院の存続期間を考える手掛かりを得ると同時に、14～16世紀前半の南北方向の大溝が検出され、寺域の北・東を画するものであるとともに防御的な性格が推測されている。これ以後の調査では、AB06-1・08-1次調査が行われているが、古代瓦細片・



図1 調査地位置図

中世前半に遡る溝(AB06-1次)のほかは近世の土採り穴が見つかっており、阿倍寺自体に関する資料は多くない[大阪市文化財協会2006・2008]。

今回の調査地は、こうした阿倍寺跡と考えられている範囲では、土壇跡の南東側、塔心礎跡の北東側に当り、まさに核心部分の一面といえよう。

本調査に先立って行われた大阪市教育委員会による試掘調査では、地表下約0.8mで地山層が確認されたため、同深度までの調査を行うこととなった。

調査は平成21年12月7日から開始し、約20㎡を重機掘削した。地表下約0.8~1.0m付近で瓦片を多量に含む地層が検出され、そこからは人力によって遺構・遺物の検出を行った。その結果、中世の落込みや土壌、遺物包含層から古代に遡る瓦片が確認され、阿倍寺に関連する資料であることが判明した。そこで、12月9日にいったん調査区(西区)を埋戻し、東側を拡張して東区とした(図2)。同日中に続きの遺構検出と掘削、実測などの記録作業を行い、12月11日に埋戻し作業を行い、現地でのすべての作業を終了して撤収した。

以下、本報告に掲載した図に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、TP+〇mと表記した。また、図1は大阪市の道路現況図(1/2,500)を下図にした座標北(世界測地系)、そのほかは磁北を基準とした。

### 〈調査の結果〉

#### 1. 層序(図3・4)

重機により第3層上面まで掘削したため、第1・2層は調査区壁面での地層観察にとどまる。

第1層: 含ガラス・炭・礫黒褐色(2.5Y3/1)シルト質細粒砂~含炭オリーブ黒色(5Y3/1)細粒砂層で、近・現代の整地層である。層厚は約40cmである。

第2層: 上部は含礫オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂層など砂質の優勢な地層で、下部は褐色(10YR4/6)粘土質中粒砂層などやや粘土質が強まる。下部には第3層に含まれる中世以前の瓦片がお多く含まれている。近世の整地層と考えられ、西ないし南西に向って高くなる勾配が認められ、南西に位置する松長大明神の祠や周辺の整備に関する整地の可能性も考えられる。地山層である第4層の上面が西側でより深く削平されているため、そこに堆積する第3層や第2層も西側が厚くなり、層厚は西区西端で約70cm、東区では約20cmである。東区東側では本層を埋土とする土壌



図2 調査区位置図

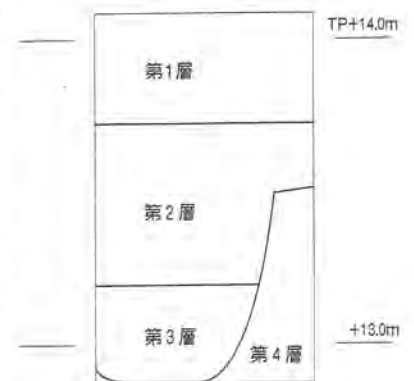


図3 地層模式図

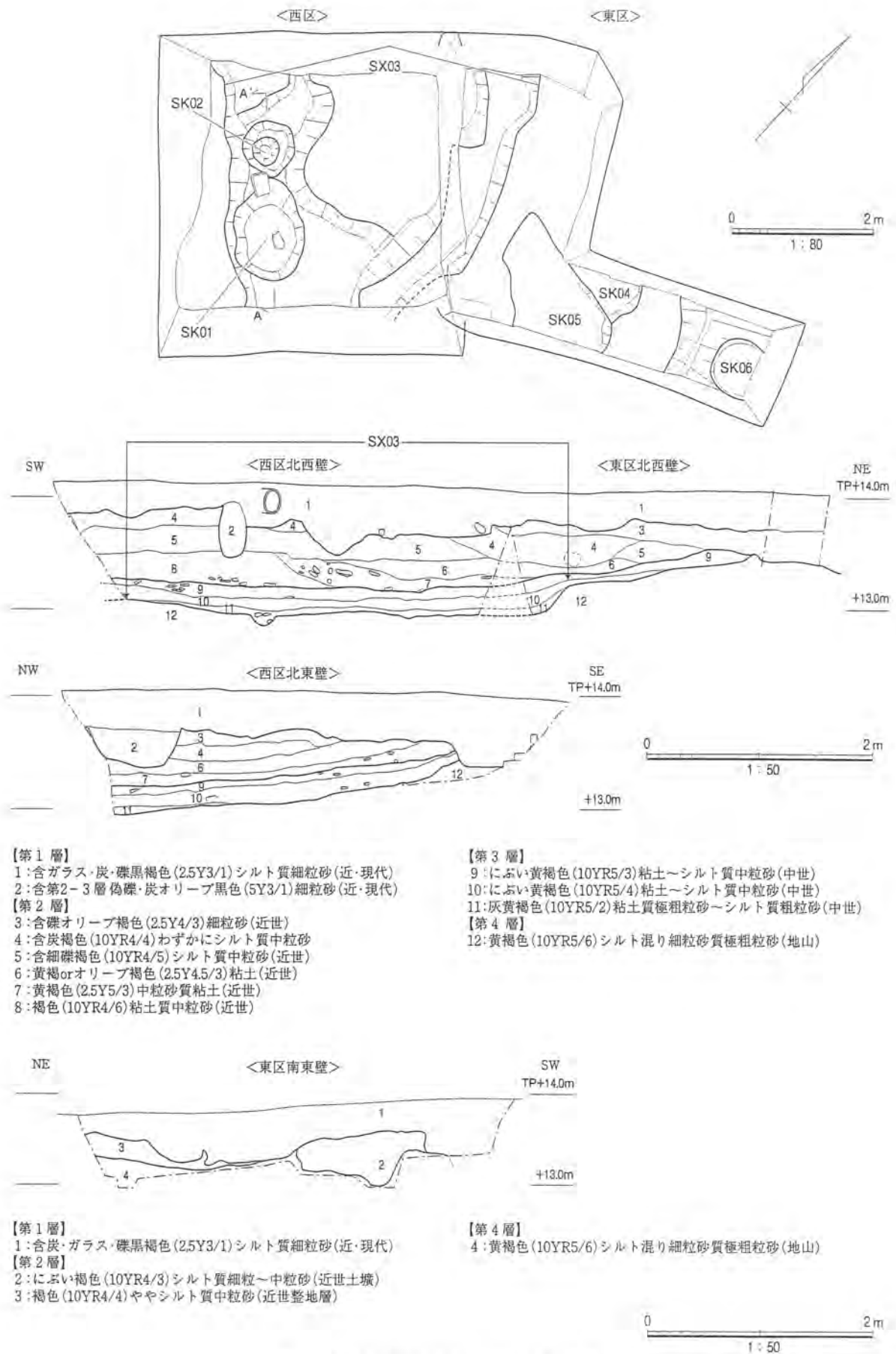
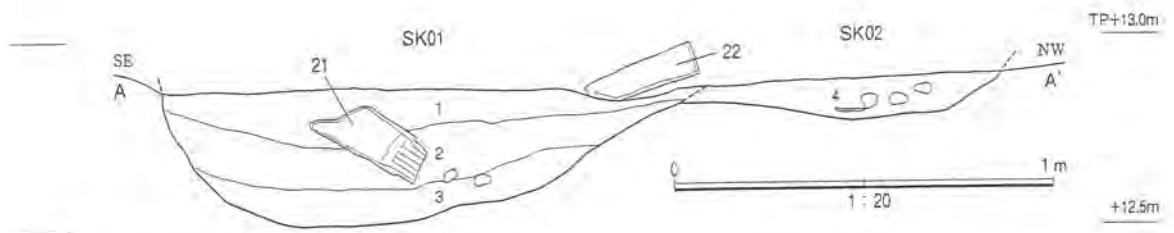


図4 調査区遺構平面図および地層断面図



- 1: におい黄褐色(10YR5/4)極粗粒砂質シルト(埋戻し土)
- 2: におい黄褐色(10YR5/3)シルト質極粗粒砂(埋戻し土)
- 3: におい黄褐色orにおい黄橙色(10YR5.5/3)極粗粒砂(加工時形成層)
- 4: におい黄褐色(10YR5/4)極粗粒砂質シルト(埋戻し土)

図5 SK01・02遺構断面図

が確認された。

第3層：東区では、西区に延びるSX03の埋土以外には堆積していない。におい黄褐色(10YR5/3)粘土～シルト質中粒砂層から灰黄褐色(10YR5/2)粘土質極粗粒砂～シルト質粗粒砂層で、層厚は最も厚い西区東北隅で約20cmである。本層には古代～中世の瓦片が多量に含まれ、下面でSX03およびSK01・02が確認された。

第4層：黄褐色(10YR5/6)シルト混り細粒砂質極粗粒砂からなる段丘構成層で、本調査地の地山層に相当する。

## 2. 遺構と遺物

本調査区では、古代に遡る遺構は検出されなかった。以下に古代の遺物および中世の遺構・遺物を記載する。

SK01・02はSX03の下位で検出された。SK01がSK02を切っている。

SK01の埋土はにおい黄褐色(10YR5/4)極粗粒砂質シルト～におい黄褐色(10YR5/3)シルト質極粗粒砂の埋戻し土で、基底にはにおい黄褐色(10YR5/3)ないしにおい黄橙色(10YR6/3)極粗粒砂の加工時形成層が見られる。SK01からは青磁・瓦質土器・瓦が出土している。2は青磁碗で、高台内部が無釉である。底部内面には文字または文様状の浅い陰刻がある。3は瓦質土器羽釜で、鏝から口縁部にかけて内傾し、体部外面は横方向のケズリが見られる。2・3は15世紀代のもので、遺構の時期を示していよう。4は重圏文の瓦であるが、筒部から瓦当にかけてを強く削って内湾させているため、鳥舎の可能性も考えられる。重圏文の圏線は、頂部が平坦な幅広いものである。また、この瓦の文様とセットになるとみられる重圏文軒平瓦5が次に述べるSX03から出土している。内区には、4と同様に幅広い3本の弧線を配し、その端が外圏に接する特徴がある。4・5はともに重圏文の瓦ではあるが、現在まで、難波宮域の調査では同范瓦は確認されていない。21は長さ30cm以上の丸瓦で先端側が欠損する。凸面はナデで仕上げているが縄目のタタキメが残り、凹面全面には布目痕がある。22は長さ約30cmのほぼ完形の平瓦である。凹面はナデで仕上げ、凸面には糸切り痕が明瞭である。胎土や焼成は21によく似る。

SK02はにおい黄褐色(10YR5/4)極粗粒砂質シルト層の埋土で、土師器・瓦片が出土している。1は土師器小皿で外面はユビオサエで仕上げている。口縁部に煤が付着しており、灯明皿に使用されたものである。

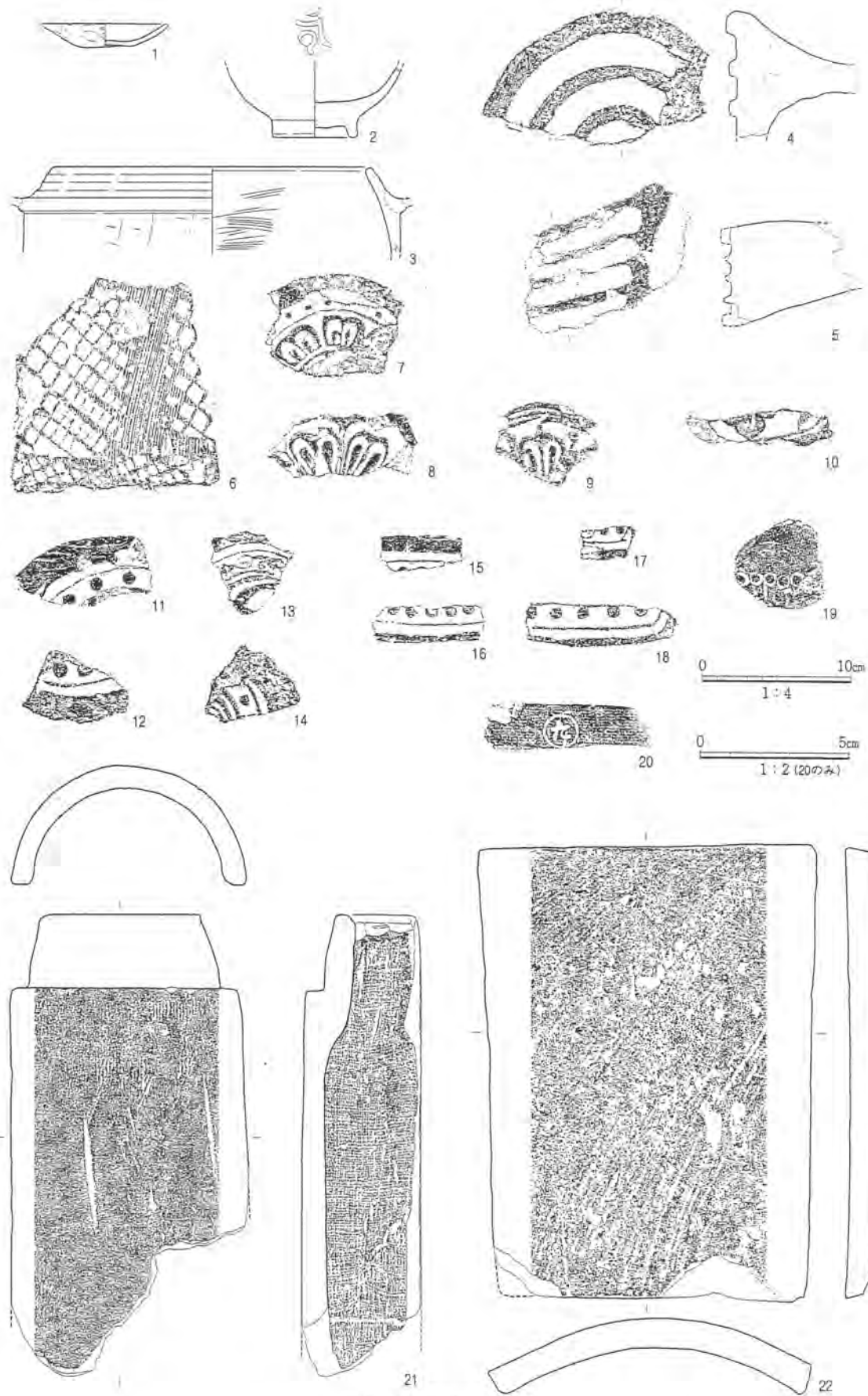


図6 遺物実測図・拓影

SK01(2~4・21・22)、SK02(1)、SX03(5・7・10~13・15~19)、第2層(6・8・9・14・20)



SX03の埋土上部はにぶい黄褐色(10YR5/3)粘土～シルト質中粒砂で、下部付近は灰黄褐色(10YR5/2)粘土質極粗粒砂～シルト質粗粒砂である。東区の西端付近から西へ向って低く傾斜するように掘削された落込みで、調査区の範囲では、不整形な平面形である。西区の西端で基底が緩やかに立上がりはじめるが、遺構の上端は調査区外に拡がっていると思われる。古代に遡る軒丸・軒平瓦のほか、多量の丸瓦・平瓦片が出土している。長さ10cm程度の細片化したものが多く、ごく付近で葺かれていた屋根瓦が、倒壊などで一気に堆積したようすはない。古代の瓦当には先の重圏文軒平瓦5のほか、7・10がある。7は複弁八葉蓮華文軒丸瓦で、外区に珠文を配する平安時代の瓦である。10は花菱文軒平瓦で、花卉の全体が残る部分はないが、4花卉が十字に拡がる花菱文を中央に配し、その左右に上下を半裁した花菱をそれぞれの周縁に接して配置するもので、四天王寺に類例がある平安時代の瓦である。ほか、11～13は外区に珠文を配する巴文軒丸瓦、15～18は連珠文軒平瓦の破片で、いずれも中世の瓦である。19は表面に竹管文を直線に配するもので、瓦である確証は得られないが胎土と焼成は瓦に類似するものである。

AB98-5・6次調査では、本調査地の北西50m付近に当る4区で不定形な落込みが見つかり、中世後半の土器・輸入磁器とともに古代～中世の瓦が多量に出土している。これらの遺構と瓦は、4区に南接して存在したとされる土壇跡とその改変に由来することが推測されている。本調査地の出土遺物は同じ土壇跡ないし西南に存在が推測される塔跡に由来するものと考えられ、SX03・SK01・02などの遺構も中世後半に付近で行われた何らかの造作に関係する可能性があるだろう。

なお、AB98-5・6次調査で見ついている寺域の東側を区画する溝とされたSD01・02の延長は、本調査区の東側外となるため確認できなかった。

これらのほか、第2層(近世遺物包含層)から出土した古代・中世の瓦がある。6は平瓦で凸面に格子タタキの痕が強く残る。8・9は複弁八葉蓮華文軒丸瓦、14は巴文軒丸瓦である。素文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦8はAB98-5・6次調査で報告された151・152の同形、重圏縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦9は複弁の先端が尖り間弁とともに外区との連結部分で盛り上がる特徴がある148～150の同形文である。これらは奈良～平安時代の瓦であろう。また、近世に下る平瓦に「○」に「た」の刻印瓦20も出土している。

#### 〈まとめ〉

本調査地では古代に遡る瓦と中世の不整形な落込みと土壇、遺物が見つかった。阿倍寺の創建を考える上でも、古代の瓦の出土位置を押さえていくことは、今後も非常に重要な作業である。また、中世の遺構では、近接する調査でも性格の類似する落込みや溝が見つかっており、阿倍寺の消長と付近の土地利用の変化を調べる資料を得ることができた。

一方で、現在までのところ、阿倍寺に直接かかわる遺構が把握されていないことは課題であり、周辺にこうした遺構・遺物が残されている可能性が一層高まったことから、今後も調査の継続が必要である。



引用・参考文献

大阪市文化財協会1996、「四天王寺とその周辺出土の古代瓦」：『四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告』I、pp.93-119

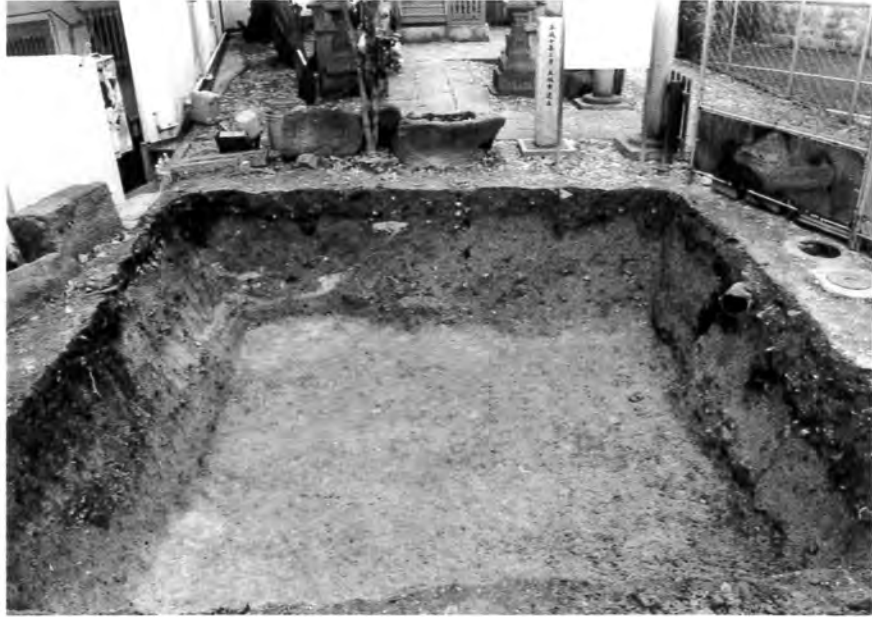
大阪市文化財協会2001、「阿倍寺跡の調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1998年度-』、pp.51-60

大阪市文化財協会2006、「阿倍野筋2丁目における埋蔵文化財発掘調査(AB06-1)報告書」

大阪市文化財協会2008、「ジェイアール西日本不動産開発株式会社による建設工事に伴う阿倍寺跡発掘調査(AB08-1)報告書」

大阪府学務部1931、「寺院、寺院址」：『大阪府史蹟名勝天然記念物』第5冊、p.80

西区SX03瓦片出土状況  
(北東から)



西区SK01・02瓦出土状況  
(北東から)



東区SX03完掘状況  
(東から)



# VIII 住 吉 区

## 菟田六丁目における埋蔵文化財発掘調査(KL09-3)報告書

- ・調査箇所 大阪市住吉区菟田6丁目54-1
- ・調査面積 19.5㎡
- ・調査期間 平成21年7月15日～7月17日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、小倉徹也

### 〈調査に至る経緯と経過〉

菟田4丁目所在遺跡は、2001年に新たに発見された中世～近世の遺跡である(図1)。遺跡の東には難波京朱雀大路から南へ続く難波大道が通っていたと推定されており、南西には旧石器～江戸時代の複合遺跡である山之内遺跡や7世紀以降に造られたとみられる依網池跡が存在する(図3)。近年、本遺跡の中部で府営住宅の建替えに伴ってKL02-1次およびKL06-1次調査が行われており、今回の調査地はその南側に位置する。KL02-1次では14～15世紀の鋳造に関連する遺構・遺物が検出され

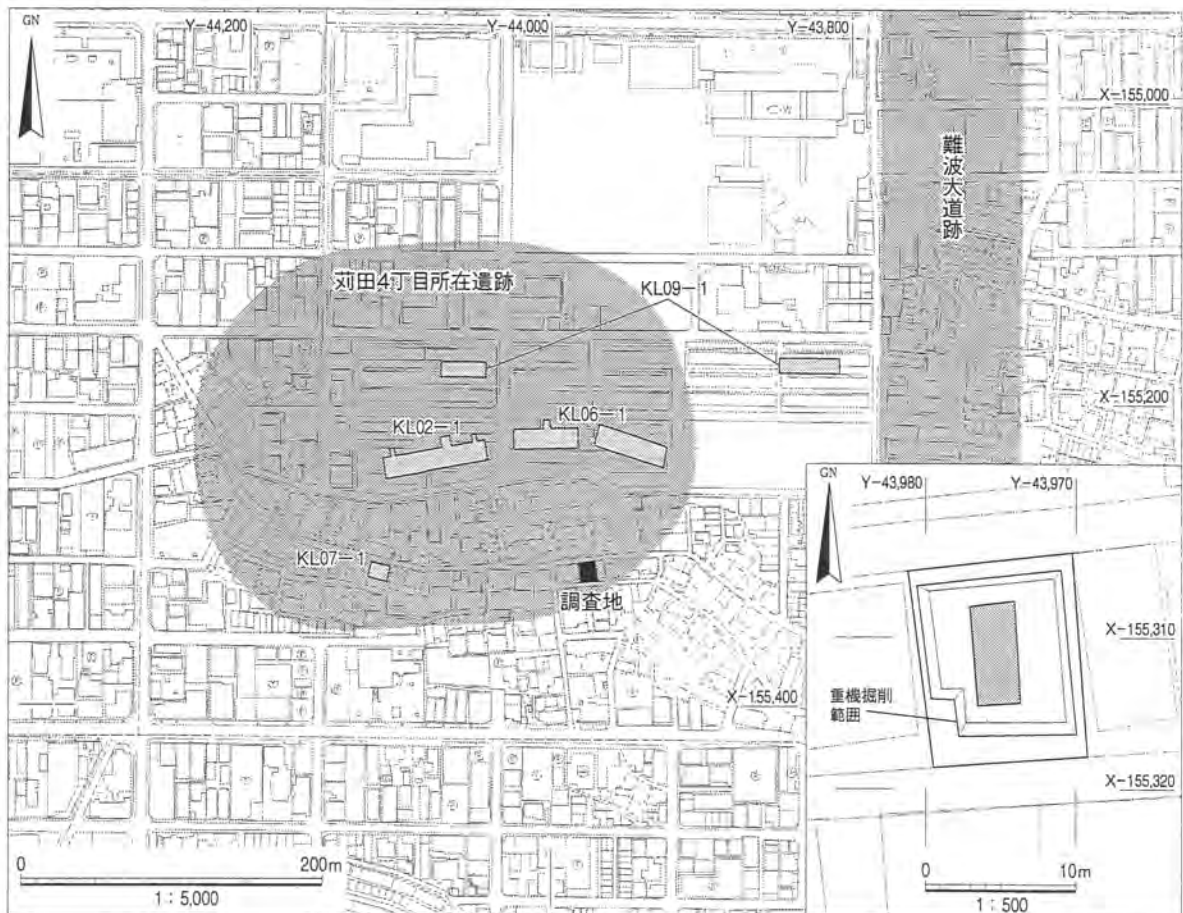


図1 調査地位置図

図2 調査区配置図

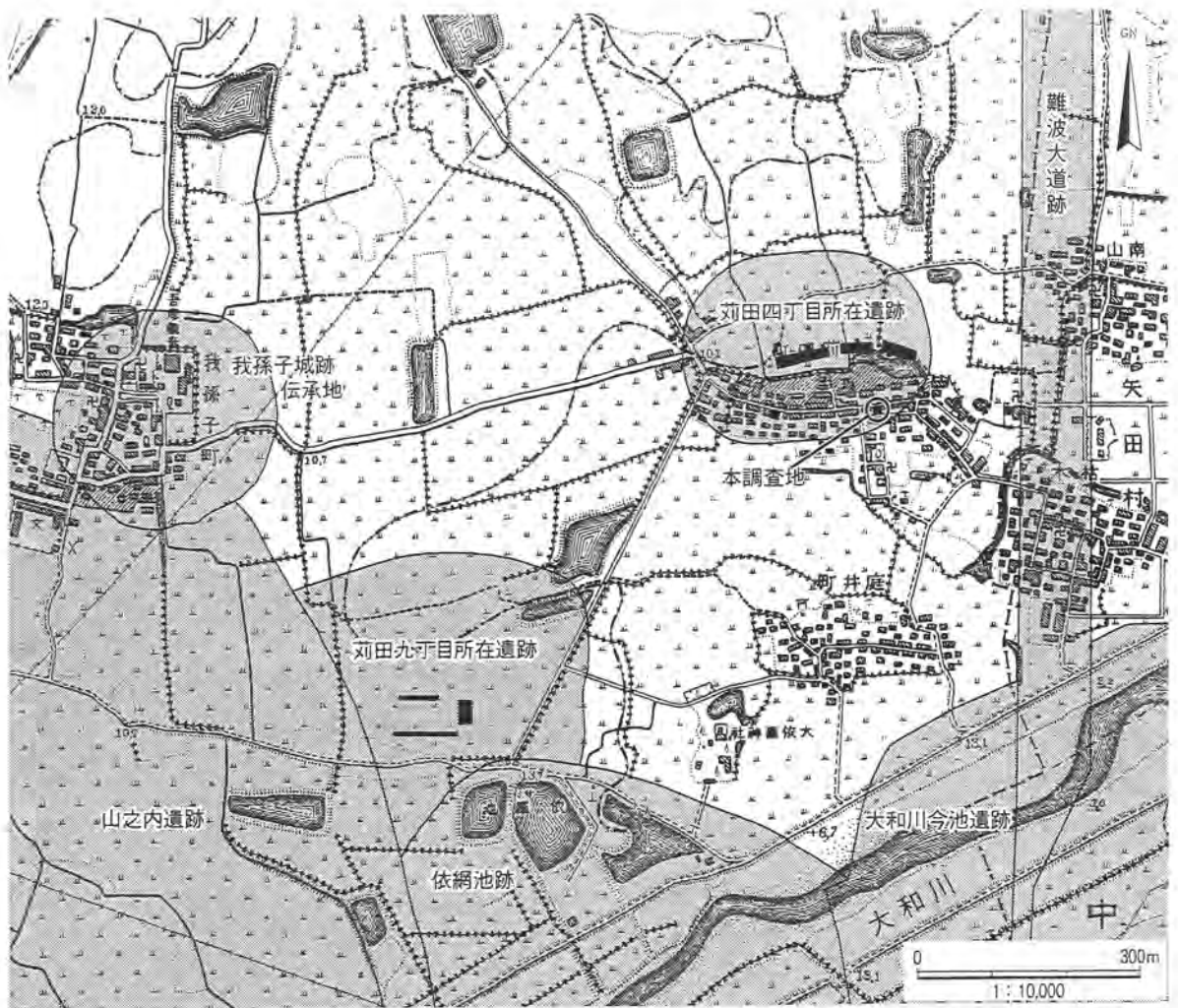


図3 苧田4丁目および9丁目所在遺跡の調査地位置図(国土地理院【1万分の1地形図】(1927)に一部加筆)

ており、文献との比較から、この地に「苧田鋳物師」が存在したと推定されている[大阪市文化財協会2004]。その東側で行われたKL06-1次でも15世紀~16世紀初頭の鋳造に関連する遺構・遺物が多数検出されており、掘とみられる大溝が発見されている。炉跡や建物は確認されていないが、工房施設はKL06-1次調査地より東南に存在する可能性があると想定され、その廃絶時期は16世紀中頃以降と考えられている[大阪市文化財協会2008]。また、本遺跡の西南部で行われたKL07-1次調査では15世紀前半に埋戻された井戸や、ほぼ同時期と考えられる柱穴が見つかっており、15世紀前半までには集落が形成されていたことが推定されている。

建設工事に伴って試掘調査を実施したところ、段丘構成層(地山層)の上位に炉壁や瓦質土器を含む地層が認められ、廃棄土壌の可能性がある。この試掘結果とこれまでの周辺地域の調査成果から、当該地に遺構が存在する可能性が高いため、工事に先立って発掘調査を実施することになった。

調査着手前に、事業者側で現地地表下約2mまでの重機掘削が行われ、調査はその重機掘削範囲内に6.5m×3mの調査区を設定して、2009年7月15日から開始した(図2)。遺構や遺物の検出に努めるとともに、平面図や断面図の作成、写真撮影などの記録作業を行い、7月17日に現地における作業を完了した。

〈調査の結果〉

1. 層序

調査地における現地表面の標高はTP+9.7m前後、重機掘削後の調査面の標高はTP+8.6~8.7mであった。現地表面下約1.6m(TP+8.1m)までの地層を観察した結果を以下に記す。地層と遺構の関係を図4、各層の岩相や特徴を図5に、西壁・南壁地層断面図を図6に示す。

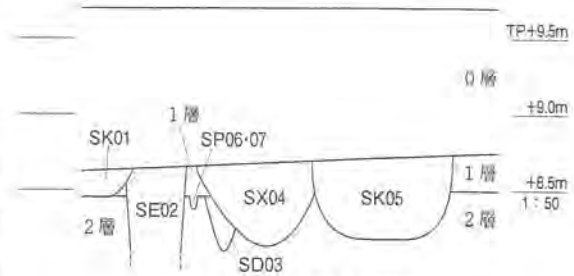


図4 地層と遺構の関係図

第0層は現代の盛土層で、層厚は85~110cmである。

第1層は近世の作土層で、暗灰黄色のシルト質細粒砂からなり、炭や土器片を含む。層厚は25cm以下で、調査区の西南部に分布し、後述する柱穴SP06・07は本層を埋土とする。下位層との層理面は極めて明瞭であった。本層からは肥前磁器が出土しており、上面では土壙SK01・04・05および井戸SE02を検出した。

第2層は上部が極粗粒砂~中礫を含む、にぶい黄橙色の細粒~中粒砂質シルトからなり、下部が黄灰色ないし灰黄色、にぶい黄色の細礫~中礫質極粗粒~粗粒砂からなる。付近一帯に分布する段丘構成層で、上部の層厚は7cm以下、下部は50cm以上である。本層上面で溝SD03およびSP06・07を検出した。

2. 遺構と遺物

平面的な調査は重機掘削後の平面および第2層上面で行った。第1層および第2層上面検出遺構平面図を図6に、SD03、SP06・07、SK01のそれぞれの断面図を図7~9に示す。

層序	標高	模式柱状図	岩相	土色	層厚(cm)	遺構	おもな遺物	時代
第0層	TP+9.7m	[Diagram showing modern fill layer]	<現代盛土>	-	85~110			現代
	+9.5m							
第1層	+9.0m	[Diagram showing recent soil layer]	暗灰黄色 シルト質細粒砂 <近世作土> (炭・土器片を含む)	2.5Y4/2	≤25	←SK01-04-05、SE02	肥前磁器	近世
			にぶい黄橙色 細粒~中粒砂質シルト	10YR6/3	≤7	←SD03、SP06-07		
第2層	+8.5m	[Diagram showing ancient soil layer]	黄灰色・灰黄色にぶい黄色 細礫~中礫質極粗粒~粗粒砂 (中粒砂の薄層を挟む)	2.5Y5/1 2.5Y6/2 2.5Y6/3	>50			旧石器
	+8.1m							

図5 調査地の層序



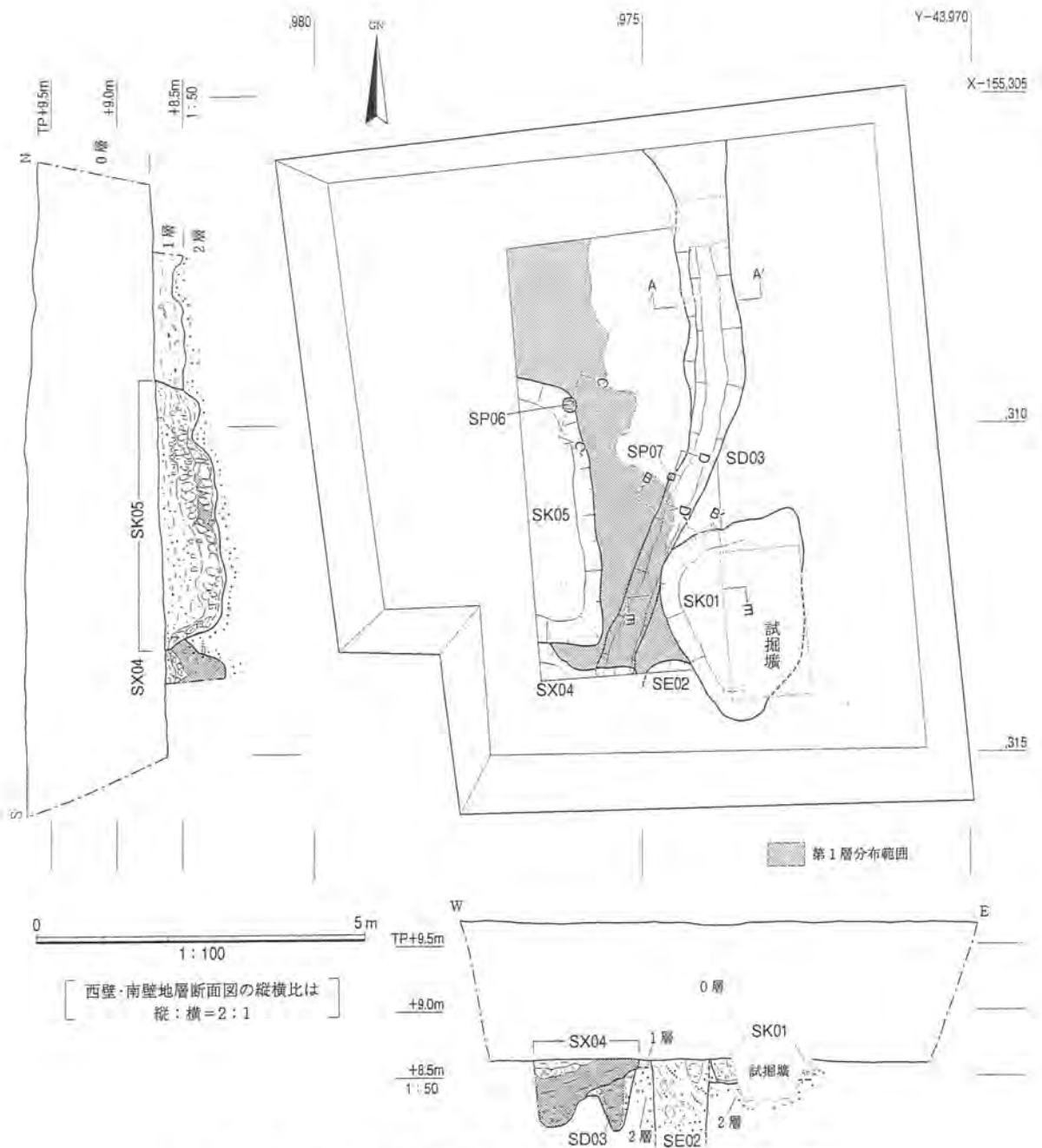


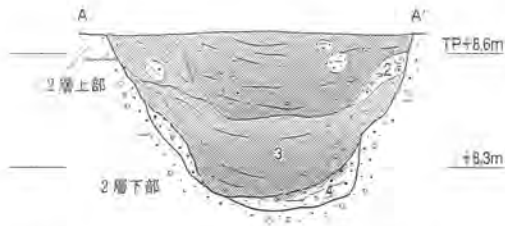
図6 第1層および第2層上面検出遺構平面図、西壁・南壁地層断面図

a. 第2層上面検出遺構

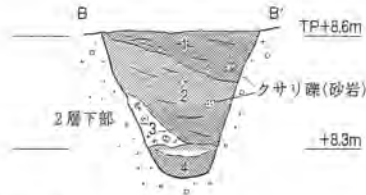
溝SD03、柱穴SP06・07を検出した。

SD03 検出した幅は0.40~0.90m、深さは0.35~0.45mである。方向は北側でN6°W、南側ではN23°Eと屈曲していた。断面の形状は、屈曲部を境にして北側は深さに対して幅が同程度かやや広く、南側は深さに対して幅が狭くV字状に掘られていた。埋土は上位の第1層に比べて固く締まっており、北側(A-A'断面)では下部の加工時形成層と中部および上部の機能時堆積層に大きく区分できた。上部の下底付近には第2層の偽礫混りの地層が認められ、上部と中部の境界の層理面が比較的明瞭であったことから、溝の掘直しが行われた可能性があると考えた。南側(B-B'断面)では下底部に加工時形成層は見られず、下部は中粒砂~細礫を含む褐灰色の細粒砂質シルトからなる水つきの堆積層(機





- 上部 1: 含細～中礫・2層偽礫 黒褐色(10YR2/2)細粒砂質シルト(機能時堆積層)  
 2: にぶい黄橙色(10YR6/3)シルト質粗粒～中粒砂(2層を母材とする崩積層)  
 中部 3: 含細～中礫 黒褐色(10YR3/1)細粒砂質シルト(機能時堆積層)  
 下部 4: 含極粗粒砂～中礫 褐灰色(10YR6/1)シルト質中粒～粗粒砂(加工時形成層)



- 上部 1: 含細粒砂～細礫・クサリ礫(砂岩)・2層偽礫  
 黒色(10YR2/1)シルト～粘土質シルト(機能時堆積層)  
 2: 含クサリ礫(砂岩)・2層偽礫 黒褐色(10YR3/1)シルト～粘土質シルト  
 (機能時堆積層)  
 中部 3: 含2層偽礫 褐灰色(10YR4/1)シルト質粗粒～中粒砂  
 (2層を母材とする崩積層)  
 下部 4: 含中粒砂～細礫 褐灰色(10YR4/1)細粒砂質シルト(機能時堆積層)

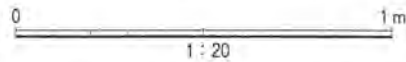
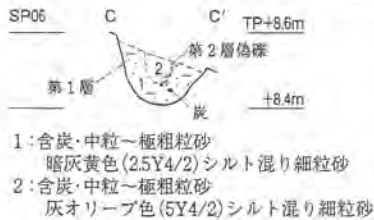
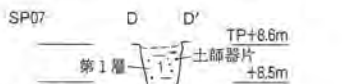


図7 SD03断面図



- 1: 含炭・中粒～極粗粒砂  
 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト混り細粒砂  
 2: 含炭・中粒～極粗粒砂  
 灰オリーブ色(5Y4/2)シルト混り細粒砂



- 1: 含炭・中粒～極粗粒砂  
 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト混り細粒砂

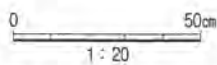
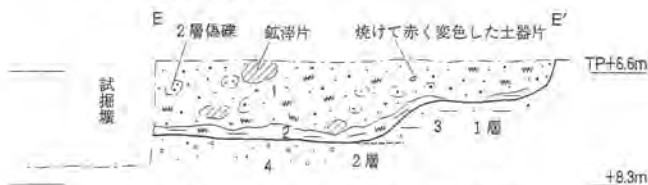


図8 SP06・07断面図



- 1: 黒褐色(10YR3/2)炭・ガラス・スラグ混り粗粒砂  
 2: オリーブ黒色(5Y3/1)シルト～粘土質シルト  
 3: 暗灰黄色(2.5Y4/2)含炭・中粒～極粗粒砂  
 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト混り細粒砂(第1層)  
 4: にぶい黄色(2.5Y6/3)細礫～中礫質極粗粒～粗粒砂(第2層)

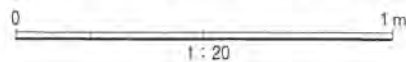


図9 SK01断面図

能時堆積層)で、中部以上は北側の断面に同様な堆積状況であった。下底部の標高がTP+8.28～8.32mとほぼフラットで、埋土に流れた痕跡を示す堆積構造が観察されなかったことから、給排水用ではなく、区画のための溝と考えた。なお、埋土から遺物は出土していない。

SP06 平面がほぼ円形の柱穴で、直径は約0.25m、残存する深さは約0.20mであった。埋土は第1層で、埋土からは土師器の極細片が出土したのみであった。なお、柱痕跡は認められなかった。

SP07 平面が正方形の柱穴で、一辺の長さは0.12m、残存する深さは0.12mであった。SD03を切っており、埋土は第1層で、埋土からは遺物は出土しなかった。

物は出土しなかった。

#### b. 第1層の検出遺構

重機掘削後の平面および四周の壁断面の観察から土壌SK01・04・05、井戸SE02を確認した。

SK01 遺構全体の西半部を確認した。平面の形状は不整形で、検出した東西長は約0.95m、南北長は約1.35mで、深さは約0.40mであった。埋土は黒褐色の炭・スラグ混り粗粒砂からなり、焼けて赤く変色した土器片や炉壁の破片、第2層の偽礫などを含む。下底に

は層厚1～5cmのオリーブ黒色を呈するシルト～粘土質シルトが見られた。今回の調査で鑄造に係わった遺物が出土したのはこの遺構のみであった。

SE02 南端部で確認した井戸で、遺構の南側の大部分は調査範囲外であったため平面の大きさは不明である。確認できた深さは約0.65m、下底から湧水が認められた。埋土は暗灰黄色の粗粒～中粒砂からなり、

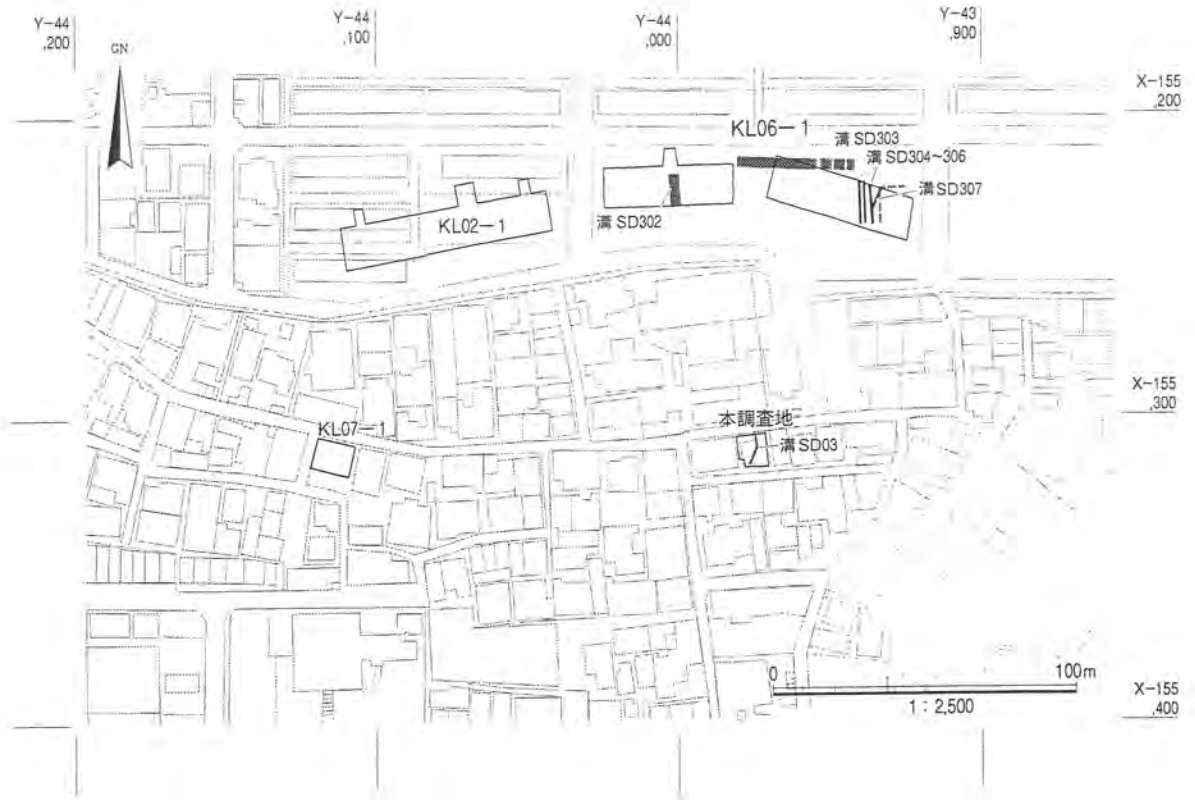


図10 本調査地および周辺調査地の遺構配置図(大阪市文化財協会2008に一部加筆)

表1 KL06-1次および本調査地で検出された溝の比較

KL06-1次

遺構No.	法量	埋土の堆積状況	出土遺物(年代観)	推定される遺構の性格
	方向			
SD302	幅:最大1.4m、深さ:0.5m (全体的に北へ深くなる)	上層、下層、最下層に区分。 上層:段丘構成層の偽礫を含む灰黄褐色シルト (人為的な埋戻し土層) 下層:黒褐色シルト粘土層(機能時堆積層) 最下層:段丘構成層の偽礫を含む 灰黄褐黒褐色シルト層(加工時形成層)	上層~下層:15世紀初頭前半の国産陶器、 瓦質土器、瓦器、須恵器、土師器、鑄 造関連遺物 (上層の最下部~下層:完形の土師器、瓦 質土器皿が点在して出土)	大きな区画と排水目的をかねた溝と 考えられる。
	N6°W			
SD304	幅:0.5m、深さ:0.1m N2~3°W	段丘構成層の偽礫を含む 灰黄褐~暗褐色極細粒砂質シルト	土師器、瓦、鑄造関連遺物	小規模な区画のための溝と考えられる。 (SD304は他の遺構との切合い関係から、 16世紀前半以降に降ると考えられ、 SD304が最も新しく、SD305・306はこれ に先行する可能性がある。)
SD305	幅:1.1m、深さ:0.1m N2~3°W	◇	瓦器碗、土師器の細片	
SD306	幅:0.5m、深さ:0.1m N2~3°W	◇	出土遺物はない	
SD307	幅:0.4m、深さ:0.1m	よく締まった黒褐色シルト	土師器細片のみ (時期の特定はできない)	SD306に切られており、確認された溝の 中で最も古いと推定される。方向や埋土 の特徴も他とは異なり、中世以前に遡る 可能性がある。
	N24°E(他の溝とは異なる)			

本調査地

遺構No.	方向	埋土の堆積状況	出土遺物	推定される遺構の性格
	法量			
SD03	幅:0.4~0.9m 深さ:0.35~0.45m	<北側> 上部:黒褐色細粒砂質シルト(機能時堆積層)およ び、含段丘構成層偽礫 褐灰・におい黄褐色 シルト質粗粒砂~細粒砂質シルト(崩積層) 中部:含細~中礫 黒褐色細粒砂質シルト (機能時堆積層) 下部:含極粗粒砂~中礫 褐灰色シルト質中粒~ 粗粒砂(加工時形成層) <南側> 上部:含細粒砂~細礫・クサリ礫(砂岩)・段丘構成 層偽礫 黒色シルト~粘土質シルト(機能時堆積層) 中部:含クサリ礫(砂岩)・段丘構成層偽礫 黒褐色 シルト~粘土質シルト(機能時堆積層)、含段丘構成 層偽礫 褐灰色シルト質粗粒~中粒砂(崩積層) 下部:含中粒砂~細礫 褐灰色細粒砂質シルト (機能時堆積層)	出土遺物はない	区画のための溝と考えられる。
	北側:N6°W 南側:N23°E			

シルトや第1層の偽礫を含む。埋土から肥前磁器の破片が出土した。

SK04 西南端において確認した土壌で、その南西部の大部分は調査範囲外であった。確認した東西長は約0.60m、南北長は約0.25m、残存する深さは約0.50mであった。埋土は下部が砂・礫を含む黒色のシルト～粘土質シルトで、上部が第2層の偽礫を含む灰色の中粒～粗粒砂質シルトである。

SK05 西部において確認した土壌で、その西部分は調査範囲外であった。確認した東西幅は約0.45m、南北長は約1.80m、残存する深さは約0.50mであった。埋土は最下部が粗粒砂～細礫、第2層の偽礫を含むオリブ黒色のシルト～粘土質シルトで、下部が第2層の偽礫を多く含む黒褐色の細粒砂質シルト、上部が粗粒砂～細礫、第2層の偽礫を含む灰色のシルト質中粒～細粒砂である。埋土から播鉢や肥前陶器の破片が出土した。

#### c. 本調査地およびKL06-1次で検出された溝の比較

第2層上面において、北側でN6°W、南側ではN23°Eに屈曲する溝SD03を検出した。これと同様の方向性をもつ溝がKL06-1次でも検出されており、その方向はSD302がN6°W、SD304～306がN2～3°W、SD307はN24°Eで、SD302およびSD304～306は室町時代、SD307は中世以前に遡る可能性があると考えられている(表1)。図10から、本調査地とKL06-1次調査地とはやや距離が離れているため、SD03がKL06-1次のいずれの溝に連続するかは明らかではなく、また、SD03からは遺物は出土していない。ここでは、SD03の方向性から中世～近世の区画の溝の可能性を指摘するにとどめておくことにする。

#### 〈まとめ〉

今回の調査で得られた成果を以下にまとめる。

前述のように、第2層上面において室町時代以前の遺構の可能性のある溝を1条検出した。また、冒頭でも述べたように、本遺跡のこれまでの調査では铸造に係わった遺構・遺物が多数検出されており、このことから「荻田鋳物師」が存在したと推定されている。今回の調査地でもやや新しいものではあるが、铸造に係わった遺物の出土した土壌が検出された。本遺跡における調査例は少なく、工房施設や集落の中心部については未だ明らかにはなっていない。本調査地の結果を含め、今後行われる調査の結果を合わせて検討していくことが必要である。

#### 引用・参考文献

- 大阪市文化財協会2004、『荻田4丁目所在遺跡発掘調査報告』  
2008、『荻田4丁目所在遺跡発掘調査報告』Ⅱ  
2009、『荻田9丁目所在遺跡発掘調査報告』

SD03検出状況  
(第2層上面、南西から)



SD03断面①  
(A - A' 断面、南から)



SD03断面②  
(B - B' 断面、南西から)



## 山之内遺跡発掘調査(YM09-3)報告書

- ・調査箇所 大阪市住吉区杉本2丁目12-1の一部
- ・調査面積 300㎡
- ・調査期間 平成21年8月3日～8月6日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、平田洋司

### 〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は旧石器時代から中世にかけての集落遺跡である山之内遺跡の中心部に位置する(図1)。近隣では、西約50mの地点でYM87-31次調査を行っており、炉壁・鑊羽口・鉾津など15～16世紀代の鑄造に関する遺物が多く出土した[大阪市文化財協会1998]。今回の調査地から北側、山之内元町を中心とする地域では、14～17世紀代にかけての鑄造関係の遺構・遺物が検出され、我孫子鑄物師との関連が注目される。

今回の調査地では、大阪市教育委員会による試掘調査の結果、地表下50～130cmに中～近世の可能性のある地層が認められたため、工事に先立ち発掘調査を実施することとなった。調査は平成21年8月3日より開始し、敷地の西北部に東西3m、南北10mの調査区を設定した(図2)。重機による掘削は北部では地山層である後述の第5層まで、深い遺構内に当たる南部では遺構の底から約0.2m上位までとし、残りはすべて人力による掘削とした。遺構検出・掘削・記録などの諸作業を適宜進め、同年8月6日埋戻しを含む現地におけるすべての作業を終了した。



図1 調査地位置図

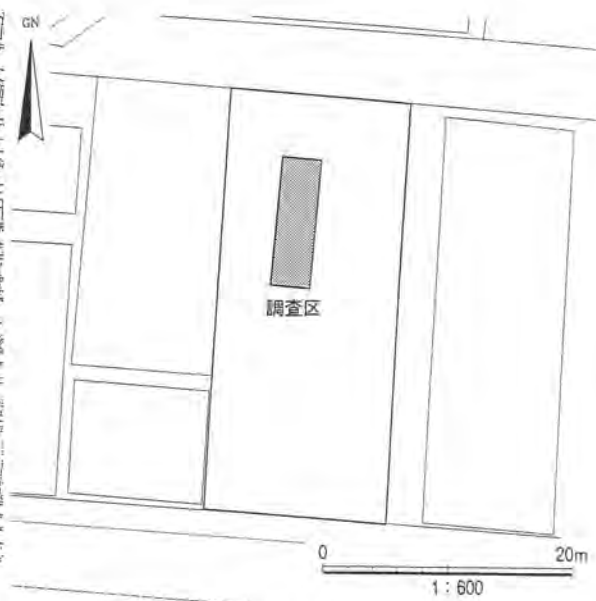


図2 調査区配置図



調査および本報告で使用した水準値は東京湾平均海面値であり、本文・挿図中ではTP+〇mと表記する。方位は図1・2は座標北、図4は磁北である。



図3 地層と遺構の関係

〈調査の結果〉

### 1. 層序(図3・4)

現地表面の標高はTP+10.8m前後ではほぼ平坦である。調査ではもっとも深い部分で現地表下1.6m、TP+9.2mまでの地層を観察し、第1～5層まで区分した。以下おもな特徴を記す。

第1層 現代の整地層で層厚は約30cmである。

第2層 オリーブ黒色(5Y3/2)細粒砂質シルトからなる現代作土層で層厚は10cmである。

第3層 オリーブ黒色(5Y3/1)細粒砂質シルトからなる近～現代の作土層で層厚は10～20cmである。分布範囲が異なるため後述の第4d層以上との前後関係は明らかではない。

第4層 後述の池状遺構SG01に関する埋土で、第4a～4f層に細分した。

第4a層は褐色(10YR4/6)細粒砂～礫などからなる整地層で層厚は約30cmである。本層によって最終的に調査地は平坦になる。

第4b層はにぶい黄褐色(10YR5/3)粗粒砂質シルトからなる作土層で層厚は約10cmである。

第4c層はシルト偽礫を多く含む粗粒砂～礫を主体とする整地層である。層厚は厚い部分で50cmである。本層によってSG01はほとんど埋められる。本層の上面では溝およびその土手と判断できる盛土が認められた。

第4d層は暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂～礫および灰色(5Y4/1)礫質シルトなどからなるSG01の機能時堆積層である。第4e層を掘り込み、層厚は15～25cmである。部分的にラミナが認められた。後述のように本層から瀬戸磁器などが出土したことから19世紀以降に位置づけられる。

第4e層は灰色(5Y4/1)中粒～粗粒砂などからなり、層厚は最大40cmでSG01の掘形近くのみ遺存する。本来はSG01全体に存在した機能時堆積層であろう。第4f層を掘り込んでいる。時期を決する遺

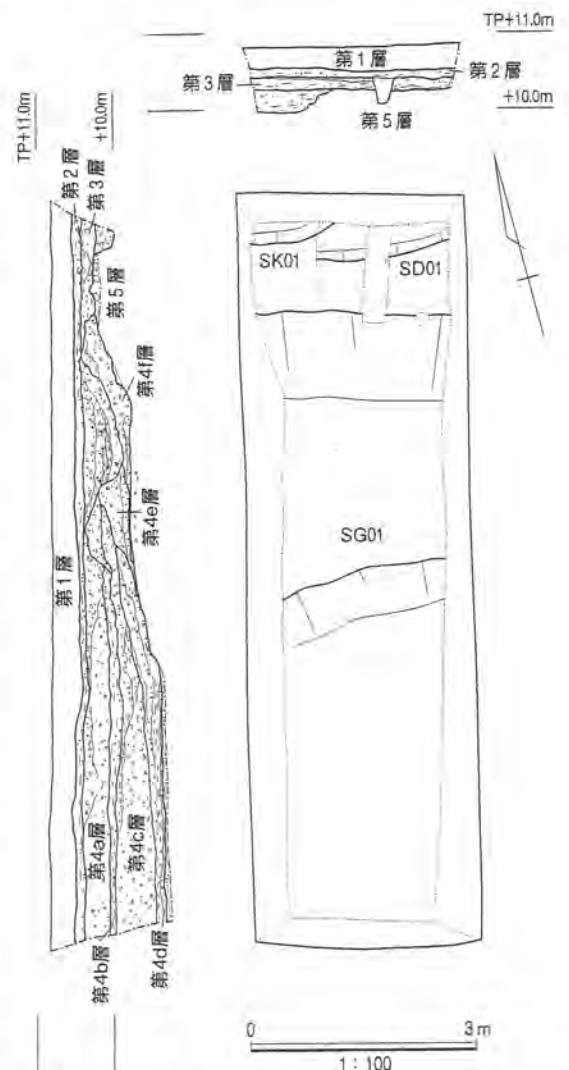


図4 平面・断面図



物は出土していないが、第4d層に類似し、大きな時期の隔たりはないと判断できる。

第4f層は第5層の偽磔のほかシルト偽磔を多く含む粗粒砂を主体とし、層厚30cm未満でSG01の掘形にのみ遺存する。偽磔を多く含むことからSG01の加工時堆積層もしくは埋戻しに関係する地層とみられるが判断しがたい。また、後述のようにSG01とは別の遺構埋土とも考えうる。埋土からは鉾滓・炉壁のほか瓦質土器が出土した。15世紀代に遡る可能性がある。

第5層 段丘構成層で、高い部分では灰白色(7.5Y4/1)粘土、低い部分ではオリーブ灰色(2.5GY6/1)中粒砂を確認した。岩相から上部は大きく削平を受けていると判断しうる。

## 2. 遺構と遺物(図4・5)

遺構は第5層上面で検出作業を行った。

SG01 調査地の大部分を占める池状遺構で、南に向かって低くなる。南北8m以上、深さはもっとも深い部分で1.1mである。試掘調査の際に調査区外南側、敷地南付近でも同様の地層が確認できたことから、南北方向は20m以上あるといえよう。

幾度かの掘直しや埋立てなどの変遷を確認することができ、埋土を第4a層から第4f層に細分した。もっとも古い埋土の第4f層は掘形のみ部分的に認められる。本層基底面と第4e層基底面のレベルが同じで平坦であることからSG01の埋土の一部と判断した。第4e層によって南部が失われていることから本来の分布範囲は不明である。本層からは炉壁・鉾滓などのほか瓦質土器鉢1が出土した。15世紀代に位置づけられる。出土遺物で時期が判断できるのはこの1点のみであるが、SG01の掘削が中世に遡る可能性がある。ただし、埋土が第4e層以上とは大きく異なること、第4d層の出土遺物とはかなりの時期差があることから、本来は中世に掘られた別の遺構の埋土で第4e層以上がSG01の埋土の可能性もあるが、今回の調査では明らかにできなかった。

第4e・4d層はSG01の機能時堆積層で、第4d層の基底面は一段深くなることから、SG01の浚渫による埋土の差と推定できる。第4e層からは国産陶磁器類が出土した。2は肥前磁器碗、3・4は瀬戸磁器碗、5は瀬戸磁器皿である。19世紀代に位置づけられる。

第4c層による埋立てによってSG01はほぼ平坦となり、池としての機能は失ったと考えられるが、周囲より一段低い地形として残る。掘形に沿って東西方向の溝が掘られ、溝を掘削した土は南側に土手状に盛土されている。これらは断面で確認したのみであるが、溝の幅は2.2m、深さは0.5mで、盛土は幅1.2m、高さ0.2mである。盛土より南の低い部分には作土層である第4b層があることから、耕作域として利用されたのであろう。その後、第4a層による埋立てによってSG01は完全に埋没する。

調査地周辺には灌漑用としてかつて多くの溜池が存在したことが、文献や絵図・地図などによって知られている。このうち1927年国土地理院発行の『1万分の1地形図』には調査地付近に一辺80m程度

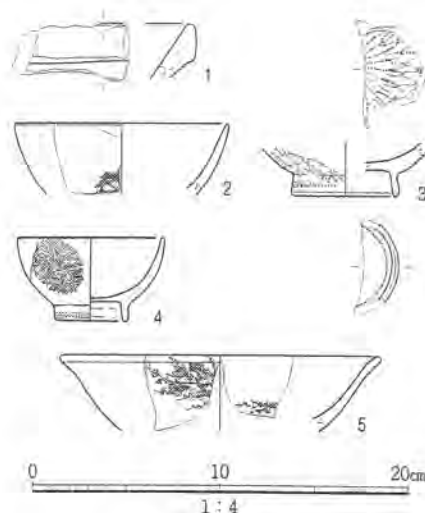


図5 SG01出土遺物実測図  
第4f層(1)、第4d層(2~5)

の方形の池が記されている(図6)。SG01はこの池の北端に当たる可能性がある。

SK01 調査地西北端で検出した土壌である。一部を検出したのみで規模・形状は不明である。深さは0.3mを確認した。埋土は第5層の偽礫を含むオリーブ黒色(5Y3/1)粗粒砂質シルトである。播鉢とみられる陶器細片が出土したのみで時期を決することはできないが、江戸時代以降であろう。

SD01 調査地北部で検出した東西方向の溝である。幅0.5m以上で調査区外に続く。埋土は第3層の作土層で深さは0.05mと浅いことから、遺物は出土しなかったが近～現代の耕作に関する溝であろう。

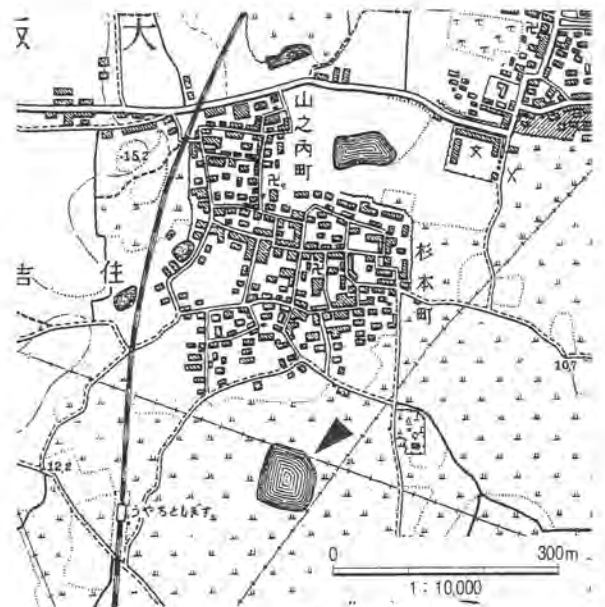


図6 近代の地図に記された池  
(国土地理院発行「1万分の1地形図」1927年に一部加筆)

#### 〈まとめ〉

今回の調査では、調査地周辺の土地利用に関する所見を得ることができた。1つにはこの地に池が存在したことである。池が次第に埋め立てられ、耕地化していく過程を明らかにすることができた。さらにこの池の掘削が15世紀まで遡る可能性を指摘することができた。

もう1つは炉壁・鉾滓など鑄造に係わる遺物が出土したことである。山之内元町を中心とする鑄造に関する遺構・遺物の分布がYM87-31次調査の成果とあわせさらに南にまで広がっていることが確実になったといえよう。

#### 参考文献

大阪市文化財協会1998、『山之内遺跡発掘調査報告』

調査地全景(北から)



調査地全景(北東から)



SK01(南東から)



# IX 東 住 吉 区

## 田辺4丁目所在遺跡発掘調査(TQ09-2)報告書

- ・調査箇所 大阪市東住吉区東田辺1丁目1-14
- ・調査面積 20㎡
- ・調査期間 平成21年9月9日～9月11日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、小倉徹也

### 〈調査に至る経緯と経過〉

田辺4丁目所在遺跡は古墳時代から室町時代にかけての遺跡で、西約500mには難波京朱雀大路から南へ続く難波大道が通っていたと推定されており、これに沿って山坂遺跡、南田辺遺跡、桃ヶ池遺跡、また、南約500mには田辺東之町遺跡など、古代～近世の遺跡が分布している。本遺跡における調査例は少なく、試掘調査が6箇所、本格的な調査は遺跡の中央部で行われたTQ95-1次の1箇所のみで、遺跡の全容は未だ明らかにはなっていない(図1)。TQ95-1次では、古墳時代後期の土壌や中世の水田・井戸が検出されている。これらの遺構の内、土壌からはTK43型式に属する甗・提瓶・甕が出土しており、TQ95-1次調査地は古墳時代後期の集落内に位置していた可能性が指摘されている。また、井戸は掘形や井筒の形状から灌漑用の野井戸とみられており、掘形からは飛鳥時代の壺や室町時代の平瓦、井筒内の埋土からは平安時代の須恵器や15～16世紀代の平瓦が出土しており、こ

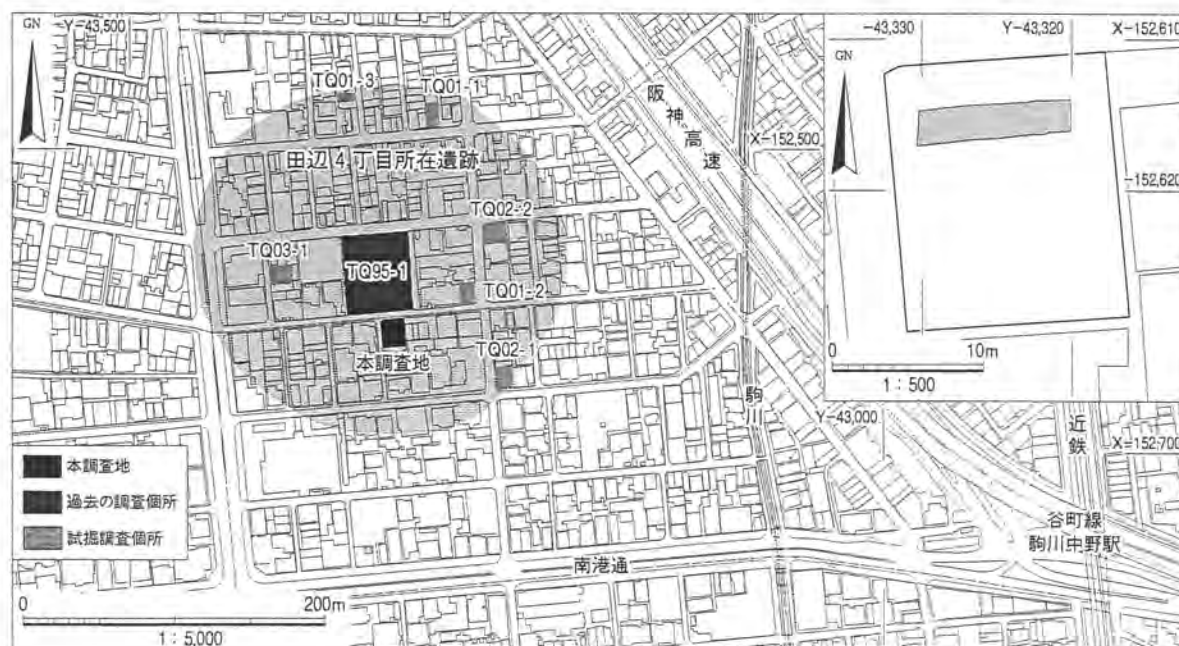


図1 調査地位置図および調査区配置図

のことから調査地は古墳時代以降も継続して集落内に位置していたと考えられている。

建設工事に伴って試掘調査を実施したところ、段丘構成層(地山層)上面に落込みが確認された。この試掘結果とこれまでの周辺地域の調査成果から、建設工事に先立って発掘調査を実施することになった。

敷地北寄りに10m×2mの調査区を設定し、2009年9月9日から発掘調査を開始した(図1)。調査は現代盛土層から近世作土層までを重機で掘削し、以下を人力で慎重に掘下げた。遺構や遺物の検出に努めるとともに、平面図や断面図の作成、写真撮影などの記録作業を行い、9月11日に現地における作業を完了した。

以下、本報告に掲載した図に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、方位は座標である。

## 〈調査の結果〉

### 1. 層序

調査地における現地表の標高はTP+5.2m前後で、現地表下約0.7m(TP+4.5m)までの地層を観察した。その結果を以下に記す。地層と遺構の関係を図2、各層の岩相や特徴を図3、北壁地層断面を図4に示す。

第0層は現代の盛土層で、層厚は5～45cmである。

第1層は現代の作土層で、暗灰黄色の中粒～粗粒砂からなり、シルトを含む。層厚は10cm以下である。

第2層は近世の作土層で、オリーブ褐色のシルト質中粒～粗粒砂からなる。下底付近に中礫サイズのチャートが目立って含まれていた。層厚は30cm以下で、本層からは肥前磁器が出土した。

第3層は上半部が灰オリーブ色の中粒～細粒砂質シルトからなり、下半部がにぶい黄褐色の中粒～細粒砂質シルトからなる作土層で、上半部に比べて下半部がやや暗い。

下半部の下底付近には上位層と同様に中礫サイズのチャートが目立って含まれていた。上半部、下半部を合わせた層厚は25cm以下である。本層からは室町時代に属する瓦器のほか、須恵器・土師器・黒色土器や石鏃が出土した。

第4層は灰白色ないし灰オリーブ色の粘土質シルト～シルトからなり、粗粒砂～細礫を含む段丘構成層で、層厚は50cm以上である。上面

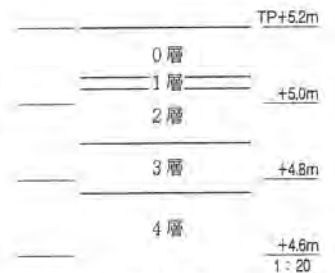


図2 地層と遺構の関係図

層序	標高 TP+5.2m	模式柱状図	岩相	土色	層厚(cm)	おもな遺物	時代
第0層			<現代盛土>	-	5~45		現代
第1層			含シルト 暗灰黄色 中粒～粗粒砂 <現代作土>	2.5Y4/2	≦10		
第2層	+5.0m		オリーブ褐色 シルト質中粒～粗粒砂 <近世作土>	2.5Y4/3 2.5Y4/4	≦30	肥前磁器	近世
第3層 上半部 下半部			灰オリーブ色 中粒～細粒砂質シルト にぶい黄褐色 中粒～細粒砂質シルト <作土>	5Y6/2 10YR4/3	≦25	瓦器・須恵器・土師器 黒色土器・石鏃	室町
第4層	+4.5m		含粗粒砂～細礫 灰白・灰オリーブ色 粘土質シルト～シルト	5Y6/2 ~5/2 5Y7/1	≧50		旧石器

図3 調査地の層序



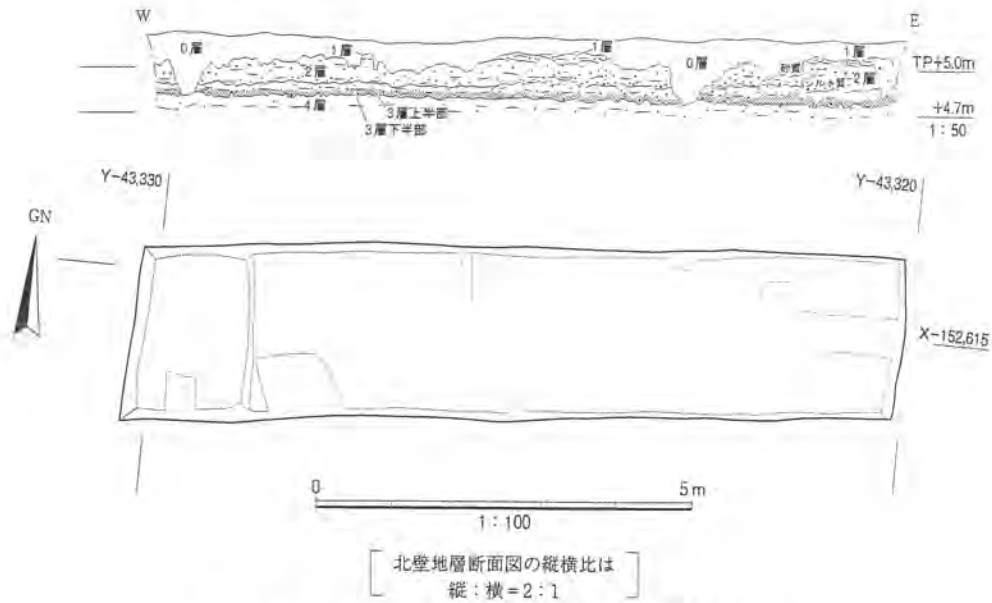


図4 第4層上面検出状況平面図および北壁地層断面図

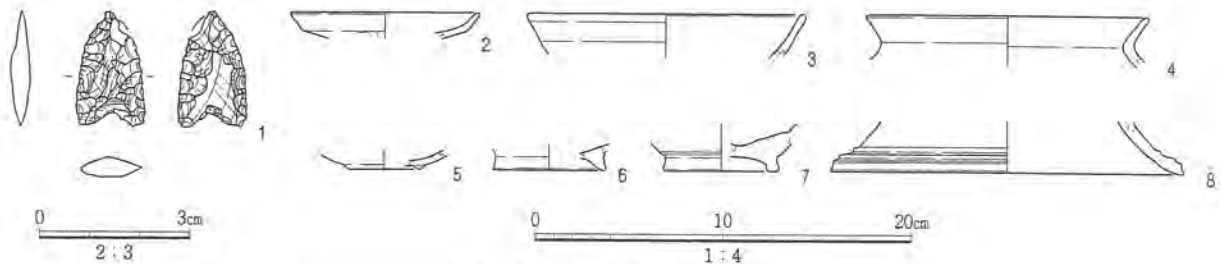


図5 第3層出土遺物実測図

付近には乾痕が観察され、乾痕を埋める白色の充填物中には新鮮な火山ガラスが含まれていた。

## 2. 遺構と遺物

平面的な調査は第3層上面および第4層上面で行った。第4層上面検出状況平面図を図4に示す。

第3層上面および第4層上面には遺構は認められなかったが、第3層中からは以下に述べる遺物が出土した。第3層から出土した遺物実測図を図5に示す。

1は縄文時代後晩期とみられる石鏃である。2・3は13世紀代の瓦器皿・椀、4は9～10世紀頃の土師器甕、5は14世紀代の瓦器椀、6は11世紀末頃の黒色土器椀、7は9世紀代とみられる須恵器壺、8は6世紀前葉とみられる須恵器高杯である。この他に、6世紀後半の須恵器高杯や杯、古代の瓦などが出土した。

### 〈まとめ〉

今回の調査で得られた成果を以下にまとめる。

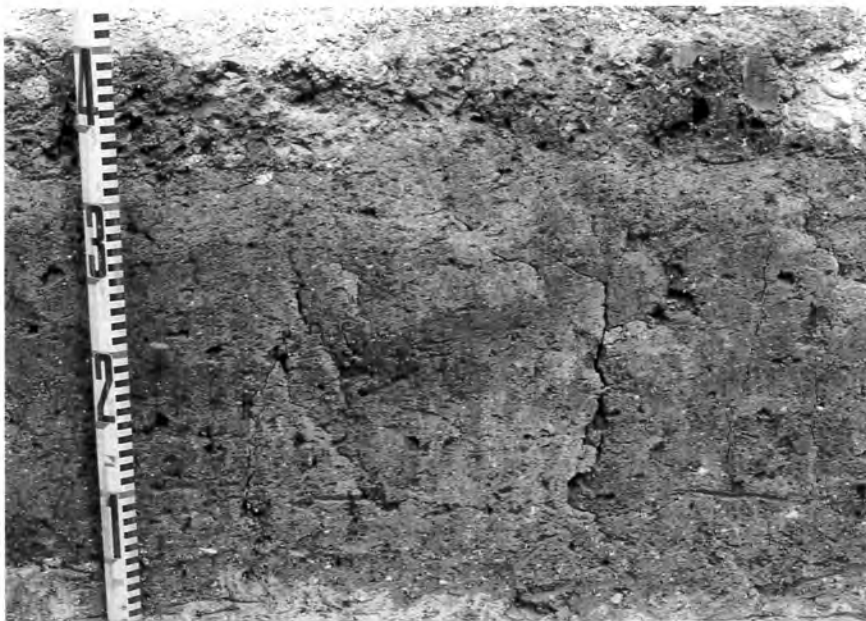
冒頭でも述べたように、調査地北側のTQ95-1次調査地では古墳時代後期の集落到位置していた可能性が指摘されており、それ以降も継続して集落の一部であったと考えられている。今回の調査では遺構を検出することはできなかったが、前項で述べたように、第3層から古墳～室町時代にかけて

の土器が出土したことは、TQ95-1次調査の成果を裏付けるものである。また1点のみであるが、縄文時代後晩期とみられる石鏃も出土したことは、新たな知見となった。本遺跡における調査の例は少なく、縄文時代以降の状況や古墳時代後期の集落については未だ明らかにはなっていない。本調査地の結果を含め、今後行われる調査の結果を合わせて検討していくことが必要である。

#### 引用・参考文献

大阪市文化財協会1995、『田辺4丁目における遺跡所在確認調査(TQ95-1)略報』

北壁地層断面(南から)



第4層上面検出状況  
(東から)



遺物出土状況  
(第3層下底付近、北から)



## 田辺4丁目所在遺跡発掘調査(TQ09-4)報告書

- ・ 調査箇所 大阪市東住吉区田辺4丁目80-1の一部・79-9・79-10・79-11
- ・ 調査面積 22.5㎡
- ・ 調査期間 平成22年1月12日～1月15日
- ・ 調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・ 調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、森下真企

### 〈調査に至る経緯と経過〉

田辺4丁目所在遺跡は古墳～室町時代の遺跡である。近辺には、難波京朱雀大路から南へ続く、古代の道路である難波大道が推定されており、古代から近世にかけての遺跡が多数分布している。山坂遺跡・南田辺遺跡・桃ヶ池遺跡・田辺東之町遺跡などである。しかし、本遺跡は未だ調査例が少なく、その全容は明らかになっていない(図1)。

調査地の周辺では、東に隣接するTQ95-1次調査でTK43型式の須恵器が土壌から出土しており、古墳時代後期の集落遺跡である可能性が指摘されているほか、中世の水田・井戸も検出されている。また、本調査地の南東で実施されたTQ09-1次調査では、土師器・須恵器・瓦器のほか、縄文時代



図1 調査地位置図

図2 調査区位置図

後晩期の石鏃が検出されている。大阪市教育委員会による試掘調査でも、古代～中世の遺物包含層が確認されたため、本調査を行うことになった。

調査は調査地中央やや南西に南北4.5m×東西5.0mで調査区を設定し、2010年1月12日より調査を開始した。現代盛土層から近世作土層までを重機により掘削し、以下、段丘構成層(地山層)までの地表面下約0.9m間を人力で掘下げて調査を行った。1月15日に埋戻し、撤収を含め、現地におけるすべての作業を完了した。

なお、本報告で使用した座標値は世界測地系に基づく。水準値は東京湾平均海面値であり、本文中挿図中ではTP+○mと表記する。本文中の挿図の方位はすべて座標北である。

### 〈調査に至る経緯と経過〉

#### 1. 層序(図3・4)

調査地の現地表面の標高はTP+5.8m前後であり、本調査では現地表面下約0.9m(TP+4.9m)までの地層を確認した。以下に各層の特徴を記述する。

第0層はオリーブ黒色(5Y3/1)細粒砂質シルト層で、現代の整地層および攪乱の埋土である。層厚は30～40cmある。

第1層はオリーブ褐色(2.5Y4/4)極細粒～細粒砂質シルトからなる作土層である。黄褐色細粒砂の偽礫を含む。層厚は10～40cmある。

第2層は黄灰色(2.5Y4/1)極細粒～細粒砂質シルトからなる作土層で、層厚は10～20cmある。

第3層は第3a層・第3b層に2分できる。

第3a層は灰オリーブ色(5Y4/2)～黄褐色(2.5Y5/3)細粒砂質シルトからなる作土層で、層厚は10～15cmある。本層からは中世に属する瓦質土器・瓦器が出土した。

第3b層は暗灰黄色(2.5Y4/2)～オリーブ褐色(2.5Y4/3)極細粒～細粒砂質シルトからなる作土層で、層厚は10cm以下である。本層下面で東西方向の鋤溝を検出した。本層では飛鳥時代の須恵器と中世の須恵器・瓦質土器・瓦器などが出土した。

第4層は灰黄褐色(10YR4/2)～にぶい黄褐色(10YR5/3)極細粒～細粒砂混り粘土質シルトからなる作土層で、層厚は5～20cmある。調査区全域に分布するが、東から西にかけて厚くなる。本層からは、古墳時代後期の須恵器が出土した。

第5層はにぶい黄橙色(10YR6/4)細粒～粗粒砂混り粘土質シルトからなる段丘構成層(地山層)である。上面には乾痕が見られる。層厚は50cm以上ある。

#### 2. 遺構と遺物

平面的な調査は第2層・第3層・第4層で行った。以下にその結果を記述する。

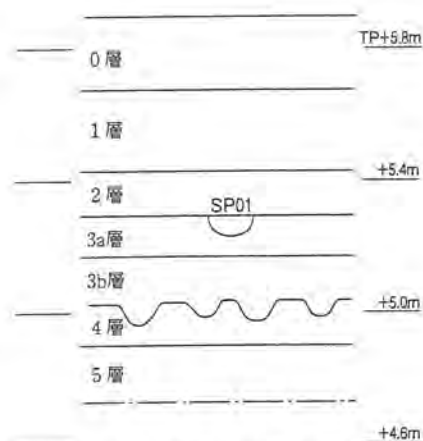


図3 地層と遺構の関係図

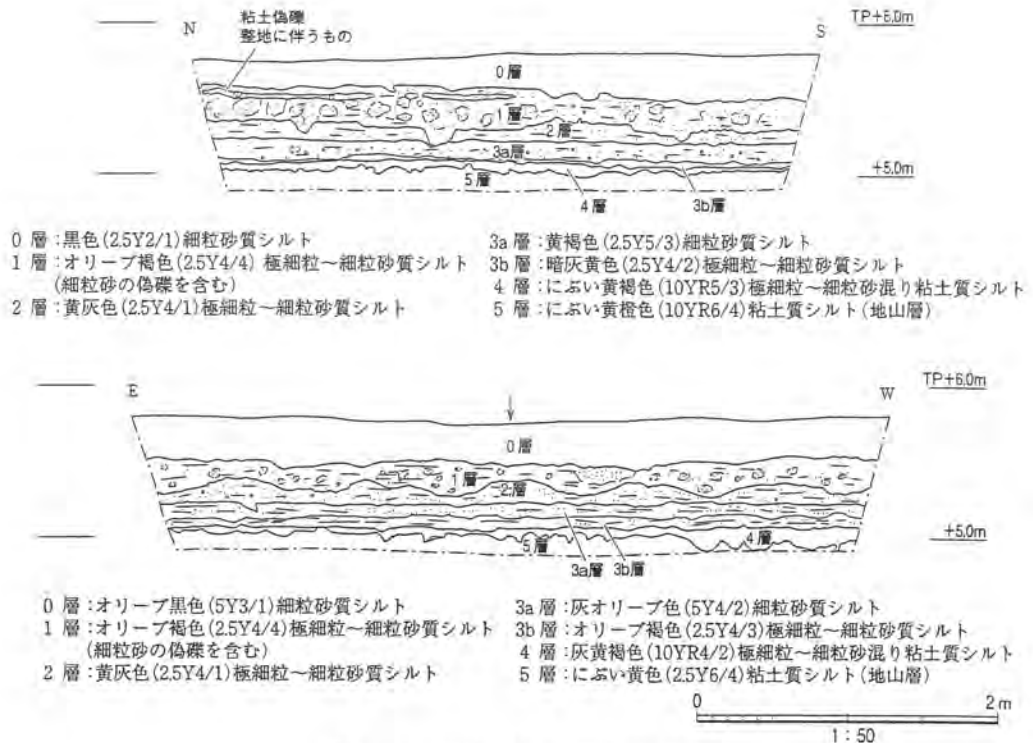


図4 調査区東壁(上)、南壁(下)断面図

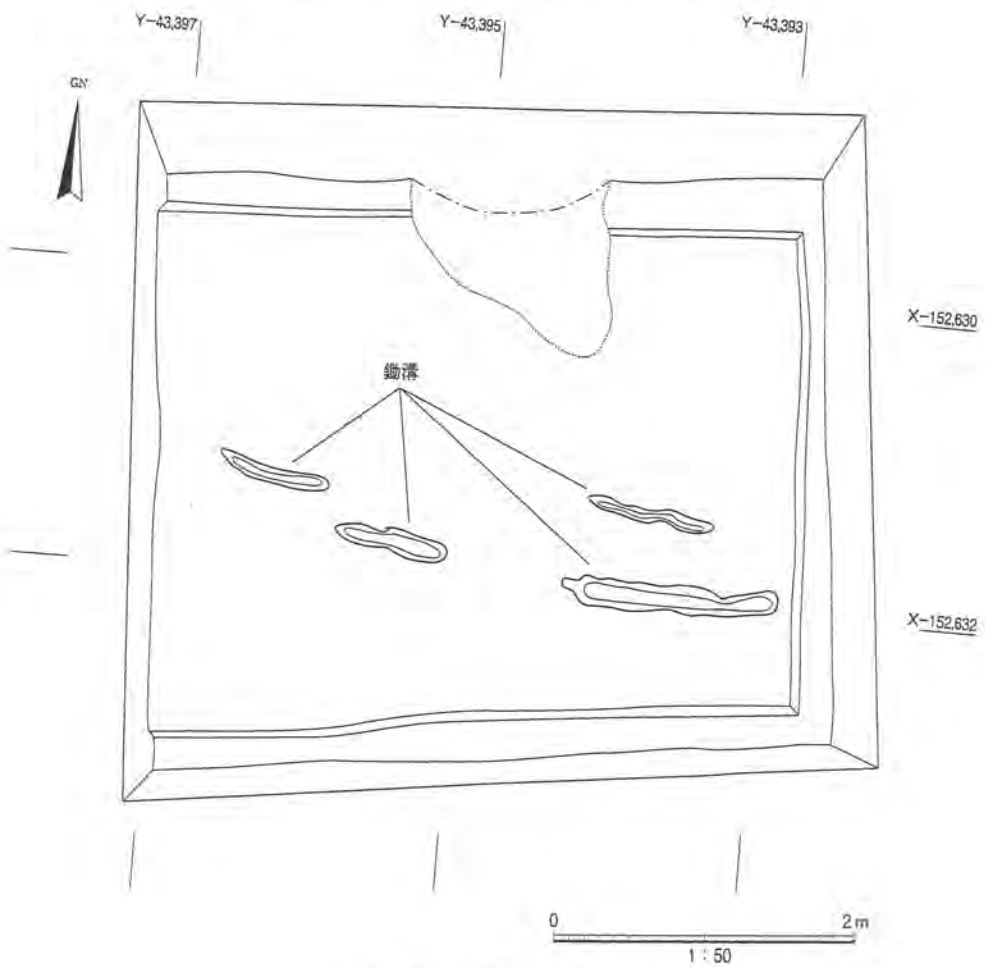


図5 第4b層遺構検出平面図



第2層基底面で、黄灰色極細粒砂質シルトを埋土とする直径0.55m、深さ0.1mのピットSP01を検出したが、遺物は出土しなかった。第3a層では明瞭な遺構を確認することはできなかったが、層中において14世紀代の瓦器および15世紀代の瓦質土器が出土した。第3b層下面からは東西方向の鋤溝を4条確認した(図5)。また、第3b層中からは8世紀中葉の須恵器鉢をはじめ、14世紀代の瓦器・須恵器が出土した。第4層では遺構は認められなかったが、7世紀中葉の須恵器杯G蓋および6世紀中葉から後葉に属する須恵器甕・壺が出土した。

なお、本調査における出土遺物はいずれも細片であり、図化するものはなかった。

#### 〈まとめ〉

本遺跡は、調査地の東側および南東に位置するTQ95-1次・TQ09-1次調査の成果によって、古墳時代後期から継続する集落の一部である可能性が指摘されていた。今回の調査においては、第1～3b層中より古墳時代後期～室町時代にかけての遺物が出土したことから、これまでの調査成果を補強することになった。

また、TQ09-1次調査で出土している縄文時代後晩期の石鏃に関わる時期の遺構・遺物についても、今後、本遺跡における調査事例および調査成果が蓄積すれば、縄文時代以降の景観や古墳時代後期の集落遺跡の具体的な状況が明らかになるものと思われる。

#### 引用・参考文献

大阪市文化財協会1995、『田辺4丁目における遺跡所在確認調査(TQ95-1)略報』

大阪市文化財協会2010、『田辺4丁目所在遺跡発掘調査(TQ09-1)報告書』

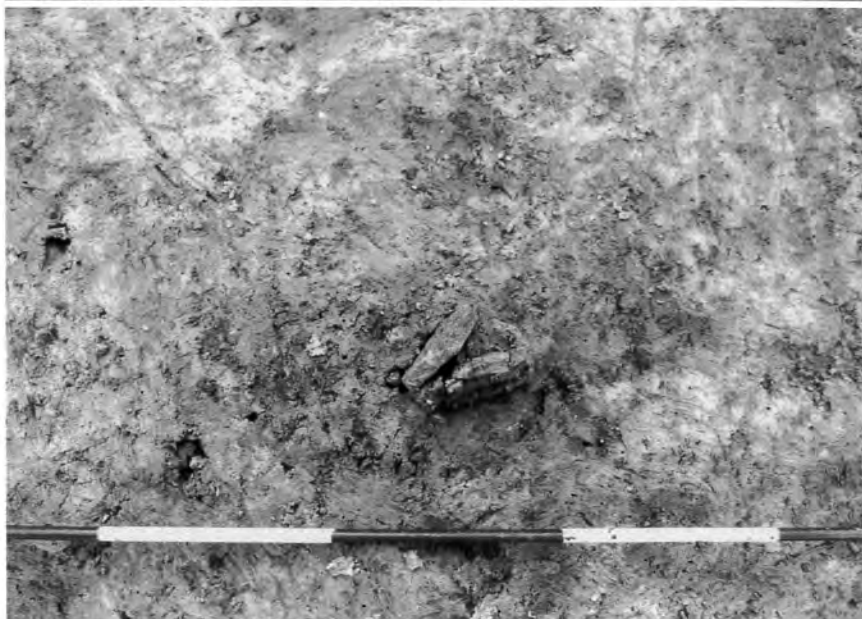
南壁地層断面  
(北から)



第3a層上面  
検出状況  
(西から)



遺物出土状況  
(第4層内・北から)



---

平成 21 年度 大阪市内埋蔵文化財  
包蔵地発掘調査報告書

発行日 平成 23 年 3 月 31 日

発行 大阪市教育委員会  
（財）大阪市博物館協会大阪文化財研究所

編集 大阪市教育委員会文化財保護担当  
（大阪市北区中之島 1-5-20）

印刷 株式会社 フォーラム K

---